2023 年度　学位論文

「自己肯定感」の変遷について

慶應義塾大学　総合政策学部 4 年

稲垣早佑梨(72000896)

要約

本研究の目的は、高垣忠一郎によって提唱され、その後広く使用されるようになった「自己肯定感」がどのような概念であるのかについて検討することにある。

第 1 章では、「精神疾患」の変容を描き出すことに成功した佐藤(2013)を取り上げ、その手法を参考に「1.自己肯定感の類似概念はそれぞれどのように定義づけられているのか」「2.自己肯定感は研究者の間でどのようなものとして理解されているのか」「3.自己肯定感はメディアにおいてどのようなものとして捉えられているのか」「4.一般の人々の間に流布している自己肯定感はどのようなものなのか」という 4 つの問いを設定した。

第 2 章では、自己肯定感の類似概念とされる自尊感情と自己効力感の定義を確認した。その結果、自己効力感については提唱者である Bandura の定義が最も多く用いられていること、自尊感情については研究者によって認識に差があることがわかった。

第 3 章では、自己肯定感を題材とした文献を検討した。その結果、自己肯定感の曖昧さの原因は、「言葉が広まるにつれて提唱者である高垣の定義が取り上げられなくなり、自尊感情や自己効力感との差異がなくなっていったこと」「自己肯定感を題材とした文献の多くが依拠している自尊感情も定義が不明瞭であること」にあると推察できた。

第 4 章では、1991 年～2023 年 6 月までの期間中に全国紙に掲載された記事を対象に据え、KH Coder を用いた計量テキスト分析を行った。その結果、新聞記事上において「自己肯定感」という言葉が登場した最初期である 1991 年～1998 年の記事においても、言葉の用法や意味について記述された記事はほとんどないことが確認された。

また「自己肯定感が低い」とされる対象は、はじめは少年犯罪の被告人、児童生徒や発達障害がある子どもなど、「声を上げることができない立場の弱い人々」であり、彼らに対して当事者以外の大人が「彼らは自己肯定感が低い」と述べていた。しかしその後、女性や性的少数者といった「声を上げることができる立場の弱い人々」が、「自分たちは自己肯定感が低い」と当事者の立場から発信するようになっていた。このような、「自己肯定感が低い」とされる対象の変化と、それを語る主体の変化を読み取ることができた。

第 5 章では、専門家とメディア、一般の人々の相互作用を確認するため、論文と書籍、第 4 章でも対象とした新聞、Google Trends を対象に据えた。

調査の結果、どの時期においても相互作用を確認することができ、特に 2018 年以降は書籍が大きな影響力を持ち、人々の関心を高めたこと、その際に発行された書籍は「大人の自己肯定感」を対象としたものが多かったために、新聞記事上における「自己肯定感」について語る主体の変化が起きたのであろうことがわかった。

また一般の人々の「自己肯定感」のイメージは中島輝が形成した可能性が高く、彼の言う「自己肯定感」が状況依存的なものであることから、一般の人々もまた、自己肯定感を状況によって変動する不安定なものとして捉えている可能性が高いこともわかった。

＜キーワード：自己肯定感、自尊感情、自己効力感、メディア分析、計量テキスト分析＞

目次

第１章　はじめに *5*

1-1.研究背景 5

1-2.主題 5

1-3.先行研究 5

1-4.方法論 6

第２章　自己肯定感の類似概念はどのように定義づけられているのか *9*

2-1.自己肯定感の類似概念とは 9

2-2.対象と方法論 9

2-3.自尊感情と自己効力感の検討 11

2-3-1.自尊感情の定義についての検討 11

2-3-2.自己効力感の定義についての検討 17

2-4.結果と考察 19

第３章　自己肯定感は研究者の間でどのようなものとして理解されているのか *20*

3-1.自己肯定感とは 20

3-2.対象と方法論 20

3-3.自己肯定感の定義についての検討 21

3-4.結果と考察 24

第４章　自己肯定感はメディアにおいてどのようなものとして捉えられているのか *26*

4-1.前提 26

4-2.予備調査とその結果 26

4-3.調査対象 27

4-4.調査方法 30

4-5.1991 年～2023 年 6 月の新聞記事のテキスト分析結果について 30

4-5-1.五紙合計の記事数が 1 桁にとどまっている時期(1991 年～1998 年)について 35

4-5-2.五紙合計の記事数が 50 以下の時期(1999 年～2007 年)について 38

4-5-3.五紙合計の記事数が 51～100 の時期(2008 年～2012 年)について 40
4-5-4.五紙合計の記事数が 101～200 の時期(2013 年～2016 年)について 44
4-5-5.五紙合計の記事数が 201 以上の時期(2017 年～2023 年 6 月)について 46
4-5-6.「自己肯定感」について語る主体の変化について 54
4-6.結果と考察 61
第 5 章　一般の人々の間に流布している自己肯定感はどのようなものなのか 64
5-1.対象と方法論 64
5-2. Google Trends の調査結果について 64
5-3. CiNii における論文数・書籍数の調査結果について 65
5-4.専門家・メディア・一般の人々の相互作用について 66
5-4-1.2010 年前後の新聞記事数と論文数の増加について 66
5-4-2.2014 年前後の新聞記事数と論文数増加について 69
5-4-3.2018 年～2019 年 6 月の書籍数増加と新聞記事数増加及び Google Trends における人気度の上昇について 71
5-4-4.2020 年 4 月～6 月の Google Trends における人気度の上昇について 73
5-4-5.2021 年の書籍数増加について 73
5-4-6.2022 年 1 月の Google Trends における人気度の上昇について 74
5-5.結果と考察 74
第 6 章　おわりに 76
【謝辞】 79
【参考文献】 79
【付録】 88

第１章　はじめに

1-1.研究背景

近年、「現代日本の若者の自己肯定感の低さ」は社会問題の一つとなりつつあり、またこれはいじめなどの問題行動や精神疾患とも関連があるとされている。内閣府の「平成 26 年版 子ども・若者白書」の調査結果においても、日本の子どもの中で、自分自身に満足している者は 5 割弱、自分には長所があると思っている者は 7 割弱であり、いずれも諸外国と比べて最も低いことがわかっている。このような状況に伴い、「自己肯定感」という言葉も広く知られるようになってきた。しかし、自己肯定感の定義は研究者によって異なっており、また類似概念(自尊感情や自己効力感など)との関係、差異も明らかになっていない。このような状況ではそもそもどのような条件を満たせば「自己肯定感が高い」ことになるのかもはっきりせず、「自己肯定感が低い現状」を抜け出すことも難しいのではないかと考え、定義の整理を試みた。

1-2.主題

本研究では、「自己肯定感」という言葉が、すでに「自尊感情」や「自己効力感」といった類似概念が存在する中でどのような意味を持って生まれ、その意味や使われ方が人々の間に広まる中でどのように変化していったのかを探ることを目的とする。

1-3.先行研究

本研究同様「言葉の意味の広がりや変化の過程を探ること」を目的とした研究としては、佐藤(2013)がある。佐藤(2013)は、精神疾患に関する「言説の変容過程を通時的に記述し、近代日本における大衆的な精神疾患言説の実態、およびその社会的背景を考察すること」「精神疾患に関する言説が、専門家間での議論を超えて、広く一般社会に広まる理由を、比較歴史社会学の視点から分析すること」を目的としており、読売新聞や朝日新聞など 1 万以上の記事を分析の中心に据え、さらにそれらに特徴的な記述を明らかにするため、補助的データとして精神疾患に関する医学論文、一般向けの啓蒙書、東京大学医学部図書館所蔵の精神疾患に関する新聞記事集(スクラップブック)なども分析の対象としている。

このようにして佐藤(2013)は気狂、神経衰弱、ヒステリー、外傷性神経症、ノイローゼといった精神疾患言説の様態とその変容過程について分析を行っており、赤川(2017)は佐藤のこの研究を「構築主義的な「概念の歴史」のアプローチと,T.スコッチボルを中心として、ある歴史的現象が生起する要因を比較に基づいて特定する比較歴史社会学の架け橋を果たしている」としている。前者の目的についての調査結果として、佐藤は「あるカテゴ

リーの創出によって人間の行為やアイデンティティが変容させられるという側面だけではなく、そこで変容させられた人々の意識や実践のあり方が当該カテゴリーそのものを再起的に変えていく」というループ効果を主張している。これはつまり、医学とジャーナリズムからもたらされる医学的知識を受容した一般人が、彼らの情報をもとに自らを＜病める主体＞として認識して行動を起こすことによって、医療者に認知される患者数の増加や臨床像の変化など既存の医学的知識では説明ができない現象が出現し、これによってある時代の精神疾患言説が新たな言説へと再編成を余儀なくされ、そしてこの再編成は医学者集団やジャーナリズムが担う、という相互作用のことである。後者については、精神疾患の流行の背景に医学研究や経済的要因、病気の性質など計 14 の要因を想定し、その上で帝大医学部の関与、精神医療体制の変動期、病因の不明確さ、政治的抑制因子の不在という 4 つの要因が言説の流行に影響を与えたと述べている。

佐藤(2013)は膨大な新聞記事およびその関連資料を対象に据えることで、精神疾患という曖昧な事象の変容とそれを生み出す人々の実践の在り方を描き出すことに成功している。「自己肯定感」もまた、佐藤(2013)が扱った精神疾患と同じような曖昧さを持つ概念だが、後述するように「自己肯定感」という言葉についての論文や書籍、また「自己肯定感」の類似概念として例に挙げられることが多い「自尊感情」についての論文は数多く存在するものの、それらは多くの場合尺度の作成やそれによる測定などにとどまっており、言葉の意味や用法そのものに着目し、佐藤(2013)のような調査を行った研究は管見の限り見当たらない。

そこで本研究では、佐藤(2013)を参考に、論文、新聞、研究者ではない一般の人に向けて出版された図書まで幅広い媒体を対象に据え、「自己肯定感」という言葉がどのような意味を持って生まれ、その用法がどのように変化しているのか、言葉の意味と用法そのものを探る。この点に本研究の新規性が見出されるだろう。

1-4.方法論

本研究では、佐藤(2013)の方法に則りながら「自己肯定感」という言葉の変遷を辿るため、以下の 4 つのリサーチクエスチョンを設置する。

・RQ.1：自己肯定感の類似概念はそれぞれどのように定義づけられているのか
・RQ.2：自己肯定感は研究者の間でどのようなものとして理解されているのか
・RQ.3：自己肯定感はメディアにおいてどのようなものとして捉えられているのか
・RQ.4：一般の人々の間に流布している自己肯定感はどのようなものなのか

佐藤(2013)は方法論の検討後、すぐに新聞記事の調査に入っており、論文はあくまで補助的な資料として扱っている。そこで「自己肯定感」という言葉が新聞に登場した最初期

の記事を閲覧したところ、「自己肯定感」という言葉についての専門家の語りはほとんど見られなかった。佐藤と異なり、1 つの言葉のみの変遷を辿ることを目的としている本研究の場合には、言葉の出自や専門家たちの見解をよりはっきりと示すために別でリサーチクエスチョンを設定する必要があると考え、RQ.1 及び RQ.2 を設定した。

まず RQ.1 では、結果的に大衆化するに至った「自己肯定感」という言葉がどのような過程で生まれたのか、その背景を確認するために、「自己肯定感」という言葉の誕生以前から存在した「自尊感情」や「自己効力感」といった類似概念がそれぞれどのように定義づけられているのかについて、論文を対象に調査する。

もともと心理学の専門家である高垣は、これらの類似概念の存在を知った上で「セルフ-エスティーム(自尊感情)の翻訳としての自己肯定感ではない」として「自己肯定感」という言葉を新たに提唱している。となれば、これらの類似概念と自己肯定感との間には何かしらの違いが存在するはずである。差別化された類似概念について知り、「自己肯定感」との差異を知ることも「自己肯定感」という言葉の意味理解へとつながると考え、RQ.1 を設定した。

RQ.2 では、「自尊感情」や「自己効力感」とは異なるものとして誕生したはずの「自己肯定感」という言葉を、その提唱者高垣忠一郎をはじめとする研究者たちがどのように扱っていたのか、また類似概念とはどのように使い分けていたのかについて調査するため、RQ.1 同様論文を対象に分析を行う。

尚、RQ.1,2 で検討する論文は、「自己肯定感」とその類似概念(自尊感情、自己効力感)に関連する論文に限定し、他の「自己」に関する概念については取り上げない。

また佐藤(2013)は、精神疾患言説の流行プロセスにおいて各時代の専門家が果たしてきた役割について、相反する二つのものがあると述べている。佐藤はそれらについて、「一つは、新たに構成された医学的知識を積極的に社会へと流通させ、精神疾患が「流行」する前提となる環境を整える役割。二つ目は、ある特定の診断名があまりにも広く社会に流通した場合、その無限定な適用や拡張に警鐘を鳴らし、「流行」の拡大を阻止する役割」だとしており、前者を「流行の先導者としての役割」後者を「流行の抑制者としての役割」としている。本研究において取り上げる「自己肯定感」は佐藤が調査対象とした精神疾患とは異なるため、必ずしも同じプロセスが見られるとは言い切れないが、RQ.1,RQ.2 で取り上げる論文上において、専門家が上記のような役割を果たしていると見られる記述についても確認する。

RQ.3 では佐藤(2013)に倣い、メディアの調査に取り組む。「自己肯定感」もまた、佐藤が扱った精神疾患の病名同様、はじめは専門家を中心とした一部の人々の間でのみ用いられていた言葉であった。それが一般に広く使われるようになったこと、またその過程で意味が変化したことの要因には、専門家と一般の人々をつなぐ「メディア」の存在があると考え、調査を行うこととした。またここでは、佐藤同様分析の恣意性を回避するため、資料の幅を限定し、その中から「自己肯定感」という言葉をめぐる言説の変化を捉える方針

を取るべく、対象は新聞のみとする。さらに RQ.3 では、佐藤同様、記事数の変動をもとに新聞上における「自己肯定感」についての言説の変容過程を、5 つの時期に区分して記述・分析することとした(対象を新聞に限定した理由や、詳しい調査方法、時期区分の基準については RQ.3 部分に預ける)。

最後に、佐藤(2013)が主張する専門家とメディア、一般の人々の間に生じる相互作用について新聞記事以外の媒体も加えた上でより詳細に確認を行い、同時に一般の人々の「自己肯定感」についてのイメージも探るため、RQ.4 を設定した。

RQ.4 について、当初は X(旧 Twitter)を用いた言説分析を通じて一般の人々が「自己肯定感」をどう捉えているのか、またどの媒体から最も影響を受けているのか調査することを予定していた。しかし X のシステム変更により API の取得に困難が生じたため、ここでは、Google Trends を通じて多くの一般の人々が「自己肯定感」という言葉に着目し始めた時期を特定した上で、その前後に人々が注目するに至ったきっかけがあるか否か、きっかけがあると考えられる場合、それにより人々がどのような文脈の中で「自己肯定感」を捉えたと考えられるのかを調査する。

また、それと並行して CiNii 上に掲載されている「自己肯定感」という言葉をタイトルに含む論文数・書籍数の推移や発行書籍の NDC(日本十進分類法)の割合の変化を追うことで、それが RQ.3 において検証する新聞記事や一般の人々の反応(Google Trends)とどのように関係しているかを調査する。特に一般の人々への影響については、人々がどの媒体から最も影響を受け、「自己肯定感」という言葉に対してどのようなイメージを持ったと考えられるのかについてまで検証したい。

第 2 章　自己肯定感の類似概念はどのように定義づけられているのか

2-1.自己肯定感の類似概念とは

ここでは、自己肯定感の類似概念として、近年の心理学研究において最もよく取り上げられる概念の一つである自尊感情、自己肯定感だけでなく自尊感情の類似概念としても扱われることの多い自己効力感(福留・森永,2018;小池・伊藤,2015)を取り上げる。

自尊感情(self-esteem)について扱った研究は国内外に多く存在しており、Kitano(1989)はタイトルに「self(自己)」を含む論文は 3 万件を超えており、そのうち約 6500 本が「self-esteem(自尊感情)」について調査したものであるとしている。このように、自尊感情は心理学分野の中で中心的な位置を占めているが、Scott(2003)は「自己」を対象とし、定義づけを行っている研究や「自己概念」及び「自尊感情」を測定する尺度を用いた研究のレビューを行った上で、頻繁に利用されている「自己概念」という用語は、実は「自尊感情」とほとんど同じ意味のものであり、「自己概念尺度」が測定しているものも「自尊感情」であるとしている。

さらに Scott(2003)は、近年の「自己」研究は 20 世紀初頭以前に行われていたような理論的な研究ではなく、個人の測定やコントロールに焦点を当てた実証的な研究であり、その中で自己を定量化し、測定するための自己評価尺度や自尊感情尺度などが作成されたと述べている。しかし自尊感情尺度によって測定できるとされている「自己」には、20 世紀初頭以前の「自己」研究が対象としていたような主体性や自己意識、道徳規範などは含まれておらず、この点に問題があると Scott は主張している。なぜならば、そもそも「自分を尊敬できるか否か」の判断基準には道徳規範が絡むものであり、その道徳的な規範は社会的な文脈の中で築かれるものであるため、そういったものを考慮せずに、自尊感情を測定できると考えることは誤りであるからだ。

このように、問題もあると指摘されている「自尊感情」だが、現在に至るまで日本でも多くの研究が蓄積されている。そこで日本においては自尊感情がどのように捉えられているのか、また問題点についてもどのように指摘がなされているのかについて記述する。さらに、佐藤(2013)が主張する、専門家の「流行の先導者としての役割」「流行の抑制者としての役割」についても当てはまるものがあるかどうか検証する。

2-2.対象と方法論

本研究では「教育心理学研究」「心理学研究」「パーソナリティ研究」に掲載されている論文の一部を対象とし、それぞれの用語の定義に関する記述を抜き出すことで、これらがどのように定義づけられているのかを調査した。具体的には、J-STAGE 上で「①教育心理学研究、心理学研究、パーソナリティ研究のいずれかに掲載されており」、「②自尊感情・自己効力感がタイトルもしくはキーワードに含まれている」論文を検索した。

その結果、自尊感情においては 51 本、自己効力感においては 19 本の論文が条件に合致したため、これを対象とした。また対象に据える雑誌(教育心理学研究、心理学研究、パーソナリティ研究)については、「教育心理学年報」に 1986 年から掲載されている人格分野の研究動向についての論文 37 本に目を通し、50%以上の確率で対象に選定されているものを抽出した。対象を選ぶ上で「教育心理学年報」を参考にした理由は、心理学の学術雑誌のうち、継続的に研究動向を掲載しているものはこの他になかったため、また中でも参考にする論文を「人格分野」のものに限定したのは、「自尊感情」や「自己肯定感」が「自己」及び「自己概念」と関連するものであり、これらは主に人格分野の研究対象に当たるためである。以下で、自尊感情及び自己効力感それぞれの定義を整理する。

［表 1：教育心理学年報掲載論文(1986 年～2022 年) 人格分野の研究動向において対象に選定されている雑誌の一覧］

雑誌名	回数
教育心理学研究	37 回
心理学研究	30 回
パーソナリティ研究(性格心理学研究)	20 回
発達心理学研究	16 回
社会心理学研究	7 回
青年心理学研究	5 回
Japanese Psychological Research	4 回
カウンセリング研究	3 回
健康心理学研究	3 回
心理学臨床学研究	3 回
心理学評論	2 回
実験社会心理学研究	2 回
遺伝子医学	1 回
応用心理学研究	1 回
教育医学	1 回
教育実践学研究	1 回
こころの科学	1 回
心身医学	1 回
心理科学	1 回
日本公衆誌	1 回
犯罪心理学研究	1 回
臨床心理学研究	1 回

2-3.自尊感情と自己効力感の検討

2-3-1.自尊感情の定義についての検討

自尊感情は、James によって“自尊感情=成功/願望”と定式化された概念であり、彼はこれを、個人が重要であると考えている領域における成功体験によって上昇、また失敗体験によって低下するものとして捉えている(豊田・松本,2004)。しかしこの自尊感情についての定義は研究者によって異なっており、このことはこれまでにも指摘がなされている。榎本(2006)は、こうした状況を踏まえて「自尊感情の概念自体実はそれほど単純な扱いが許されるわけではない」とした上で、現在自尊感情については、特性的自尊感情と状態的自尊感情を区別する立場、意識化された自尊感情と意識化されていない自尊感情を区別する立場、条件付きの自尊感情と真性の自尊感情に区別する立場、個人的自尊感情と集合的自尊感情に区別する立場などがあるとしている。

本研究では榎本(2006)を踏まえ、自尊感情について取り上げた研究を「1.特性的自尊感情と状態的自尊感情を区別する立場」「2.意識化された自尊感情と意識化されていない自尊感情を区別する立場」「3.条件付きの自尊感情と真性の自尊感情に区別する立場」「4.個人的自尊感情と集合的自尊感情に区別する立場」「5.自尊感情を区別していない立場」「6.その他」の 6 つに大別した上で定義についての記述を整理した。

そして、この基準に基づいて、教育心理学研究、心理学研究、パーソナリティ研究のいずれかに掲載されており、自尊感情をタイトルもしくはキーワードに含む 50 本の論文を分類したところ、結果は以下の表のようになった。

［表 2：対象論文の分類結果］

立場	研究
特性的自尊感情と状態的自尊感情を区別する立場	・阿部・今野(2005) ・阿部・今野(2007) ・大谷・中谷(2011) ・市村(2012) ・新延・今野(2014) ・箕浦・成田(2016) ・小川(2020) ・佐藤(2022)
意識化された自尊感情と意識化されていない自尊感情を区別する立場	・小塩・西野・速水(2009) ・藤井(2014) ・市川・望月(2015)
条件付きの自尊感情と真性の自尊感情に区別する立場	・伊藤・小玉(2005) ・伊藤・小玉(2006) ・伊藤・川崎・小玉(2011) ・笹川(2015)

個人的自尊感情と集合的自尊感情に区別する立場	
自尊感情を区別していない立場	＜自尊感情の定義についての記述あり＞ ・松岡・加藤・神戸・澤本・菅野・詫間・野瀬・森(2006) ・太田(2007) ・竹田(2012) ・小塩・岡田・茂垣・並川・脇田(2014) ・岡田・小塩・茂垣・脇田・並川(2015) ・神野(2018) ・佐々木(2018) ＜自尊感情の定義についての記述なし＋Rosenberg(1965)の尺度利用＞ ・菅沼(1997) ・伊藤(2001) ・水野・石隈(2001) ・佐久間・無藤(2003) ・若本・無藤(2004) ・松岡(2006) ・若本(2007) ・北村(2008) ・上地・宮下(2009) ・趙・松本・木村(2009) ・野村(2009) ・永井(2010) ・岡田(2011) ・中間(2013) ・西村・村上・櫻井(2015) ・水谷・雨宮(2015) ・木村(2019) ・西村・藤原・村上・福住(2022) ＜自尊感情の定義についての記述なし＋その他の尺度利用＞ ・小塩(1998) ・齊藤(2015) ・齊藤・松本・菅原(2016) ・伊藤(2017) ・齊藤・松本・菅原(2020) ・鈴木・加藤(2023)
その他	・田村・石隈(2002) ・原田(2008)

	・市村(阿部)(2011) ・市川・望月(2014) ・福留・藤田・戸谷・小林・古川・森永(2017) ・福留・森永(2018)

特性的自尊感情と状態的自尊感情を区別する立場に当てはまる論文としては、小川(2020)があった。本文中には自尊感情という言葉そのものの定義についての記述、特性的自尊感情・状態的自尊感情の定義についての記述のいずれも見当たらなかったが、研究の目的として特性自尊感情との関連が示されている P-SEI 尺度(自尊感情の変動性を測定する概念)の日本語版の作成が掲げられていたことから、この立場に分類した。なお、「特性的自尊感情」とはパーソナリティ特性のような個人の安定的な特徴としての自尊感情であり、これは時間や状況を超えて比較的持続して，自己全体をどのように見ているかを意味するため変動しにくいという性質を持つ(箕浦,・成田,2015)。一方「状態的自尊感情」とは、経験した出来事に随伴した自己価値の感覚であり，瞬間的な感情的反応を意味する。そのためこれは経験した出来事に応じて変動し得る(箕浦,・成田,2015)。

意識化された自尊感情と意識化されていない自尊感情を区別する立場に当てはまるものとしては藤井(2014)と市川・望月(2015)があった。藤井(2014)においては、自尊感情の定義に関する記述として、伊藤(2002)を引用した「自分自身に対する肯定的な感情,自分を価値ある存在として捉える感覚と定義される」というものがあった。また顕在的な(意識化された)自尊感情・潜在的な(意識化されていない)自尊感情についての記述としては「Jordan et al. (2003)は,意識的な報告や回答から得られる”顕在的な(explicit)SE と,無自覚な回答から得られる”潜在的な(implicit)”SE を組み合わせることで,種類の異なる高 SE 者の特徴を明らかにする試みを行った」という記述があった。

市川・望月(2015)においては、自尊感情の定義に関する記述として「自尊感情は、“自己に対する肯定的あるいは否定的な態度(Rosenberg,1965)”,“自己概念と結びついている自己の価値と能力の感覚(遠藤,1992)”などと定義され,古くから様々な社会的相互作用の産物であると考えられてきた」というものがあった。また顕在化(意識)された自尊感情は Rosenberg の自尊感情尺度などで測ることができるものであるとしており、その背景にあるものとして潜在的自尊感情を挙げている。またこれについては Greenwald&Banaji (1995)の「自己に連合した,あるいは自己に連合していない対象への評価に基づいた,内省的に同定できない(あるいは正確に同定できない)自己への態度の効果」という定義を引用して説明していた。

このように、両研究において、意識化された自尊感情についての見解は一致しており、意識化されていない自尊感情についても少なくとも類似したものとして捉えられているであろうことは推測できた。しかしそれぞれが依拠している先行研究は異なるため、両者が

どの程度一致しているのかを知るためには、より詳細な調査が必要であるといえるだろう。

自尊感情を条件付きの自尊感情と真性の自尊感情に区別する立場としては、伊藤・小玉(2005)、伊藤・小玉(2006)、伊藤・川崎・小玉(2011)があった。伊藤・小玉(2005)、伊藤・小玉(2006)、伊藤・川崎・小玉(2011)においてはそのいずれも自尊感情そのものの定義について触れている記述は見当たらなかった。また条件付きの自尊感情・真性の自尊感情についてはそれぞれ論文中で「随伴性自尊感情(contingent self-esteem)」「本当の自尊感情(true self-esteem)」という言葉で論じられており、いずれの研究でも Deci&Ryan(1995)に基づき、「随伴性自尊感情」は「自己価値の感覚が外的な基準に依存している」もの、「本当の自尊感情」は「自己価値の感覚が社会的な成功や失敗に依存しておらず,自分が自分自身でいられることから自然に得られる」ものと定義付けがなされていた。またこれに加え、伊藤・川崎・小玉(2011)では「随伴性自尊感情」は外的な評価による影響を受けやすいために不安定な性質を持つこと、本当の自尊感情はそうしたものの影響を受けにくいために安定した性質を持つことも指摘されていた。

個人的自尊感情と集合的自尊感情に区別する立場については今回対象となる研究はなかったため、続いては自尊感情を区別していない立場にあたる論文について整理する。まず、ここに分類されたものの中には、本文中に自尊感情の定義について記述がなかったものも多く含まれた、という点に注意が必要である。ここでは、先に定義が明文化されていた論文について取り上げ、その後定義についての記述が見受けられなかったものについて整理をする。

小塩・岡田・茂垣・並川・脇田(2014)では自尊感情の定義に関する記述として「自尊感情は,James(1890)によって成功(success)/願望(pretensions)として定式化されてから,多くの心理学者たちの注目を集めてきた概念である。自尊感情は「自己に対する肯定的または否定的態度」(Rosenberg,1965)と言われたり、人々が自分のことを好ましいと思ったり,自分を有能だと信じたりする程度を反映した自己の評価的側面(Zeigler-Hill,2013)であると言われたりする。自尊感情の定義は研究者によって異なる面があるとは言え、自分自身に対する全体的評価感情の肯定性,すなわち自分自身を基本的に良い人間,価値ある存在だと感じている点でおおよそ共通する(遠藤,2013)」というものがあった。よって小塩・岡田・茂垣・並川・脇田(2014)はどこか特定の立場に立って「自尊感情」を捉えているというよりは、あくまで複数の定義を紹介するにとどまっていると言うことができる。

竹田(2012)は自尊感情を Rosenberg(1965)に依拠し、「自分自身を全体として”これでよい(good enough)”とする感覚」として定義づけていた。佐々木(2018)においては、本文中には自尊感情の定義に関する記述はなかったが、調査に使用した質問紙から文部科学省の「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」に依拠したことが読み取れた。また尺度は Rosenberg (1965)の翻訳版が用いられていた。松岡・加藤・神戸・澤本・菅野・詫間・野瀬・森(2006)は自尊感情の定義について、梶田(1988)に依拠して「自尊感情は自

分自身を基本的には価値あるものとする感覚であり,生きていく上での心理的な土台として不可欠なものである」と記述していた。太田(2007)においては自尊感情についての定義付けは行われていなかったものの「全体的自己評価とは自尊感情と同義であり」という記述から、Harter(1999)の「全体的自己評価」と自尊感情とを同義のものとして捉えていると読み取ることができた。

菅沼(1997)、伊藤(2001)、水野・石隈(2001)、佐久間・無藤(2003)、若本・無藤(2004)、松岡(2006)、北村(2008)、趙・松本・木村(2009)、野村(2009)、永井(2010)、中間(2013)、西村・村上・櫻井(2015)、水谷・雨宮(2015)、西村・藤原・村上・福住(2022)の 14 研究においては、自尊感情そのものの定義について触れている記述は見当たらなかった。しかし、研究内で Rosenberg(1965)の尺度の翻訳版を用いていたことから、立場としては Rosenberg に依拠している可能性があると推測される。

小塩(1998)においては自尊感情そのものの定義について触れている記述は見当たらなかったが、尺度としては Janis&Field(1959)の自尊感情尺度をもとに作成された遠藤・安藤・冷川・井上(1974)による自尊感情尺度を 2 件法に変更して使用していた。齊藤(2015)においても、自尊感情そのものの定義について触れている記述は見当たらず、尺度としては「Harter(1988)の日本語版(古澤,1996)を 4 件法に改定した改定・自己知覚尺度青年版(眞榮城・菅原・酒井・菅原,2007)のうち学業能力評価,社交性,親友関係評価,全体的自己価値観について眞榮城ら(2007)の因子分析の結果で因子負荷量の高かった各 3 項目ずつ合計 12 項目を使用した」と記述があった。伊藤(2017)においても自尊感情そのものの定義について触れている記述は見当らず、尺度としては伊藤・若本(2010)の東京都版自尊感情尺度を使用していた。齊藤・松本・菅原(2020)においても自尊感情そのものの定義について触れている記述は見当たらず、尺度としては Kid-KINDL questionnaire(ravens-Sieberer&Bullinger,1998)の日本語版である小学生版 QOL 尺度(柴田他,2003)の下位領域のうち「自尊感情」4 項目を使用していた。

その他には、自尊感情を独自の方法で捉えている研究を分類した。市村(阿部)(2011)では、Baumeister(1998)に依拠して自尊感情を「自己に対する肯定的評価」とした上で、これを自尊感情の高さと変動性の 2 側面から構成される 4 群に区分して捉えている。

また同様に変動性に着目している研究として、原田(2008)があった。原田(2008)は自尊感情そのものの定義については触れておらず、また対象としても自尊感情そのものではなく、「梶田(1988)の言う「自尊心」を支える根」にあたる「随伴性自尊感情の領域」を設定している。「随伴性自尊感情」は先述した通り「自己価値の感覚が外的な基準に依存している」ものであり、変動しやすいものであることが指摘されているため、自尊感情の「変動性」に着目しているこの 2 研究は「条件付きの自尊感情と真性の自尊感情に区別する立場」と比較的近い位置にあると考えられる。

また福留・森永(2018)は自尊感情そのものの定義には触れていないが、先行研究に基づき研究内で使用している Rosenberg(1965)が 2 因子からなるとしてこれを「肯定的方法因

子」と「否定的方法因子」に分類している。これと類似した研究としては、福留・藤田・戸谷・小林・古川・森永(2017)がある。この研究でも自尊感情の定義については記述がないが、Rosenberg(1965)の尺度を「肯定的自己像の受容」と「否定的自己像の拒否」の 2 側面からなるものとしている。田村・石隈(2002)は研究内で「教師としての自尊感情」をテーマとしているが、「自尊感情」の定義について、また「教師としての自尊感情」の定義についてのいずれも本文中には記載がなかった。

総合的に見れば、Rosenberg(1965)の尺度を使用した研究が多くみられることから、これに依拠して「自尊感情」を捉えている研究が多いと推測できる。しかし Rosenberg 自身は自尊感情を「「とてもよい(very good)」と「これでよい(good enough)」の 2 つの領域からなる」ものとして捉えており(望月・近藤・宮森,2016)、「自尊感情を何かしらの基準を用いて区別する立場」にあると考えることもできる。しかし、Rosenberg(1965)に依拠していると推測できる研究のうち、このことについて触れている研究はなく、それぞれの研究が「とてもよい」と「これでよい」のどちらを想定しているのかも読み取ることができなかった。そのため、今回はすべて「自尊感情を区別していない立場」に分類した。

このように、自尊感情は研究者ごとにさまざまな捉え方があり、その問題については度々指摘がなされてきた(榎本・稲本・松田・梅垣 2001;榎本・2006;榎本・2013)。一般の人々を対象に発表されたものではないとはいえ、これらの論文については佐藤(2013)が言う「流行の抑制者としての役割」を部分的に果たしていると考えることはできるかもしれない。

また、今回分類の基準とした「状態的自尊感情と特性的自尊感情」「意識化された自尊感情と意識化されていない自尊感情」「条件付きの自尊感情と真性の自尊感情」には共通点も存在する。それが、自尊感情を 2 つに分けて捉えているという点、また前者は不安定な自尊感情であり、後者は安定的な自尊感情である、という点だ。前者が不安定であるのは、その場の成功や被受容体験などの状況や経験に依拠しているためであり、後者が安定的であるのは尺度による測定の対象がより長期的な、状況や時間によって変動しない自己のベースラインとなっているためであろう。

また自尊感情とは「自分で自分をどう捉え、どう評価しているのか」をあらわしたものであり、ここには「評価する自分」と「評価の対象となる自分」が存在する。そして、前者の不安定な自尊感情においては、「評価する自分」は他者からの評価や周囲との比較に基づいて「評価の対象となる自分」を評価し、後者においては「評価する自分」は周囲の状況に基づくことなく「評価の対象となる自分」を評価すると想定されているのだと考えることができる。しかし、先行研究で Scott(2003)が「評価」には社会の中で構築された道徳規範が絡むと指摘していたことからも分かるように、「評価する自分」自体も、他者との関わり合いによって作られたものであることを考えれば、他者からの評価や自身の社会的な立ち位置を一切視野に入れず自分を評価することが本当に可能であるのか、疑問が残る。

実際、このような理由もあって自尊感情、特に後者の「他人からの評価に依存しない自尊感情」については非科学的であるという指摘も存在するが、自尊感情は現在に至るまで自己評価をめぐる重要な概念として、問題を孕みつつも取り上げられ続けている。

2-3-2.自己効力感の定義についての検討

自己効力感(self-efficacy)とは Bandura によって提唱された概念であり、これは具体的な個々の課題や場面に依存しない効力感である「特性的自己効力感」と、個々の課題(数学のテストやプログラミングなど)に依存する「領域固有の自己効力感」の 2 つに分けられるとされている(Bandura,1977)。

先ほど検討した「自尊感情」が自己の価値への態度の表れであるのに対し、自己効力感は個人の能力についての考え方や可能性の認知として捉えられている(小池・伊藤,2015)。

また自己効力の信念の源になるものとして、Bandura は忍耐強い努力によって障害を乗り越えた体験(制御体験)や、自分と同じような人々が努力し、成功する場面を見ること(代理体験)、ある行動を習得する能力があると説得されること(社会的説得)に加え、生理的・感情的状態も重要であると指摘している。

本研究ではこれを踏まえ、自己効力感について取り上げた研究を「1.特性的自己効力感を対象にしているもの」「2.領域固有の自己効力感を対象にしているもの」「3.両者の関係性を探っているもの」「4.いずれにも当てはまらないもの」の 4 つに大別した上で、「1.自己効力感そのものの定義について触れているか否か」「2.自己効力感が 2 つに分けられることについて触れているか否か」という基準に基づいて定義についての記述を整理する。

そして、この基準に基づいて、教育心理学研究、心理学研究、パーソナリティ研究のいずれかに掲載されており、自己効力感をタイトルもしくはキーワードに含む 19 本の論文を分類したところ、結果は以下の表のようになった。

［表 3：対象論文の分類結果］

対象	研究
特性的自己効力感	・成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田(1995) ・三好・大野(2011) ・福留・森永(2018)
領域固有の自己効力感	・伊藤(1996) ・松尾・新井(1998) ・安達(2003) ・河内(2004) ・中西(2004) ・松沼(2004)

	・及川・坂本(2007) ・下村(2007) ・多賀谷・佐々木(2008) ・谷島(2010) ・及川・山蔦・坂本(2013) ・新井・弘中・近藤(2015) ・吉崎・平岡(2015) ・伊川・楠見(2020)
両方の関係性	・三宅(2000) ・中西・大道・梅本(2018)
いずれにも当てはまらない	

特性的自己効力感を対象にした研究としては成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田(1995)、三好・大野(2011)、福留・森永(2018)があり、いずれも「自己効力感」をその提唱者である Bandura(1977)の定義に依拠した上で「行動の先行要因として予期機能(期待)を重視し、ある行動を自らが成功裏に実行できるという確信」として捉えていた。またこのうち福留・森永(2018)を除いた 2 研究では自己効力感が 2 つに分けて捉えられることについて言及している。

成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田(1995)は自己効力感を「課題や場面に特異的に行動に影響を及ぼす自己効力感」と「より一般化した日常場面における行動に影響する自己効力感」とにわけ、後者を「特性的自己効力感(Generalized Self-Efficacy)」と名付けた。また「特性的自己効力感」についてはいずれの論文でもその定義について言及があった。

領域固有の自己効力感を対象とした研究においては、自己効力感そのものの定義、自己効力感が 2 つに分けて捉えられることのいずれにも触れていないものが多く見られた(松尾・新井(1998)、河内(2004)、中西(2004)、及川・坂本(2007)、多賀谷・佐々木(2008)、谷島(2010)、吉崎・平岡(2015))。また自己効力感そのものの定義について言及しているものについては、そのほとんどが Bandura(1977)に依拠していた。

特性的自己効力感と領域固有の自己効力感との関係性に焦点を当てている研究としては、三宅(2000)と中西・大道・梅本(2018)があった。これらはどちらも Bandura(1977)に依拠して自己効力感を定義づけており、それが 2 つに分けられることについても説明がなされていた。

このように、自己効力感を対象とした論文においてその定義が説明されている場合、そのほとんどが提唱者である Bandura の定義に依拠していたため、自己効力感については研究者の間で共通認識ができていると推測できる。また共通認識が存在するためか、自己効力感についての論文の中には、佐藤(2013)の言う「流行の抑制者としての役割」を果たしていると言えそうなものは見受けられなかった。

2-4.結果と考察

第 2 章では、自尊感情及び自己効力感の定義について整理することを試みた。その結果、自己効力感の定義については研究者の間で一定の共通認識がある一方で、自尊感情については先述したとおり「自分で自分を評価する」ことに伴う困難もあり、複数の定義が存在することが改めて確認された。よって、本研究が中心に扱う「自己肯定感」だけでなく、その類似概念もまた、研究者間で理解が分かれている曖昧な概念であるといえる。

また佐藤(2013)が専門家の役割の一つとして主張する「流行の抑制者としての役割」については、研究者間で一定の共通認識がある「自己効力感」においては見受けられなかった。一方で、理解が分かれている「自尊感情」においては、榎本・稲本・松田・梅(2001),榎本(2006),榎本(2013)などにおいて定義が曖昧なまま言葉を濫用することについての指摘が見られ、一般の人々向けに書かれた論文ではないとはいえ、これらは「流行の抑制者としての役割」を部分的に果たしているといえると考えた。

第 3 章　自己肯定感は研究者の間でどのようなものとして理解されているのか

3-1.自己肯定感とは

本章では、「自己肯定感」の定義の差異について検討する。「自己肯定感」を提唱した高垣はこれを「自分が自分であって大丈夫という感覚」としており、これについて高垣は、カウンセリングで「出会ってきた登校拒否の子どもたちの、外向きに自己主張や攻撃性を発揮できない傾向、何かあるとすぐに自分が悪いと思ってしまう独特の「感受性」の背後に、「自分が自分であって大丈夫」と感じる自己肯定感の希薄さを感じさせるという文脈で」使ったのが最初であるとしている。

自己肯定感について扱った研究は多く存在するが、その多くは尺度を使用して対象者の自己肯定感を測定するもの、または尺度自体を検討・作成するものとなっている。たとえば田中・榎本(2011)は自己実現と自己肯定感の間にどのような関係があるのかを調査するため、自己肯定感尺度 ver.2(田中 2005)と自己実現尺度(榎本 2010)を使用しており、結果として中程度の相関が確認されている。また田中(2012)は開発された複数の自己肯定感尺度について妥当性などを検討しており、結果として田中(2005)が時間的展望体験尺度，及び BDI との相関も高く，精神的健康を測定する尺度として基準関連妥当性が高いことを明らかにしている。

しかし「自己肯定感」という言葉の意味そのものや類似概念との差異について取り扱った研究はなく、一般の人々だけでなく、研究者の間でも高垣とは異なる意味でこの言葉を用いるケースは増加しているため、ここで改めてその定義について整理を行う。

また本章においても第 2 章同様、佐藤(2013)が主張する、専門家の「流行の先導者としての役割」及び「流行の抑制者としての役割」が見られるか否か検討する。

3-2.対象と方法論

本研究では「自己肯定感」について取り上げている文献を「学者」「医者」「行政」「教育」のレベルに分け、定義についての記述を確認する。ここで上記のようなレベル分けを試みている理由としては、低い自己肯定感が抑うつなどの精神症状と結びつくことについての指摘が存在すること、教育上の目標として自己肯定感の向上が目指されていることなどから、特に上記のレベルにおいて「自己肯定感」が注目されていると予想できたことが挙げられる。

またここでは文献を著者の属性で分けた上で、定義付けの方法に基づいてさらに、「①誰かの定義に依拠して「自己肯定感」について説明している」「②「自己肯定感」の定義の例を複数例示するだけで、どの立場にも立っていない」「③自身で新たな「自己肯定感」の定義を打ち出している」「④「自己肯定感」の定義について特に説明していない」の 4 つに分類し、定義についての記述を確認する。

3-3.自己肯定感の定義についての検討

上記の基準で文献を分類したところ、以下の表のような結果となった。

［表 4：「自己肯定感」に関する文献の分類結果］

<table>
<tr><th>学者</th><th>医者</th></tr>
<tr><td>①,②,④なし
③：高垣(2015・2006)/田中(2005)</td><td>①,②,④なし
③：明橋(2010)</td></tr>
<tr><th>行政</th><th>教育</th></tr>
<tr><td>②,③,④なし
①：教育再生実行会議(2017)/竹内(2017)</td><td>①：細田・田嶌(2009)/甲斐村(2010)/滝沢・田中(2011)/ 林・青野(2020)/松本・西村・藤原(2020)/小出・片岡・荒井(2021)/築地・藤原・折口(2021)
②：なし
③：折橋(2016)
④：高橋(2002)/青木(2010)/林(2010)/鈴木・青木・小林(2011)/吉田(2011)/清田(2012)/平沼(2012)/松岡・中山(2014)/青木(2016)/柚洞・山下・高橋(2016)/林原(2021)</td></tr>
<tr><th colspan="2">その他</th></tr>
<tr><td colspan="2">①：河越・岡田(2015)/青木(2015)/齊藤・吉田(2020)/藤井・林・浦田(2020)
②：なし
③：神原・遠藤(2011・2013)
④：安田・松下(2002)/寺島・小玉(2007)/小林(2009)/橋場(2011)/碇山・湯川・細川・木村・川上(2014)/上田(2014)/安成(2014)/北村・能田・吐師・竹本(2019)/井上・山下(2021)/杉原(2021)</td></tr>
</table>

学者のレベルでは、「自己肯定感」の提唱者である高垣に加え、査読付き論文があった田中を対象とした。自己肯定感という言葉の提唱者である高垣忠一郎は、自身の著書の中で自己肯定感を「「自分が自分であって大丈夫」という感覚」として定義している(高垣,2015)。また高垣は、この自己肯定感について「セルフ-エスティームの翻訳としての自己肯定感ではない」と述べていた。その理由については、Rosenberg などがいう自尊感情は自分が設定したものにせよ他者(≒世間)が設定したものにせよ、なにかしらの基準を用いて「自己」を評価し、肯定しているが、自己肯定感が指す「自己」はそのような「自己」ではない、という部分にあると読み取ることができた。実際に高垣は、自己肯定感の「自己」は評価の対象としての「自己」ではなく、考える主体としての「自己」であるという趣旨のことを述べた上で、「私のいう自己肯定感はなにかのモノサシで自己を測り、評価して「よし」と肯定するのではありません」と述べている。

次に、学者のレベルにおいて自身で新たな定義づけを行っているものとしては田中(2005)があり、田中は自己肯定感を「自己に対して肯定的で、好ましく思うような態度や感情」と定義づけていた。また田中(2005)は、尺度を用いて自己肯定感を測定することを目的とした研究であるため、田中の考える「自己肯定感」と高垣の言うそれは異なる可能性が高い。

次に医者のレベルにおいては、精神科医の明橋大二が、著書の中で自己肯定感を「自分は大切な人間だ」、「自分は生きている価値がある」、「自分は必要な人間だ」という気持ちとして表現していた(明橋,2010)。また明橋は、自己肯定感は能力への自信ではなく存在への自信であるという趣旨のことを述べており、これは「自分はここにいていいんだ、ありのままで、存在価値があるんだ、自分は、いらない人間なんかじゃないんだ、という気持ち」のことであるとしている。明橋は自己肯定感を育むものとして(親・養育者による)「共感」をあげていることからも、明橋と高垣のいう「自己肯定感」は比較的近いものであると考えられる。

行政のレベルでは、教育再生実行会議(2017)と竹内(2017)があり、これらはどちらも「誰かの定義に依拠して「自己肯定感」について説明している」に分類された。教育再生実行会議では、「自己肯定感」は「「自らの力の向上に向けて努力することで得られる達成感や他者からの評価等を通じて育まれる自己肯定感と自らのアイデンティティに目を向け、自分の長所のみならず短所を含めた自分らしさや個性を冷静に受け止めることで身につけられる自己肯定感」の 2 つの側面から捉えることが考えられる」とされていた。

また上記の会議で取りまとめられた「自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上（第十次提言）」の内容を整理した竹内は、自己肯定感を「他者評価等に基づく自己肯定感」「自己受容に基づく自己肯定感」「絶対的な自己肯定感」の 3 つからなるものとして捉えていた。教育再生実行会議(2017)及び竹内(2017)では「自己肯定感」を複数に分けて捉える姿勢やその分類基準が「自尊感情」と非常に似通っており、また竹内(2017)の参考文献には「自己肯定感」ではなく「自尊感情」を題材にしたものが多く含まれていたことから、行政の場で言われている「自己肯定感」は「自尊感情」に非常に近いものであると考えることができる。

続いて教育のレベルでは、「誰かの定義に依拠して「自己肯定感」について説明している」ものとして、細田・田嶌(2009)、甲斐村(2010)、滝沢・田中(2011)、松本・西村・藤原(2020)、小出・片岡・荒井(2021)、築地・藤原・折口(2021)があった。細田・田嶌(2009)は「自己肯定感」について、本田(2007)に依拠して「自らの潜在能力を信じ,よいもだめも含めて自分は自分であって大丈夫という感覚」としており、甲斐村(2010)は樋口・松浦(2002)に依拠し、「現在の自分を自分であると認める感覚」を自己肯定感であるとしていた。滝沢・田中(2011)は、田中(2005a,2005b,2008)に依拠し、「自己に対して前向きで,好ましく思うような態度や感情」が自己肯定感であるとしていたが、田中は先ほど検討した通り、自尊感情に近しいものを「自己肯定感」としている。続いて松本・西村・藤原

(2020)は吉森(2015)に依拠し、「個人が自分自身を評価した際に,自己の短所や不満足な点を受容した上で全体的自己像を肯定的なものとして捉える感覚」を自己肯定感であるとしていた。林・青野(2020)は「ありのままに自分自身を受け容れ、その価値や存在を肯定的に認識する感覚」のこと、さらにこれは Rosenberg がいう自尊感情の「これでよい(good enough)」の側面であるとしていた。小出・片岡・荒井(2021)は国立教育政策研究所(2015)に依拠し、「自分への肯定的な評価を抱いている状態」を、築地・藤原・折口(2021)は内閣府(2014)に依拠し、「自己に関する肯定的な評価」を自己肯定感としていた。

教育のレベルにおいて、「自身で新たな「自己肯定感」の定義を打ち出している」ものとしては折橋(2016)があった。折橋(2016)は「自己肯定感」を「自分らしい表現をしてもいい」や「自分はダメな人間ではない」という気持ちのことであるとしており、前者については研究内容が英語の授業における外国語でのコミュニケーションであることによると考えられる。

最後に、教育のレベルにおいて「自己肯定感」の定義について特に説明していなかったものとしては、高橋(2002)、青木(2010)、林(2010)、鈴木・青木・小林(2011)、吉田(2011)、清田(2012)、平沼(2012)、松岡・中山(2014)、青木(2016)、柚洞・山下・高橋(2016)、林原(2021)があった。

その他に分類したもののうち、「誰かの定義に依拠して「自己肯定感」について説明している」ものとしては、河越・岡田(2015)、青木(2015)、齊藤・吉田(2020)、藤井・林・浦田(2020)があった。河越・岡田(2015)は平石(1990)に依拠し、「自己あるいは他者から見て,自己の態度が好ましい,あるいは望ましいと自己が評価すること」を、青木(2015)は水上(2005)に依拠し、「行動に対する遂行可能感や実現可能性の信念や自己に対する自信や肯定感」を「自己肯定感」として捉えていたが、前者は「他者から見て」という文言があることから自尊感情に、後者は「行動に対する遂行可能感や実現可能性」という文言があることから自己効力感に近いものであると推測できる。また齊藤・吉田(2020)は田中(2005)に依拠し、「自己に対して肯定的で、好ましく思うような態度や感情」を、藤井・林・浦田(2020)は齊藤(2010)に依拠し、「自己価値観、無条件な自己支持、自分に望みを持った前向きの基本的な構え」を自己肯定感としていた。また田中(2005)に依拠している齊藤・吉田(2020)だけでなく、藤井・林・浦田(2020)も自己肯定感の訳を”self-esteem”としており、両者は共に自尊感情に近いものを「自己肯定感」としている可能性があるとわかった。

続いてその他に分類したもののうち、「自身で新たな「自己肯定感」の定義を打ち出している」ものとしては、神原・遠藤(2011・2013)があった。ここでは、「「(所属する文化において)適切で価値がある存在である」という自己への肯定的な見方を,改めて「自己肯定感」と呼ぶことにする」という記述があり、また自己完全性・自己価値感情・状態的自尊心においても同様であるという説明がなされていた。状態的自尊心、つまり状態的自尊感情は「他者の評価等に依存した不安定な自尊感情」のことであるため、神原・遠藤

(2011・2013)のいう「自己肯定感」は高垣のいう自己肯定感とは異なるものであることがわかる。

最後に、その他の中で「「自己肯定感」の定義について特に説明していない」ものとしては、安田・松下(2002)、寺島・小玉(2007)、小林(2009)、橋場(2011)、碇山・湯川・細川・木村・川上(2014)、上田(2014)、安成(2014)、北村・能田・吐師・竹本(2019)、井上・山下(2021)、杉原(2021)があった。

3-4.結果と考察

複数の文献を対象に「自己肯定感」の定義について確認したところ、提唱者である高垣の定義に近しい立場にあるものよりも、むしろ高垣が、彼自身が想定する「自己肯定感」とは異なるとしている「自尊感情」に近しいものを「自己肯定感」として扱っている研究が多いことがわかった。また今回対象とした文献の中には、参考文献の欄に高垣の文献が含まれていないものも多く、「「自己肯定感」の定義について特に説明していない」文献においては特にその傾向が強かった。

先述したとおり高垣は、「自己肯定感」について、「私のいう自己肯定感はなにかのモノサシで自己を測り、評価して「よし」と肯定するのではありません」「セルフ-エスティームの翻訳としての自己肯定感ではない」などと述べており、状況や対象に依存的でないものこそが「自己肯定感」であると言おうとしたと推測できる。だからこそ、彼は自尊感情や自己効力感といった類似概念が既に存在していたにも関わらず、新たに「自己肯定感」という概念を生み出し、また尺度を用いてそれを測定しようとすることはしなかったのであろう。

しかし Scott(2003)も言うとおり、近年の「自己」研究は個人の測定やコントロールに焦点を当てた実証的な研究であり、研究の中では尺度を作成すること、あるいは既存の尺度を用いて対象を測定することも非常に多い。そのような潮流の中で、「自己肯定感」についても「自尊感情」や「自己効力感」同様、尺度を用いて研究を行う例が増加し、「自尊感情」に近しいものを「自己肯定感」として扱う研究が増加していったのではないだろうか。しかしこのような研究については、そもそも研究の中で用いられるべき言葉は本当に「自己肯定感」だったのか、という疑問が生じる。それと同時に、仮に「自己肯定感」を「自尊感情」などの類似概念に置き換えたとしても、やはり Scott(2003)が指摘した「「自分を尊敬できるか否か」の判断基準には道徳規範が絡むものであり、その道徳的な規範は社会的な文脈の中で築かれるものであるため、そういったものを考慮せずに、自尊感情を測定できると考えることは誤り」なのではないかという問題が生じるのである。

また佐藤(2013)が主張する専門家の「流行の先導者としての役割」及び「流行の抑制者としての役割」について、ここではその役割を果たしていると断言できるものは見受けられなかった。提唱者である高垣も「私のいう自己肯定感はなにかのモノサシで自己を測

り、評価して「よし」と肯定するのではありません」「セルフ-エスティームの翻訳としての自己肯定感ではない」などと述べているとはいえ、他の研究者や一般の人々に、自身とは異なる意味合いでの「自己肯定感」という言葉の使用を控えるよう求める記述はしていない。

そこで、「自己肯定感」という言葉をめぐる「流行の先導者としての役割」及び「流行の抑制者としての役割」については、続く第 4 章で対象とする新聞記事上においても見られるか否か検証することとした。

第 4 章　自己肯定感はメディアにおいてどのようなものとして捉えられているのか

4-1.前提

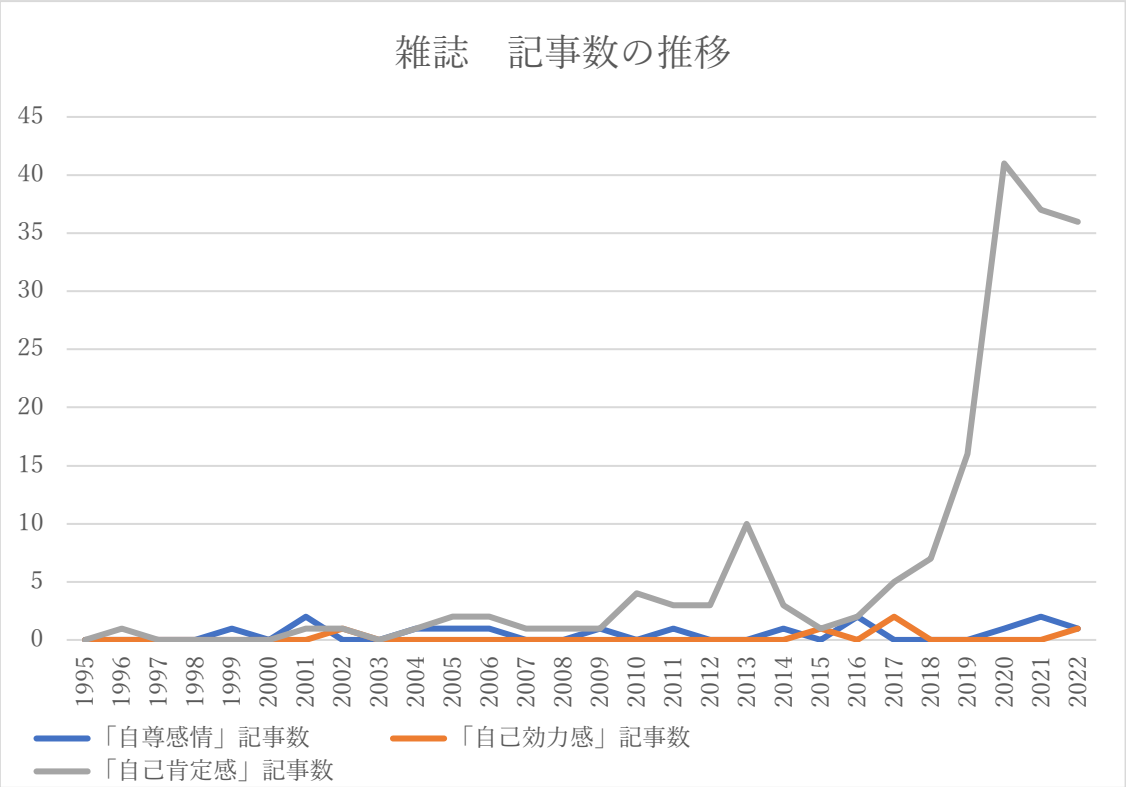
第 3 章において研究者の間で自己肯定感がどのようなものとして捉えられているのかを確認したが、一般の人々が論文や機関誌を目にする機会はそう多くはないであろう。となれば、一般の人々の間に流布している自己肯定感を調査する前に、それらを形作ったであろう「メディア」において自己肯定感がどのように扱われているのか調査する必要があると考えられる。

そこで本章においては、先述した佐藤(2013)に倣い、新聞を対象に据え、「メディアにおいて自己肯定感がどのように扱われているのか」について調査を行うこととした。また、対象を新聞とした理由は、佐藤(2013)も主張するとおり、新聞が調査対象時期である 1991 年から 2023 年 6 月まで継続的に発行され、かつ一貫性を持った「通時的な分析可能性(網羅的なアクセス可能性)を有して」いるメディアだからである。尚、対象を新聞のみとし、育児本などの書籍を加えなかったのは、発行部数や売上のデータがないため選考基準を明確にできない(対象となりうる書籍は少なく見積もっても 100 冊以上あるため全てを対象に含めることは難しい)、紙媒体の書籍はデータ化に時間がかかってしまい分析が難しいといった問題があったためである。またテレビ番組についても、育児本などと同様に選考基準を明確にできないこと、番組内容のテキスト化に時間がかかってしまい分析が難しいことから、対象には含めないこととした。

4-2.予備調査とその結果

対象となる新聞記事を選定する前に、「自己肯定感」という言葉が年齢や性別などに依らない広がり方をしているのか否かを調べるため、大宅壮一文庫の雑誌記事索引にて「自己肯定感」のキーワードでヒットする記事を調査した。その結果が以下である。

［グラフ１：雑誌における「自己肯定感」「自尊感情」「自己効力感」記事数推移］

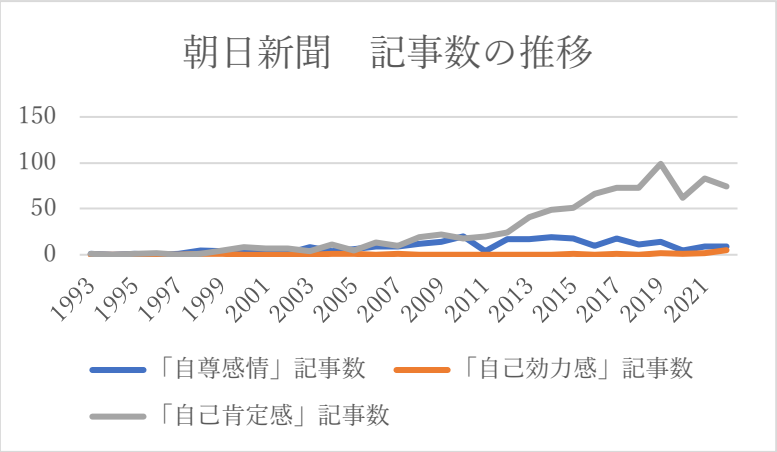


このように、「自己肯定感」という言葉は 2010 年頃を境に広まり始め、2020 年前後にその記事数が飛躍的に伸びていることがわかった。また「自己肯定感」に関する記事数を雑誌ごとにまとめた結果、読者層にはばらつきがあり、「自己肯定感」という言葉は人々の属性(性別・世代・子どもの有無や収入など)に依らない広まり方をしていることもわかった(付録：表 5,表 6 参照)。

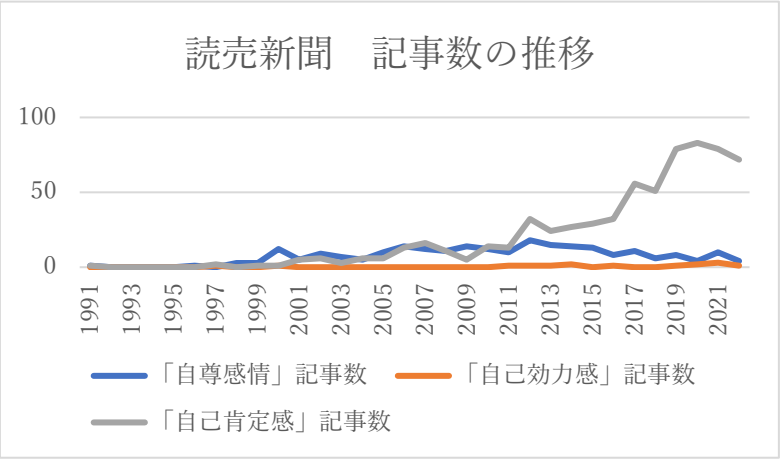
4-3.調査対象

対象となる新聞記事を選定するために、全国紙の新聞データベース(朝日新聞クロスサーチ/ヨミダス歴史館/日経テレコン 21/毎索/産経新聞データベース)を用いて「自己肯定感」で検索をかけ、対象となる記事を抽出した。ただし、保存されている記事の年数には各紙ばらつきがあるため、対象期間は各社の最も古い保存期間から 2023 年 6 月までを対象とした。各紙の結果は以下のとおりである(各紙の詳細な記事数については付録：表 7～表 12 にまとめた)。

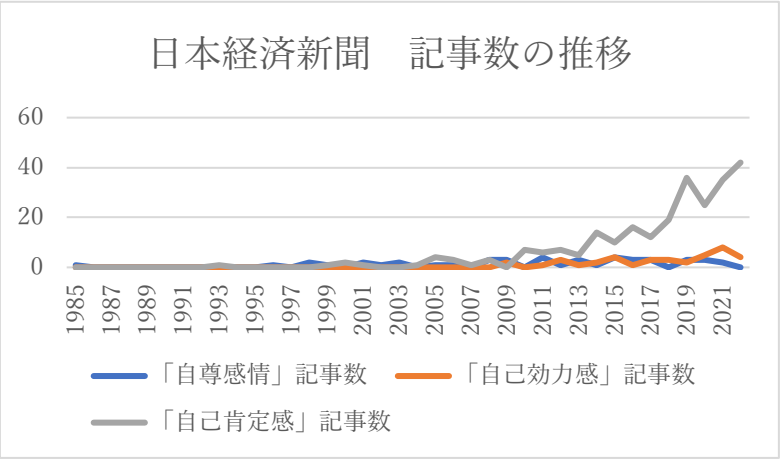
［グラフ２：朝日新聞における「自己肯定感」「自尊感情」「自己効力感」記事数推移］



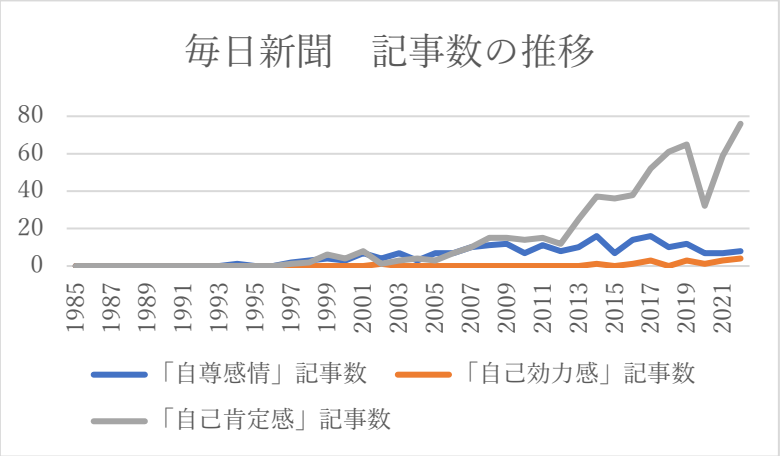
［グラフ３：読売新聞における「自己肯定感」「自尊感情」「自己効力感」記事数推移］



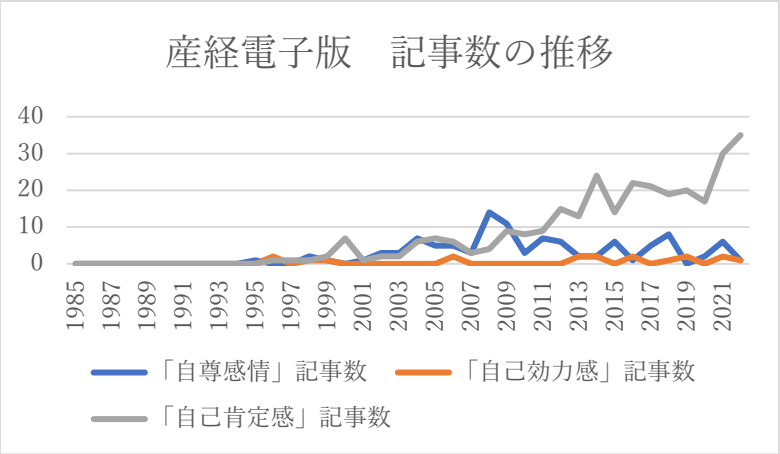
［グラフ４：日本経済新聞における「自己肯定感」「自尊感情」「自己効力感」記事数推移］



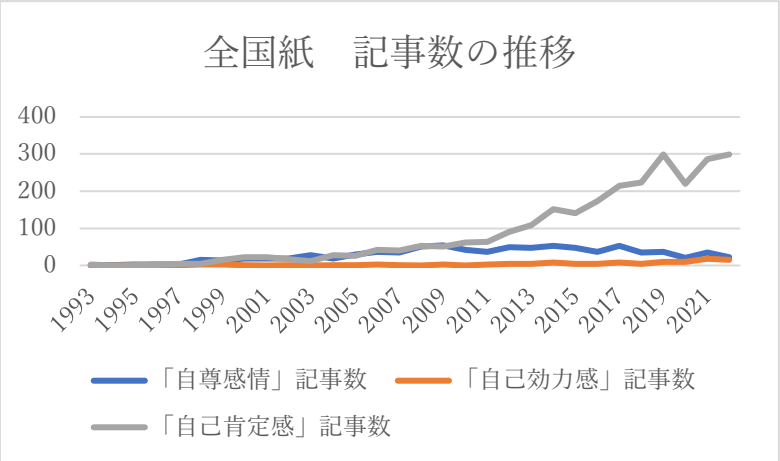
［グラフ５：毎日新聞における「自己肯定感」「自尊感情」「自己効力感」記事数推移］



［グラフ６：産経新聞における「自己肯定感」「自尊感情」「自己効力感」記事数推移］



［グラフ７：全国紙五紙における「自己肯定感」「自尊感情」「自己効力感」記事数推移］※記事の保存期間が最も短い朝日新聞にあわせてグラフを作成



結果として、朝日新聞においては 904 記事、読売新聞においては 715 記事、日本経済新聞においては 283 記事、毎日新聞においては 642 記事、産経新聞においては 327 記事がヒットした。またどの新聞においても「自己肯定感」という言葉の使用頻度は 2010 年ごろを境にして急増していることがわかったため、この要因の追究も目的に含めた上で調査を行う。

4-4.調査方法

まず、佐藤(2013)同様、五紙合計の記事数を基準に機械的に時期を区分する。また佐藤は、記事数と別にそれぞれの診断名の流通時期を目安に時期区分を行なっているが、本研究で調査対象とする単語は「自己肯定感」一語であるため、本研究では記事数の総数のみを基準として時期区分を行う。

その上で、「①五紙合計の記事数が 1 桁にとどまっている時期(1991 年～1998 年)」については、すべての記事に目を通し、記事の内容及びそのおおまかな特徴をまとめる。「②五紙合計の記事数が 50 以下の時期(1999 年～2007 年)」「③五紙合計の記事数が 51～100 の時期(2008 年～2012 年)」「④五紙合計の記事数が 101～200 の時期(2013 年～2016 年)」「⑤五紙合計の記事数が 201 以上の時期(2017 年～2023 年 6 月)」の計 2871 記事については、KH Coder を用いた計量テキスト分析を行う。

また、計量テキスト分析を行う前に、①エラーの原因となる半角文字の削除 ②「自己肯定感」の強制抽出語リストへの登録(「自己」と「肯定」に分かれて抽出されることを防ぐため)を前処理として行う。その後、計量テキスト分析の結果を踏まえた上で内容分析を行い、記事数増加の原因及び時期ごとの特徴を追究する。また第 3 章の結果と考察部分で述べたとおり、本項においても「自己肯定感」という言葉をめぐる「流行の先導者としての役割」及び「流行の抑制者としての役割」について検討することとする。

4-5.1991 年～2023 年 6 月の新聞記事のテキスト分析結果について

1991 年～2023 年 6 月の計 2689 記事について、「五紙の合計記事数が 1 桁の時期(1991 年～1998 年)」「五紙合計の記事数が 50 以下の時期(1999 年～2007 年)」「五紙合計の記事数が 51～100 の時期(2008 年～2012 年)」「五紙合計の記事数が 101～200 の時期(2013 年～2016 年)」「五紙合計の記事数が 201 以上の時期(2017 年～2023 年 6 月)」に分け、それぞれ KH Coder を用いた計量テキスト分析を行った。

その結果、抽出語と共起ネットワークについて、以下のような結果が出た。

［表 13：対象新聞記事抽出語ランキング(1991 年～2023 年 6 月)］

	1桁	
	1991~1998	
	抽出語	出現回数
1	子供	77
2	学校	59
3	自分	56
4	子	43
5	言う	37
6	教育	36
7	親	34
8	人	33
9	教師	31
10	心	28
11	社会	27
12	大人	27
13	子ども	26
14	思う	25
15	人間	24
16	生徒	23
17	システム	19
18	自己	19
19	受験	18
20	生活	18
21	感じる	17
22	今	17
23	問題	17
24	関係	16
25	事件	16
26	登校	16
27	勉強	16
28	力	16
29	グループ	15
30	自己肯定感	15
31	話す	15
32	家庭	14
33	持つ	14
34	先生	14
35	求める	13
36	言葉	13
37	自尊心	13
38	中学生	13
39	行く	12
40	高校	12
41	自殺	12
42	自由	12
43	性	12
44	東京	12
45	否定	12
46	Ａ子	11
47	ボランテ	11
48	育てる	11
49	虐待	11
50	教授	11

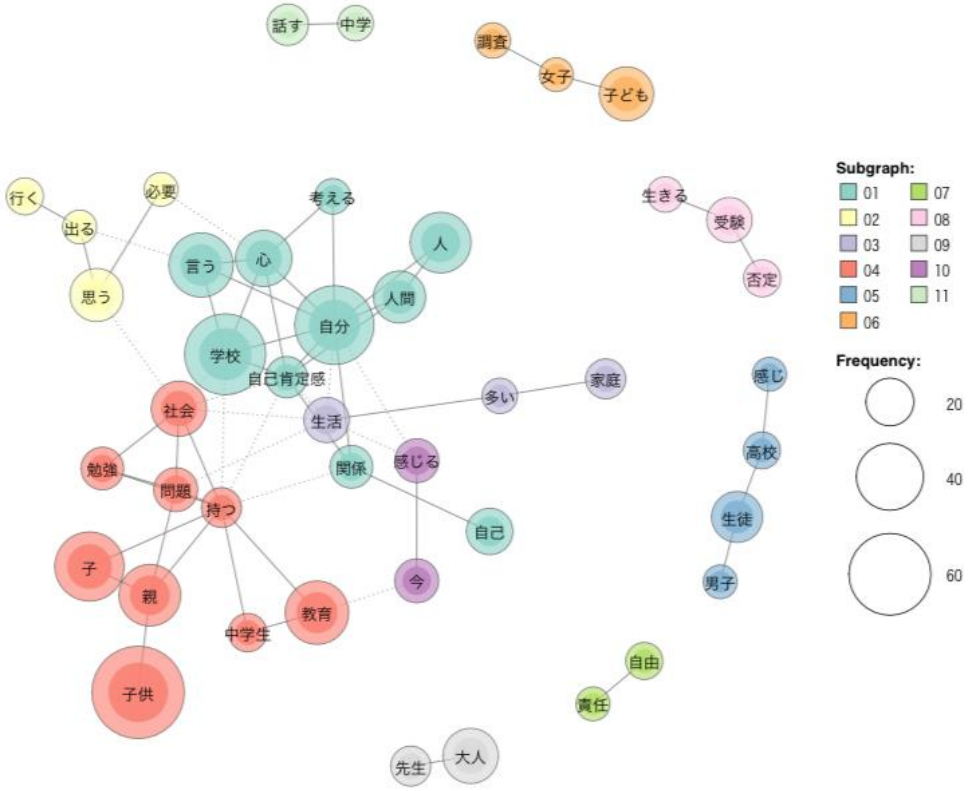
	50以下	
	1999~2007	
	抽出語	出現回数
1	子ども	591
2	自分	538
3	子供	476
4	教育	371
5	親	346
6	学校	340
7	人	327
8	思う	311
9	自己肯定感	256
10	社会	256
11	関係	225
12	問題	224
13	心	223
14	必要	212
15	子	208
16	考える	200
17	生徒	195
18	言う	186
19	大人	182
20	話す	162
21	持つ	160
22	多い	156
23	人間	147
24	子育て	145
25	児童	143
26	地域	142
27	高校	138
28	生きる	138
29	今	136
30	家庭	135
31	母親	134
32	大切	133
33	聞く	132
34	生活	131
35	支援	130
36	授業	129
37	見る	127
38	活動	124
39	障害	124
40	日本	124
41	虐待	123
42	言葉	123
43	学習	116
44	体験	115
45	登校	115
46	力	115
47	事件	114
48	少年	113
49	学ぶ	112
50	研究	112

	51~100	
	2008~2012	
	抽出語	出現回数
1	子ども	901
2	教育	690
3	自分	688
4	人	526
5	学校	492
6	親	381
7	自己肯定感	379
8	子供	345
9	支援	345
10	障害	333
11	思う	327
12	社会	300
13	子	299
14	話す	294
15	生徒	284
16	活動	272
17	持つ	258
18	児童	251
19	考える	247
20	問題	246
21	多い	235
22	生活	223
23	日本	217
24	大切	213
25	参加	212
26	学習	209
27	必要	203
28	言う	202
29	指導	196
30	授業	194
31	教授	193
32	心	193
33	今	192
34	相談	192
35	東京	188
36	全国	187
37	関係	186
38	前	186
39	調査	186
40	高校	183
41	家庭	181
42	生きる	179
43	聞く	177
44	見る	171
45	地域	171
46	受ける	169
47	発達	168
48	教諭	166
49	電話	164
50	力	161

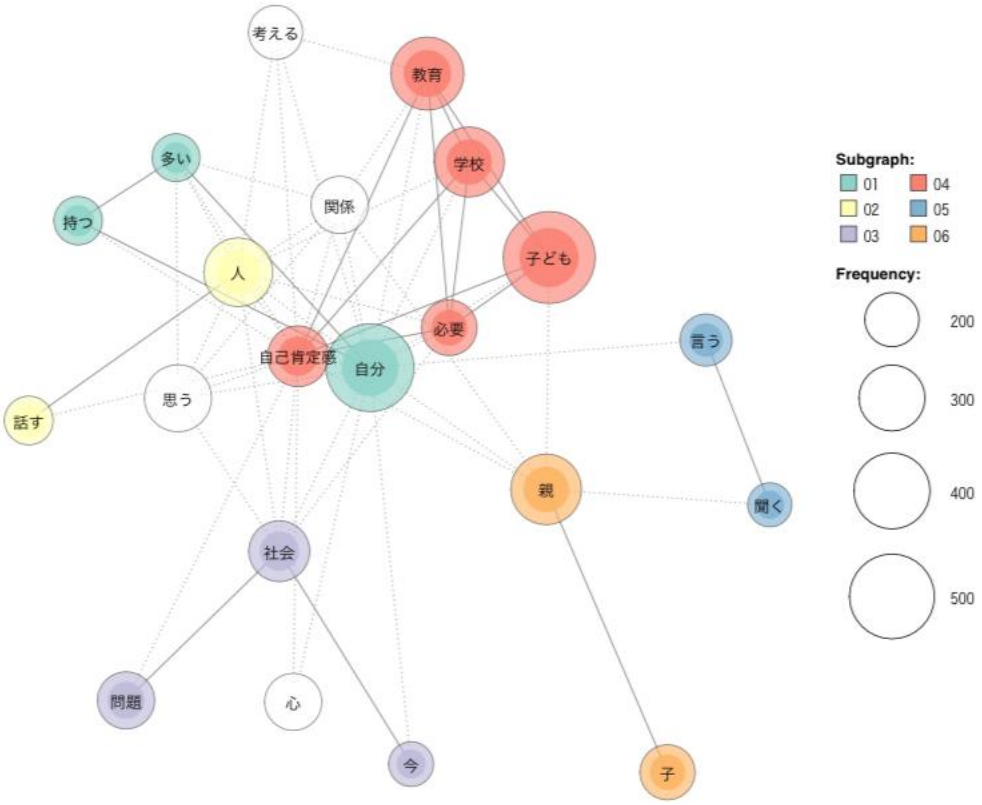
	101~200	
	2013~2016	
	抽出語	出現回数
1	子ども	1507
2	自分	1069
3	教育	1019
4	人	920
5	学校	875
6	子供	740
7	生徒	727
8	支援	718
9	社会	708
10	自己肯定感	695
11	思う	578
12	考える	538
13	話す	517
14	日本	510
15	児童	507
16	親	507
17	問題	478
18	地域	473
19	活動	461
20	学習	449
21	調査	449
22	生活	445
23	障害	441
24	授業	430
25	高校	429
26	持つ	429
27	必要	420
28	女性	399
29	子	395
30	全国	391
31	多い	382
32	施設	380
33	指導	367
34	言う	359
35	参加	349
36	前	337
37	心	332
38	力	332
39	受ける	331
40	家庭	330
41	教授	327
42	東京	326
43	保護	314
44	登校	311
45	感じる	300
46	教員	294
47	相談	289
48	見る	287
49	小学校	284
50	学ぶ	281

	201以上	
	2017~2023年6月	
	抽出語	出現回数
1	子ども	4106
2	自分	3606
3	人	3511
4	教育	2316
5	思う	2212
6	社会	2149
7	学校	2143
8	自己肯定感	2114
9	支援	1999
10	考える	1556
11	日本	1519
12	子供	1502
13	生徒	1500
14	障害	1485
15	親	1485
16	話す	1444
17	女性	1407
18	子	1385
19	言う	1372
20	活動	1334
21	多い	1275
22	持つ	1224
23	生活	1205
24	必要	1143
25	感じる	1103
26	問題	1100
27	受ける	1053
28	関係	1008
29	聞く	1008
30	見る	993
31	相談	987
32	学習	982
33	前	981
34	授業	968
35	東京	959
36	家庭	950
37	調査	933
38	参加	932
39	全国	914
40	児童	909
41	仕事	902
42	地域	889
43	心	869
44	学ぶ	868
45	時間	864
46	生きる	863
47	今	855
48	高校	850
49	経験	834
50	知る	831

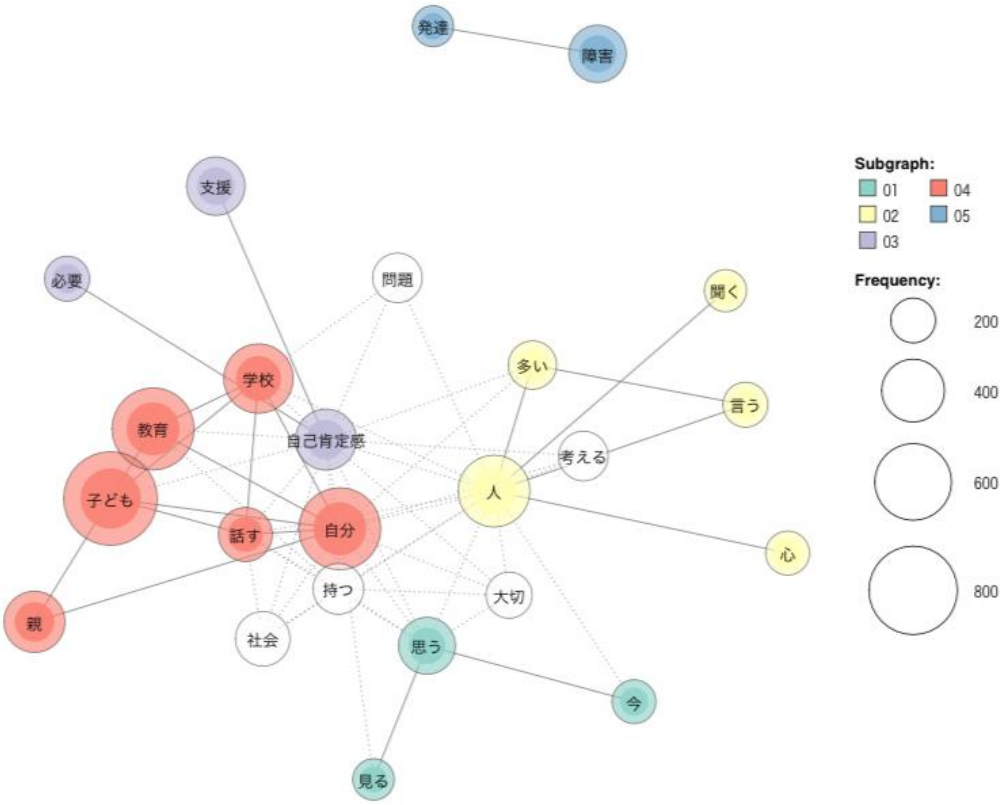
［図 1：五紙合計の記事数が 1 桁の時期(1991 年～1998 年)の共起ネットワーク］



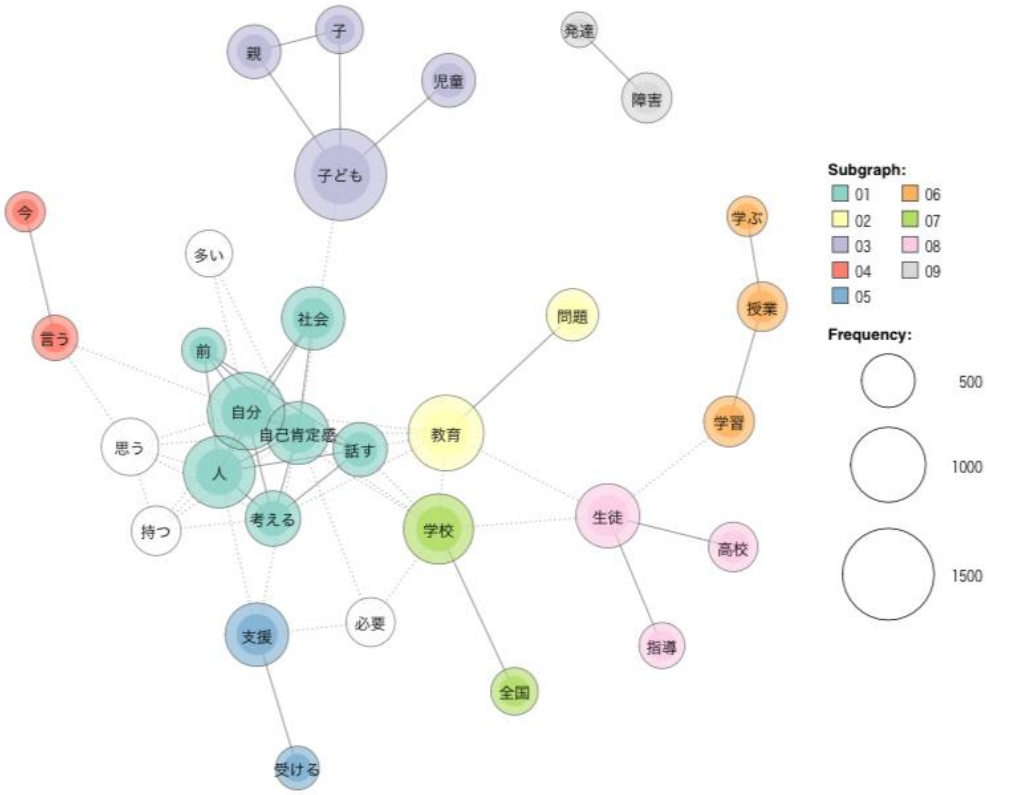
［図 2：五紙合計の記事数が 50 以下の時期(1999 年～2007 年)の共起ネットワーク］



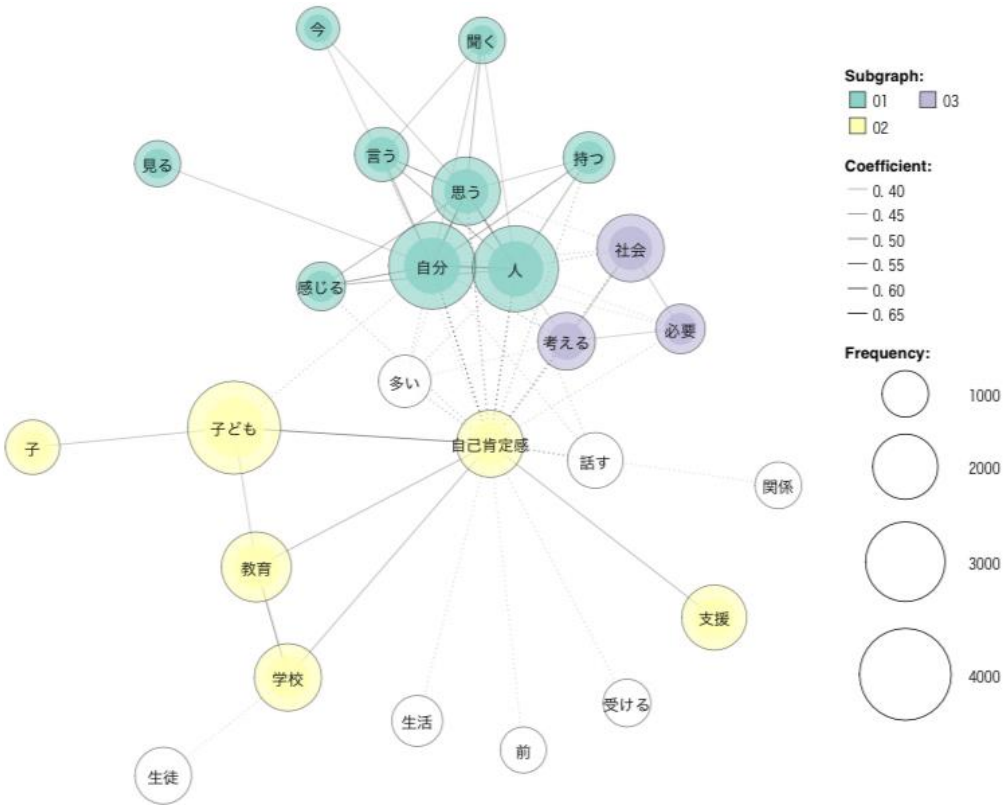
［図 3：五紙合計の記事数が 51～100 の時期(2008 年～2012 年)の共起ネットワーク］



［図 4：五紙合計の記事数が 101～200 の時期(2013 年～2016 年)の共起ネットワーク］



［図 5：五紙合計の記事数が 201 以上の時期(2017 年～2023 年 6 月)の共起ネットワーク］



抽出語の上位 1～10 位までに着目すると、記事数の増加に伴って単語の出現回数自体に変化はあるものの、登場する語彙の種類についてはほとんど時期に伴う変化がないことがわかった。しかし共起ネットワークについても抽出語ランキングについても全く変化がないというわけではない。

例えば五紙合計の記事数が 50 以下(1999 年～2007 年)の時期には 31 位に位置している「家庭」や 32 位に位置している「母親」は、その後単語の出現回数自体は増加しているものの、記事全体の単語数に占める割合は減少している。また共起ネットワークにおいても徐々に「親」や「子」といった単語は登場しなくなったり円の大きさが縮小したりしていることから、初めは(割合的には)家庭との関連で語られることが多かった自己肯定感という言葉が、徐々に学校教育との関連で語られることが増えているという予測が立てられる。こうした点にも着目しつつ、続いてそれぞれの時期ごとの記事数増加の原因及び記事内容の特徴について記述する。

4-5-1.五紙合計の記事数が 1 桁にとどまっている時期(1991 年～1998 年)について

この時期は「自己肯定感」の登場初期に当たる重要な時期であるため、記事の内容や文脈に加え、発言者の属性、類似概念との使い分け、提唱者である高垣との関わりの有無などに注目しつつヒットした記事の全てを概観した。その結果が以下の表である。

［表 14：「自己肯定感」に関する記事(1991 年～1998 年)］

見出し(新聞社・掲載年)	掲載面	文脈	発言者の属性	類似概念との使い分け	高垣との関わり
鹿川君事件判決 「いじめ」の実態、理解不足 「自殺の予見」で後退（解説）(読売・1991)	解説	いじめ・教育	記者(鰭崎浩)	なし	なし
ランダム通信・10 日(朝日・1993)	教育	登校拒否	心理学者	読み取れず	あり
第４５話おこらないでママ（５）自信持てぬまま大人に（家族はいま）終(日経・1993)	生活情報	親子関係・子育て	精神科医(斎藤学)	読み取れず	なし
活動記録を出版　ボランティア像探るながた支援ネットワーク(朝日・1995)	地域(兵庫)		ボランティア組織？	読み取れず	なし
深刻な問題、どうすれば…　催しから（「いじめ」を考える）(朝日・1996)	地域(千葉)	いじめ	カウンセラー	読み取れず	なし
多元的な自尊心　異者と交わり自信回復を　宮台真司（ウオッチ論潮）(朝日・1996)	文化	子どもの自己肯定感・評価尺度(偏差値)	社会学者(宮台真司)	「自尊心」も記事内で多用されている	なし

児童虐待予防　米の予防法実践を呼びかけ　女性ライフサイクル研究所(産経・1996)	生活	いじめ・誘拐・性虐待の予防法について	女性ライフサイクル研究所のトレーナー(前村よう子)	記事内で「自信」が使われている	なし
【アピール】「生き方」教える性教育が必要(産経・1997)	オピニオン	青少年をめぐる問題と教育について	明星大学教授(高橋史朗)	読み取れず	なし
［新教育の森］子どもの風景９７／番外　新潟市内の公立中・高校生にアンケ　／新潟(毎日・1997)	地域(新潟)	子どもへのアンケート結果	記者(国保環)	記事内に「自尊感情」が使われている	なし
［少子化の風景］パート１（３）心の病気抱える子に「過剰適応」の傾向（連載）(読売・1997)	生活Ａ	少子化・子育て	記者(辻美弥子)	読み取れず	なし
今の子供たちに共通の感覚…　「透明な存在であるボク」(読売・1997)	生活Ａ	子育て(不登校・いじめへの対応)	教育心理カウンセラー(富田富士也)	読み取れず	なし
いじめる側は：３手下の論理　いじめ考（きょういく９８）(朝日・1998)	教育	いじめ	全国養護教員会副会長	読み取れず	なし
「感性・心の教育」座談会（上）あすからフォーラム親や教師の変化が改革の近道(産経・1998)	社会	「感性・心の教育フォーラム」の狙いについて	明星大学教授(高橋史朗)	読み取れず	なし
全国教研が閉幕「荒れる学校」浮き彫り　求められる生徒への信頼(毎日・1998)	社会	校内暴力など	小学校教諭(園田雅春)	読み取れず	なし

［新教育の森］無力感、８割強も－－鹿沼市教委・小中高生アンケート(毎日・1998)	地方(栃木)	中高生へのアンケート結果	大学講師(専門：人間性心理学)(佐々木英和)	読み取れず	なし

簡単にまとめると、掲載面については地域版の記事が最も多く見られた。その他には社会・教育・生活といった部分でも見られ、いじめや不登校、校内暴力などの学校問題や親子関係、子育てといった文脈で「自己肯定感」という言葉が多く使われていることがわかった。発言者の属性も多岐にわたるが、前述したような文脈で使われることが多いためか、学者というよりはカウンセラーなどが多く見られることがわかった。

類似概念との使い分けについては、多くの記事ではそもそもどのような意味合いで「自己肯定感」という言葉を使用しているのかについての説明がなかったため、区別がなされているのかどうかについて読み取ることはできなかった。しかし、1996 年 11 月 27 日の朝日新聞の記事、「多元的な自尊心異者と交わり自信回復を 宮台真司(ウオッチ論潮)」では「自尊心」という言葉が多用されていたこと、また 1997 年 2 月 1 日の毎日新聞の記事、「[新教育の森]子どもの風景 97/番外 新潟市内の公立中・高校生にアンケ」では「自尊感情」の訳語である「セルフエスティーム」が自己肯定感と同義のものとして扱われていたことから、「自己肯定感」という言葉は、初期からその類似概念と明確な区別をされていなかったことがわかる。

そのためか、提唱者である高垣忠一郎の名前が「自己肯定感」という言葉と同時に登場していることはほとんどなく、関係性が読み取れたのは 1993 年 5 月 10 日の朝日新聞の「ランダム通信・10 日」記事内の「高垣忠一郎・大阪電通大教授の講演「子供の自己肯定感と登校拒否」」が行われる、という一文のみであった。1990 年代に「高垣忠一郎」という単語が記事内に登場することは度々あったが、(朝日:23 件、読売:1 件、日経:1 件、毎日:11 件、産経:2 件) そのほとんどは不登校問題についての記事であり、「自尊感情」や「自己肯定感」と同じ記事内に高垣の名前が上がることはなかった。

また先ほど「多くの記事ではそもそもどのような意味合いで「自己肯定感」という言葉を使用しているのかについての説明がなかった」と述べたが、1998 年 1 月 12 日の朝日新聞の記事、「いじめる側は:3 手下の論理 いじめ考(きょういく 98)」では説明に近い記述を読み取ることができた。ここには、「しかし、今の子たちは、家庭や学校生活において、自分の存在を認めてもらっているという自己肯定感を持てる場合が少なく、自分の意思を確立したいという表現の一つとして、いじめている子も見られる。」という一文があり、自己肯定感を自分の存在を認めてもらっているという感覚として捉えていることがわかった。

以上のことから、1991 年～1998 年の新聞記事において「自己肯定感」という言葉はいじめや不登校、校内暴力などの学校問題や親子関係、子育てといった文脈で使用されるこ

とが多く、掲載面や発言者の属性はそこに関わるものが多いこと、提唱者である高垣に言及している記事、言葉の意味に言及している記事はほとんどなく、類似概念との明確な区別は特 に見られないことなどがわかった。

4-5-2.五紙合計の記事数が 50 以下の時期(1999 年～2007 年)について

この時期の抽出語の大きな特徴として、「事件」や「少年」といった単語がこのときだけ 50 位以内に入っているということがある。これは、この時期「自己肯定感」が 90 年代後半あたりから社会問題となった少年犯罪の凶悪化と関連して語られることが多かったことを示していると言えるだろう。ここでは、「事件」＋「自己肯定感」で検索をかけヒットしたもののうち、「①「事件」が記事の内容の中心にない場合」「②「学級では色々な事件が起きる」など「事件」が犯罪以外の文脈で使われている場合」「③「事件」が未成年によるものでなかった場合」「④1 つの記事の中に複数のトピックがあり、「自己肯定感」と「事件」がそれぞれ別のトピックで使用されていた場合」を除いた記事について扱う。尚、上記の条件を満たした記事の一覧については付録(表 15)に添付した。

記事の内容としては、犯罪を犯した若者の自己肯定感の低さについて語るものが多い。例えば 2000 年 2 月 8 日の産経新聞の記事では、「新潟県の当時小学四年の少女誘拐・監禁事件と京都府の小二男児殺害事件。2 つの事件の容疑者の共通点について、社会評論家の芹沢俊介氏は、両容疑者の共通点について「自分が自分でいいという安心感、自己肯定感を持っていないように感じられる」と分析する。佐藤容疑者は上司に遅刻をしかられて退職し、部屋に閉じこもるようになった。京都の岡村容疑者は高校二年で留年するという逆境を機に、内向的になっていく。「本当の愛情を注がれた子供は自己を肯定する力がある。それがないと常に不安で犯罪に走るケースも多い」（芹沢氏）。両容疑者は心の奥に底知れない不安を抱えていたのか。」と書かれている。

また 2002 年 10 月 8 日の朝日新聞の記事では「新潟市の田沢裕貴さん（当時１５）が高校入学直前の今年４月、５人の少年から集団暴行を受け死亡した事件で、傷害致死などの罪に問われた１７歳の少年２人に対する公判が７日、新潟地裁であった。(中略)弁護側はこの少年について「学力の面でのコンプレックスが大きく、自己肯定感を失い八方ふさがりの状態だった」と当時の様子を説明した。」、2005 年 10 月 15 日の日経新聞の記事では「「主文、原判決を破棄。いずれも死刑に処する」。川原誠裁判長がゆっくりとした口調で判決を宣告したのは、開廷から約五時間たった十四日午後三時過ぎ。名古屋高裁第二法廷では傍聴人が息をのみ、被告三人は身じろぎせぬまま立ちつくした。(中略)更生の道断つな　少年法に詳しい斎藤義房弁護士の話　被告らは幼少期に親や周囲の大人の適切な保護を欠いており、自己肯定感が持てず、他人を尊重する気持ちも育っていなかった。知的・情緒的に未成熟な少年らの集団心理と、仲間に弱みを見せられないという虚勢心が引き起こした事件といえる。被告らには、生涯かけて被害者の死と向き合わせるべきで、償

いと更生の道を閉ざすべきでない。」とあり、事件の容疑者を弁護するような文脈で「自己肯定感の低さ」について記述がなされていることがわかる。

他にも、この時期の記事の特徴として「子育て」や「家庭」、「母親」といった単語がこのときだけ抽出語ランキング 50 位以内に入っている、ということも挙げられる。これらの単語は、これ以降の時期においても出現回数自体は増加しているのだが、全体を占める割合でみるとこのときが最も多いため、この時期は家庭との関連で「自己肯定感」について語られることが多かったと言えるだろう。具体的には、「雇用は不安定、経済的にも苦しい、けれど…　母子家庭での育児「胸張れる」７割」という見出し(2004 年 4 月 23 日/読売新聞)の母子家庭での子育てについての記事や、虐待と自己肯定感の関連について語る記事などが見られた。

虐待について言及している記事では、「［聞きそびれ］虐待防止とネットワーク　岩城正光弁護士＝秋田」(2007 年 2 月 6 日/読売新聞)の「児童虐待防止をテーマにしたシンポジウムが２００６年１２月１６日、秋田市文化会館で開かれ、日本子どもの虐待防止民間ネットワーク代表の岩城正光（まさてる）弁護士が「虐待防止とネットワーク」と題して講演しました。(中略) 。自己肯定感を持てない子どもは、大きくなると虐待する親に変わってしまう。児童虐待の連鎖は、ここから生ずるのです。子どもを安全な場所に確保し、寄り添い、心の傷を癒やす。親にも自己肯定感を持てるような支援が必要です。学校、保育園、弁護士、医者らみんなで情報交換し、１００％にしなければいけない。ネットワークを生かせず、悲しい事件が繰り返されているのです。」という記述や、「防げ児童虐待、感情抑制学ぶ 25 日から、親向けにプログラム【大阪】」(2007 年 6 月 7 日/朝日新聞)の「子どもをたたいてしまう、無視してしまう――。自分の感情を抑えられず、子どもを虐待してしまう親を対象としたプログラム「ＭＹ　ＴＲＥＥペアレンツ　プログラム」が２５日から、大阪府高槻市紺屋町の市男女共同参画センター（市立総合市民交流センター内）で始まる。(中略) １回２時間半で全１５回。自分の体験を話すとともに、感情をコントロールする▽自己肯定感を高める▽自分や子どもをほめる――といったことを学んでいく。」という記述に見られるように、虐待をしてしまう「親」に焦点を当て、親の自己肯定感を高めることが虐待防止にもつながるとする記事が複数見られた。

以上のことから、この時期の記事の特徴としては、まず一つに社会問題ともなっていた少年犯罪と関連づけて「「自己肯定感」の低さ」について語るものが一定の割合を占めていたこと、次に「母親」「家庭」などの単語が全体に対して占める割合が多く、この頃は「自己肯定感」という言葉が、学校教育というよりは家庭での子育てと結びつけて語られることが多かったということが言えるだろう。

4-5-3.五紙合計の記事数が 51～100 の時期(2008 年～2012 年)について

この時期の抽出語の特徴としては、「障害」や「支援」といった単語がこれまでと比べて急増しているということが挙げられる。ここではその記事の内容について触れるとともに、これらの単語が急増した理由についても述べる。

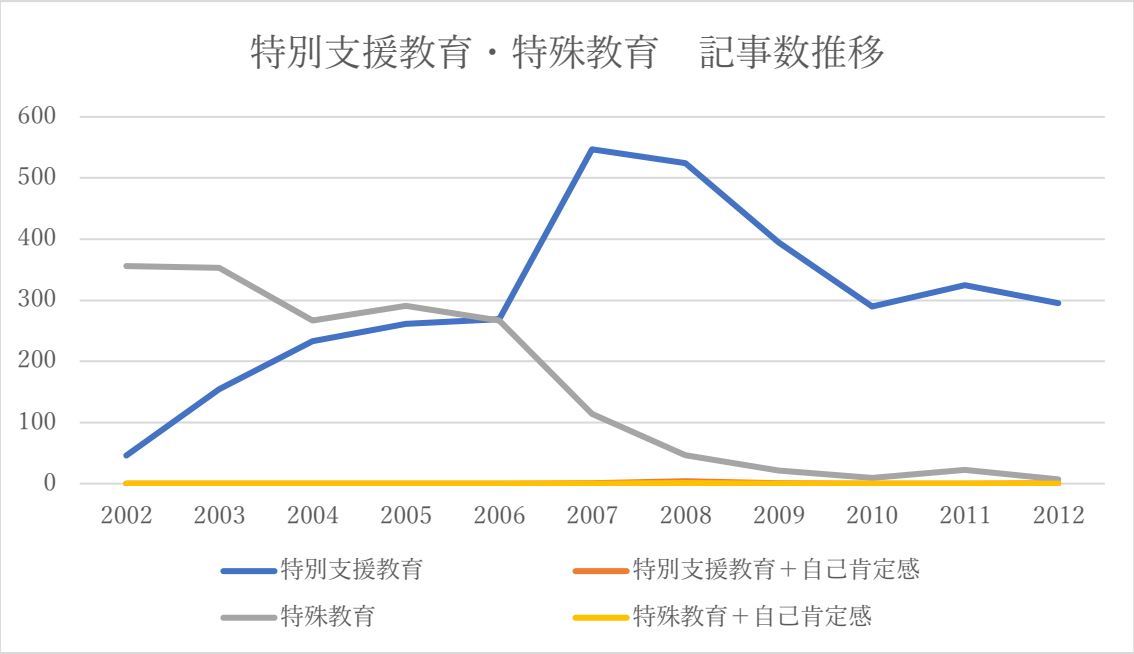
まず注意すべき点として、「障害」も「支援」も、「自己肯定感」と同じ記事内に出現しているからといって、必ずしも常に同じ文脈で使われているわけではないということがある。例えば「障害」については「発達障害」や「学習障害」、「性同一性障害」、「摂食障害」、「心的外傷後ストレス障害(PTSD)」などが見られ、「支援」についても「子育て支援」や「就労支援」、「特別支援」などが見られた。そのため、抽出語の「障害」や「支援」は必ずしも同じ意味・同じ文脈で使われているわけではないということには注意が必要である。

ここで、では抽出語の「障害」はどの意味で最も多く使われているのかという問いが生じるが、KH Coder において複合語の抽出を行ったところ、「障害」と結びつく語としては、「発達障害」が最も多く登場することがわかった。またこの時期の共起ネットワークに着目しても、「発達」と「障害」が線で結ばれており、2 つの語に関連性があること、抽出語の上位に「発達」は存在するがその他の「障害」に結びつく語は存在しないことなどから、抽出語の「障害」は「発達障害」の意味で使われていることが多いとわかる。そこでここでは、「発達障害」＋「自己肯定感」でヒットしたもののうち、「1 つの記事の中に複数のトピックがあり、「自己肯定感」と「発達障害」がそれぞれ別のトピックで使用されていた場合」を除いた記事を扱うこととした。尚、上記の条件を満たす記事の一覧は付録(表 16)に添付した。

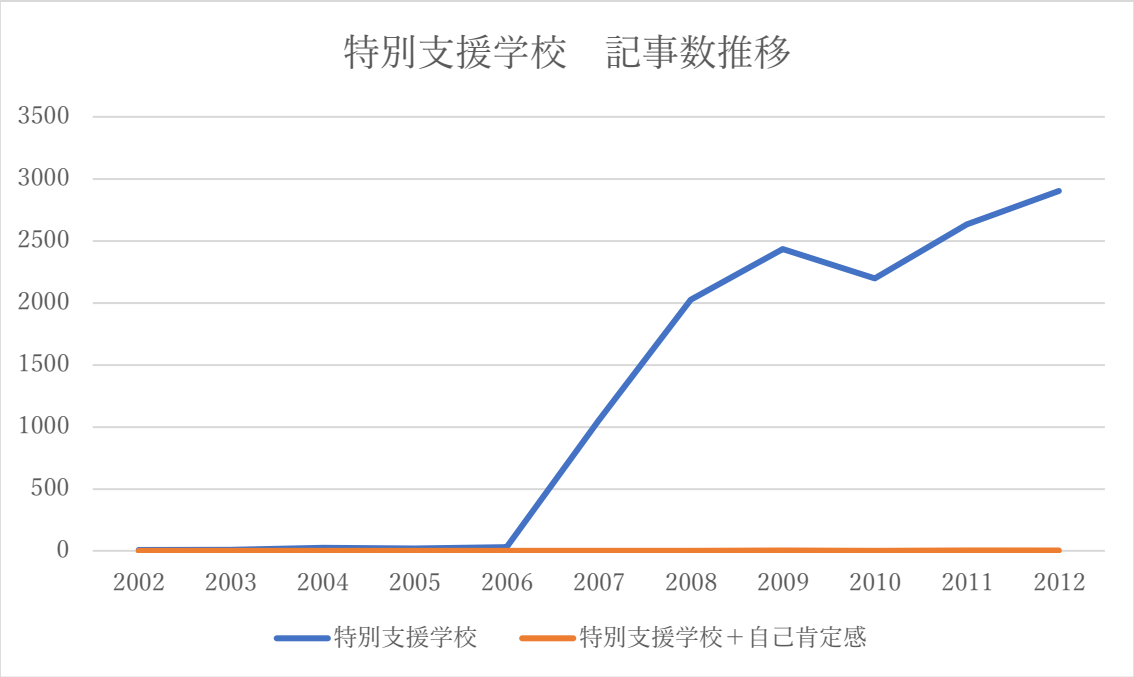
記事内容については、2006 年 3 月の学校教育法等改正によって 2007 年 4 月から特別支援教育が小・中学校や高校に順次導入されたことについて触れているものも多く、この時期以前と比較すると特別支援教育や特別支援学校についての記事が増えている傾向がある。

その影響もあってか、この時期の抽出語の特徴としては「教育」という単語が全体に占める割合が増加し、かつ単語の出現回数も増加しているというものもある。 先と同じように複合語の抽出を行ったところ、「教育」と結びつく語としては、「特別支援教育」が最も多かった。文部科学省 HP の「特別支援教育めぐる制度改正」のページを確認したところ、特別支援教育の端緒はやはり 2006 年 3 月の学校教育法等改正によりはじまった 2007 年以降の特別支援教育の実施にあったため、これによる記事数増減への影響を見るため、2007 年を基準にした前後 5 年(2002 年 1 月～2012 年 12 月)の記事内に、改正法内に登場する「特別支援教育」「特別支援学校」「特別支援学級」のいずれかと「自己肯定感」という語が含まれるものを検索した。また「特別支援教育」と「特別支援学級」については、改正以前の言い方である「特殊教育」「特殊学級」についても比較のため調査した。その結果が以下のグラフである。

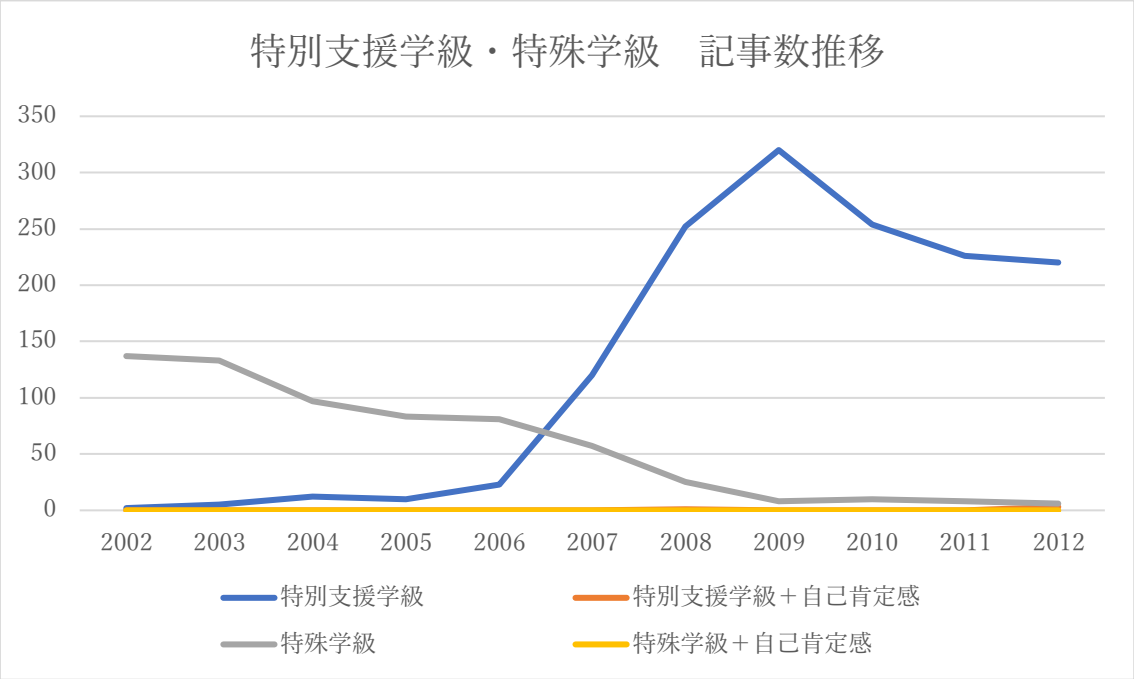
[グラフ 8：全国紙五紙における特別支援教育・特殊教育　記事数推移(2002 年～2012 年)



[グラフ 9：全国紙五紙における特別支援学校　記事数推移(2002 年～2012 年)]



［グラフ 10：全国紙五紙における特別支援学級・特殊学級　記事数推移(2002 年～2012 年)］



結果として、2006 年～2007 年の特別支援教育の開始のタイミングで「特別支援教育」「特別支援学校」「特別支援学級」のいずれも増加していた。また「特別支援教育」以前の「特殊教育」や「特別支援学級」以前の「特殊学級」は同じタイミングで減少しており、入れ替わりが起こっていることが確認できた。一方で、特別支援の文脈で「自己肯定感」が含まれている記事は割合的に多くはないこともわかった。

「特別支援教育 or 特別支援学校 or 特別支援学級＋自己肯定感」の記事(1 つの記事の中に複数のトピックがあり、「自己肯定感」と特別支援がそれぞれ別のトピックで使用されていた場合は除く)についても内容の確認を行ったところ(記事の一覧は付録(表 17)に添付)、記事内で「自己肯定感」という言葉を使っているのは特別支援学校の教諭や支援を必要とする子どもを持つ親などが多かった。

例えば、2008 年 3 月 4 日の毎日新聞の記事では、大潟町小の特別支援教育コーディネーターを担当している大野教諭が、特別支援教育の一環で行っている個別指導について、「子どもが努力した成果を実感し、自己肯定感を高めていて、効果を感じます」と語っており、2008 年 5 月 31 日の読売新聞の記事では、「ＬＤ親の会けやき」副会長であり、学習障害(LD)の子どもを持つ新堀和子さんが「特別支援教育という形はできあがったが、中身を充実させていくのはこれから。まずは子供のよい所を見つけてほめ、自己肯定感を高めてあげてほしい。そうすれば子供は自信をつけていくから」と主張している。

他の記事についても「自己肯定感」という言葉を用いているのは特別支援教育の現場に携わっている人々であり、政策立案に関わる人々は登場しなかった。このことから、「自己肯定感」でヒットした記事の中に「特別支援教育」が多く含まれたのは、特別支援教育が支援を必要とする子どもの自己肯定感を守るために生まれたからではなく、あくまで現場の人々が特別支援教育によって子どもの自己肯定感向上の効果や必要性を感じたためであると言えよう。

また発達障害や特別支援に関わるものとして、この時期には 2012 年に発達障害がある子どもに向けた「放課後等デイサービス」の制度化なども行われているが、これに関する記事は次の 2013 年～2016 年の時期に多く見られたため、今回取り上げた 2008 年～2012 年の記事数増加への影響はあまりなかったと推測できる。

他に、この時期の抽出語の特徴としては「学校」という単語が全体に占める割合が増加し、かつ単語の出現回数も増加しているというものがある。この要因を調査するため、「学校＋自己肯定感」で検索をかけ、先述した特別支援教育を除く国や地方が関わった取り組みや全国的な調査について取り上げた記事を探したところ、京都府教育委員会によるフリースクールに関する新制度についての記事や道徳の教科化についての記事、東京都教育委員会の自己肯定感を高める指導法の模索についての記事などがヒットした。

まずフリースクールに関する新制度については、2008 年 2 月 7 日の毎日新聞の記事で「不登校の小中学生が府教委認定のフリースクールで受けたカリキュラムを、本来在籍している学校での学習評価対象とする」というものが紹介されており、「フリースクールでの学習成果を学校の成績に反映することで、不登校児童・生徒の自己肯定感を高めるのが目的」だとされていた。

次に道徳の教科化については、2008 年 2 月 21 日の日経新聞の記事で「(前略)千葉県銚子市立明神小学校は二〇〇二年から、全校で道徳の授業に取り組んできた。(中略)道徳主任の信田教諭は、全教科の授業や活動に道徳的観点を盛り込むことに力を注ぐ。「新学習指導要領の内容は、まさに本校が取り組んできたこと」。栗林武則校長は胸を張る。自己肯定感が乏しく自分に自信が持てない。規範意識の低下。陰湿ないじめや校内暴力。人間関係づくりが下手……。全国の学校は、子供たちの心の荒廃に直面する。だが、一部の熱心な学校を除けば、道徳教育の形骸化が進み、有効な手だてを打ち出せないでいる。ゆとり教育の見直しに話題が集中する学習指導要領改訂だが、もう一つの焦点は道徳だった。最初に動いたのが教育再生会議。二次、三次報告に「徳育の教科化」を盛り込んだが、中央教育審議会は最後まで教科化に慎重だった。文科省改訂案も「道徳教育は、道徳の時間を要に学校の教育活動全体を通じて行う」と位置づけただけで、大幅改訂は見送った。教科化には、「教員免許」「検定教科書」「数値評価」の“三点セット”が必要。心の問題を扱う道徳に、検定教科書や評価はなじまないというのが中教審の判断だ。だが土田雄一千葉大准教授は懸念する。「この程度の改訂では、現場は『道徳は現状のままでいい。それ

より学力向上だ』と誤解しかねない」専門家の間でも教科化への判断は割れる。」というものがあった。

最後に東京都教育委員会の自己肯定感を高める教育については、まず 2008 年 11 月 25 日の毎日新聞の記事で「◇子どもに自信持たせよう　東京都教育委員会は来年度から、自分に自信の持てない子どもの自尊感情を高める指導方法について研究を始める方針を固めた。日本の子どもは最近の学力テストや国際調査で自己肯定感が低いことが分かっている。いじめや不登校など教育問題の根底にも子どもの自尊心が少ない点があるともみられ、向上策の開発に着手する。」として取り上げられており、次に 2009 年 3 月 11 日の産経新聞の記事で「日本の子供たちは自分が嫌い－。東京都教育委員会が公立の小中学生、都立高校生を対象に「自尊感情」について調査したところ、中高生の５～６割が「自分」を好意的にとらえていないことが１０日、分かった。日本の子供たちの自尊感情の低さはこれまでも指摘されてきたが、自治体レベルで大規模な調査が行われたのは初めて。都教委は現状を深刻に受け止め、「自分の存在や価値を積極的に肯定できる子供を育てる」とし、４月から小学校で試験的に“自尊教育”を実施する。(中略)自尊感情が低いことについて、同研究所の千石保理事長は「謙虚さ、控えめを良しとする日本の文化がまだ根強いのが一因」と指摘。(中略)もっと自分に自信を持たせるような教育を進める必要がある」と話している。(中略)都教委は今後、具体的な指導方法について国内の大学と連携して研究を進め、４月からは小学校１校で試験的に“自尊教育”を実施する予定だ。」として都教委が取り組みを進めていることがわかった。

こうした国や地方による取り組みや、公立の小中高等学校に通う生徒を対象とした全国的な調査が行われる中で、初めは家庭との関連で語られることが多かった「自己肯定感」が、学校教育との結びつきで語られることが増加していったと言えるだろう。

4-5-4.五紙合計の記事数が 101～200 の時期(2013 年～2016 年)について

2013 年から 2014 年にかけてのタイミングでは、記事数がこれまでで最も大きく伸びている。そこでこの時期については、抽出語からこの時期特有の特徴を見出すと同時に、この記事数の伸びの要因についても調査をしたい。

まず、この時期の抽出語の大まかな特徴としては、施設・保護がこの時期のみランキング入りしているというものがある。まず「施設」について、「施設」＋「自己肯定感」で検索をかけヒットしたもののうち、「①「施設」が記事の内容の中心にない場合」「②1 つの記事の中に複数のトピックがあり、「自己肯定感」と「施設」がそれぞれ別のトピックで使用されていた場合」を除いた記事の内容を確認することとした。尚、上記の条件を満たす記事の一覧は付録(表 18)に添付した。

添付した表からもわかるとおり、一口に「施設」と言っても文脈は多岐にわたっているが、最も多いのは「児童養護施設」であった。児童養護施設については、児童養護施設で

暮らす子どもたちは自己肯定感が低いことが多いとする記事(2015 年 8 月 18 日(読売)・2016 年 2 月 18 日(朝日)など)に加え、里親制度との関連で語られる記事も見られた。前者については施設で働く人の発言の中に「自己肯定感」が含まれる場合が多いが、後者については厚生労働省が平成 23 年の里親委託ガイドラインの中で「特定の大人との愛着関係の下で養育されることにより、自己の存在を受け入れられているという安心感の中で、自己肯定感を育むとともに、人との関係において不可欠な、基本的信頼感を獲得することができる」と述べており、これに触れている記事も存在した(2013 年 12 月 14 日(読売)・2015 年 8 月 26 日(産経)など)。

また他に、発達障害や知的障害を抱える子どもたちのための「放課後等デイサービス」を実施している施設についての記事も存在した(2014 年 4 月 22 日(産経)・2016 年 12 月 20 日(毎日)など)。厚生労働省のガイドラインによれば、この制度は、「児童福祉法第 6 条の２の２ 第 4 項の規定に基づき、学校（幼稚園及び大学を除く。以下同じ。）に就学している障害児に、授業の終了後又は休業日に、生活能力の向上のために必要な訓練、社会との交流の促進その他の便宜を供与する」ものであり、ガイドラインの中には、放課後等デイサービスにおいては「子どもの発達に応じて必要となる基本的日常生活動作や自立生活を支援するための活動を行う。子どもが意欲的に関われるような遊びを通して、成功体験の積み増しを促し、自己肯定感を育めるようにする」という文言も存在する。上記のように、国のガイドラインにおいても「自己肯定感」という言葉が用いられていることがこの時期の大きな特徴であり、またそれを通じて「自己肯定感」という言葉が広がりを増したことが記事数増加の 1 つの要因になっているのではないかと推測できる。

記事に登場した施設としては、上記以外に就労支援施設や少年施設、不登校になった子どものための施設(フリースクール)など若者向けの施設が多く見られたが、介護施設についての記事もあることから、「自己肯定感」という言葉が子育て・教育以外の分野においても広がりを見せていることがわかった。

続いて、この時期のみランキング入りしているもう 1 つの用語である「保護」について、「保護」＋「自己肯定感」で検索をかけヒットしたもののうち、「①「保護」が記事の内容の中心にない場合」「②1 つの記事の中に複数のトピックがあり、「自己肯定感」と「保護」がそれぞれ別のトピックで使用されていた場合」を除いた記事の内容を調査した。尚、上記の条件を満たす記事の一覧は付録(表 19)に添付した。

保護については「保護者」が最も多く見られたが、保護者が登場する文脈は①学校教育現場における保護者(2014 年 3 月 31 日(朝日)・2015 年 2 月 18 日(読売)) ②障害のある子どもを持つ保護者(2013 年 2 月 18 日(毎日)・2016 年 6 月 24 日(日経)) ③貧困家庭の保護者(2015 年 1 月 31 日(毎日)・2016 年 9 月 8 日(読売)) ④子供にとっての保護者の重要性(児童養護施設・里親制度)(2013 年 3 月 5 日(朝日)・2015 年 6 月 19 日(毎日))など多岐にわたっていた。また保護者のつぎに多く見られたのは「生活保護」であり、貧困家庭の子どもの自己肯定感の低さについて語っている記事も比較的多く見られた。

以上のことから、この時期に記事数が大きく増加した要因としては、厚生労働省の里親委託ガイドラインや、発達障害や知的障害を抱える子どもたちのための放課後等デイサービスのガイドラインにおいて「自己肯定感」という言葉が使用されたことにより言葉の知名度が上がったこと、学校教育や子育ての文脈で使われることが多いという傾向は変化していないものの幅広い世代に対して「自己肯定感」という言葉が使われるようになったことなどがあると推測される。

4-5-5.五紙合計の記事数が 201 以上の時期(2017 年～2023 年 6 月)について

この時期においても、2018 年から 2019 年にかけてのタイミングで記事数が 2013 年から 2014 年のとき以上に大きく伸びている。抽出語ランキングや共起ネットワークを見ると、他の時期と比較して大きく変化している点はないが、1 つ前の時期にはじめてランキング入りした「女性」という語がこの時期に大きく伸びているという特徴があるため、この要因について調査する。「女性」＋「自己肯定感」で検索をかけてヒットする記事数は 450 記事以上あったため(朝日 197、読売 96、日経 57、毎日 75、産経 43、計 468 記事)、ここでは「女性」＋「自己肯定感」で検索をかけてヒットした記事について改めて KH Coder を用いた計量テキスト分析を行い、その後抽出語から傾向を調査する。

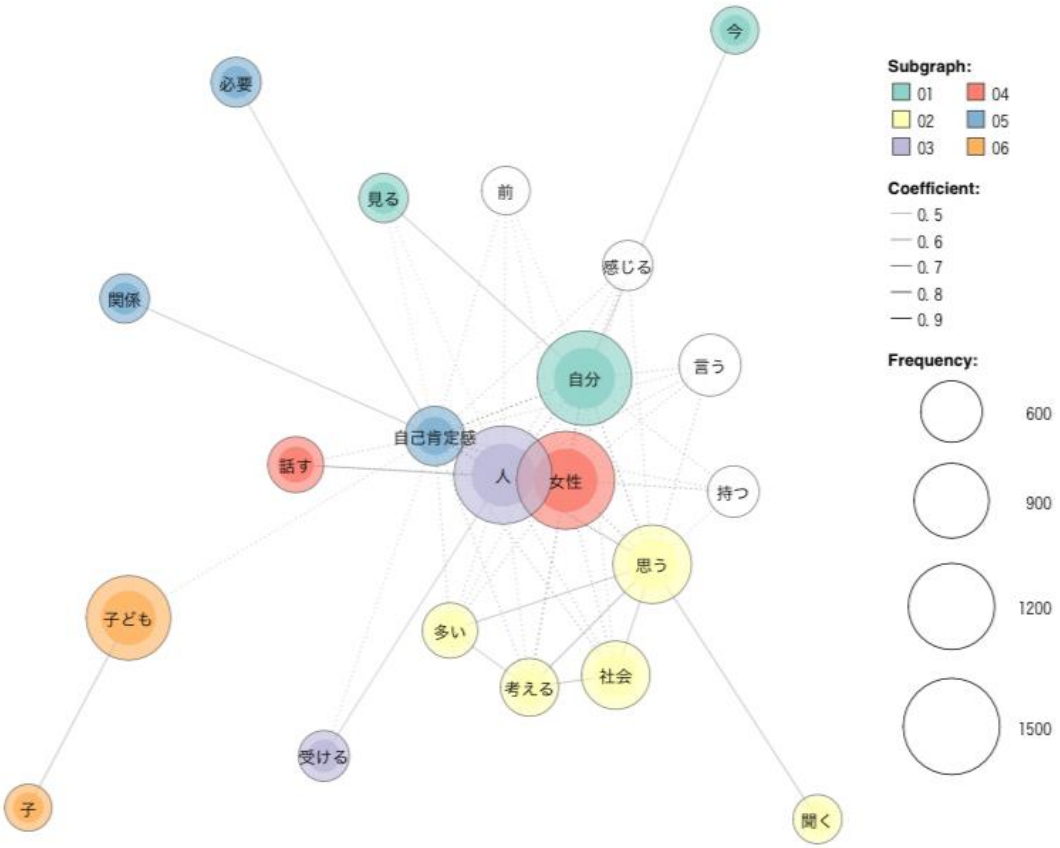
KH Coder による計量テキスト分析の結果得られた抽出語のランキングと共起ネットワークは以下の通りである。

［表 20：「自己肯定感」ヒット記事と「女性＋自己肯定感」ヒット記事の抽出語ランキング比較］

2017 年以降の抽出語ランキング		女性＋自己肯定感の抽出語ランキング (2017 以降)	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
子ども	4106	女性	1558
自分	3606	人	1557
人	3511	自分	1448
教育	2316	子ども	1151
思う	2212	思う	993
社会	2149	社会	750
学校	2143	言う	614
自己肯定感	2114	自己肯定感	560
支援	1999	考える	532
考える	1556	支援	530
日本	1519	学校	522
子供	1502	日本	518
生徒	1500	話す	497

障害	1485	男性	491
親	1485	多い	486
話す	1444	相談	476
女性	1407	教育	459
子	1385	障害	423
言う	1372	親	420
活動	1334	持つ	419
多い	1275	受ける	408
持つ	1224	仕事	407
生活	1205	問題	399
必要	1143	感じる	397
感じる	1103	必要	394
問題	1100	関係	385
受ける	1053	見る	382
関係	1008	東京	381
聞く	1008	聞く	379
見る	993	前	369
相談	987	今	356
学習	982	性	354
前	981	生活	351
授業	968	子	348
東京	959	生きる	343
家庭	950	知る	334
調査	933	活動	326
参加	932	言葉	318
全国	914	働く	314
児童	909	経験	312
仕事	902	心	307
地域	889	時間	301
心	869	声	295
学ぶ	868	家庭	294
時間	864	参加	292
生きる	863	出る	286
今	855	増える	286
高校	850	写真	278
経験	834	家族	272
知る	831	気持ち	272

［図 6：女性＋自己肯定感　共起ネットワーク(2017 年～2023 年 6 月)］



結果として、「女性＋自己肯定感」の抽出語や共起ネットワークをこの時期の記事全体を対象としたそれらと比較してもあまり大きな違いはないことがわかった。しかし、共起ネットワークに学校教育関連の語が登場していないことや、女性＋自己肯定感の抽出語ランキングには「生徒」「学習」「授業」「児童」「高校」などの単語がランキング入りしていないことから、「女性」という言葉が含まれる記事は、学校教育以外の文脈のものが多いと推測できる。

そこで、具体的には「女性＋自己肯定感」の記事にはどういった内容のものが多いのかを調査するため、「女性＋自己肯定感」の抽出語ランキングのうち、全体の抽出語ランキングには登場しない語を塗りつぶし、「女性＋自己肯定感」の抽出語から全体の抽出語ランキングに共通する語を削除したランキング(=女性＋自己肯定感の記事にのみ特有の語だけを抽出したランキング)を作成した。その結果が以下である。

［表 21：「女性＋自己肯定感」ヒット記事にのみ特有の抽出語ランキング］

	抽出語	出現回数
1	男性	491
2	性	354
3	言葉	318

4	働く	314
5	声	295
6	出る	286
7	増える	286
8	写真	278
9	家族	272
10	気持ち	272
11	大切	243
12	人生	242
13	児童	241
14	虐待	234
15	教授	228
16	大学	227
17	話	223
18	使う	221
19	会社	218
20	自身	218
21	女子	218
22	企業	216
23	時代	216
24	結婚	214
25	語る	213
26	施設	213
27	世界	213
28	保護	213
29	被害	212
30	大人	211
31	授業	209
32	変わる	209
33	環境	208
34	思い	207
35	子育て	206
36	伝える	206
37	母親	206
38	高い	204
39	指導	203
40	世代	197
41	地域	197
42	多様	196
43	始める	195
44	当事者	194
45	相手	193

46	人間	192
47	多く	192
48	求める	190
49	低い	190
50	大切	243

上位に「働く」という語が入っている他、「会社」や「企業」という語もランキング入りしていること、また「結婚」という語もランキング入りしていることから、この時期は子どもや子どもを持つ母親だけでなく、大人の女性自身に焦点を当てた記事も増加しているのではないかと推測できる。まずここでは、出現回数が 300 以上である「男性」「性」「働く」について調査する。また「言葉」も出現回数は 300 以上だが、「言葉」が記事内容の中心にある場合がほとんど見受けられなかったためここでは扱わないこととする。

＜女性＋男性＋自己肯定感についての調査結果＞

「女性＋男性＋自己肯定感」でヒットした記事のうち、①女性、男性が代名詞としてしか用いられていないなど記事の中心にない場合、②女性、男性、自己肯定感が記事内の別のトピックで使用されている場合を除いた記事について内容の確認を行った。尚、上記の条件を満たす記事の一覧は付録(表 22)に添付した。

内容を確認したところ、記事のトピックの中心には女性がくることが多いが、男女半々のもの、数は少ないが男性中心のものもあった。女性が中心の記事の場合、内容としては女性の働き方や人生設計、社会進出についてのものが比較的多く見られ、たとえば 2020 年 4 月 6 日の日経新聞の「管理職への登用を強化するため、企業などが女性の「自信のなさ」を克服する対策を取り始めた。自分を過小評価し、挑戦意欲を持てない人が多いのが背景だ。研修やスキル向上で意識が変わる人も多い。(中略)働きやすい制度を整えた企業には女性の自信のなさを払拭し、挑戦意欲を引き出すフォローが課題だ。(中略)自己肯定感の低さは女性に多いという。(中略)こうした内面の課題は実態把握すら難しい。それでも単に個人の考え方のくせだと片付けず、多くの人が抱える課題として向き合い続けることが女性活躍のヒントになりそうだ。」という記事や、2023 年 5 月 1 日の日経新聞の「(前略)女性は自身を過小評価しがちなので、女性の活躍を進めるには女性の自己肯定感を高める施策が必要だが、同時に女性同士のネットワークを強化し、「オールドボーイズクラブ」への対策を打つべきだ。(中略)ハーバード大の調査によると、男性上司の下では男性の方が女性より早く昇進する確率が高い。男性幹部が多い職場では女性に昇進のチャンスが巡ってこない可能性もある。」という記事などがあり、働く女性の環境に目を向けた記事はもちろん、女性自身の特性・性格に目を向けた記事もあることがわかった。

男女半々のトピックの中で最も多く見られたのは性的少数者と呼ばれる人々についての記事だった。ここでは、「女性」「男性」が中心に語られるというよりは、「性的少数者」と呼ばれる人が話題の中心にあり、彼らについて説明する言葉として「女性」「男

性」という言葉が用いられている、という形の記事が多かった。性的少数者を中心に取り上げた記事については次の「女性＋性」の項目で扱うため、詳しい記事内容はここでは割愛する。

最後に、数は少ないが男性が記事内容の中心にあるものもあった。たとえば、「男らしさ」について扱った 2022 年 2 月 5 日の朝日新聞の記事では、「(前略)現在、多数派の男性には加害性や「男性特権」があり、意識や生き方の内省では足りず、社会変革へ向けた行動が必要である、とされる。(中略)そもそも男性の生きづらさや不自由を積極的に言葉にすることは、すでにある性差別の無視や軽視につながりかねないため、男性が男性問題を論じることには独特の「語りがたさ」がある。それに耐えられず、女性やマイノリティーを敵視したり、「多数派こそが被害者だ」と主張したりするケースも見られる。男性たちがこうした形で闇落ちすることなく、粘り強く自分と社会を変えていくためには、男性学のさらなる展開が必要だろう。「草食系男子」という言葉を定着させた哲学者の森岡正博は、『感じない男』で、なぜ自分がミニスカや制服に欲情するのかを自分事として分析した。そして男たちの中にも自己肯定感の欠如や、自分の身体は汚いという嫌悪感があり、ゆえに「男らしさ」に執着し、それが様々な歪（ゆが）みや加害性として現れる、という構造をえぐりだす。身近な男の欲望を見つめつつ、文明論的な問いへと開かれた一冊だ。(後略)」とされていた。

また家庭での家事分担についての記事(2022 年 10 月 1 日(朝日))もあり、「「総務省が 5 年に１度、国民の生活スタイルを調べる「社会生活基本調査」で、家事関連時間の男女格差は、１５年前とほとんど変化していないことがわかりました。一体どうしたら？　これまで真剣に考えてこなかった男性記者（３３）が、「イクメン」の提唱者の一人で、コンサルタントの渥美由喜（なおき）さんに聞きました。」として男性記者がインタビューを行っているものもあった。

＜女性＋性＋自己肯定感についての調査結果＞

「女性＋性＋自己肯定感」でヒットした記事のうち、①女性が代名詞としてしか用いられていないなど記事の中心にない場合、②女性、性、自己肯定感が記事内の別のトピックで使用されている場合、③必要「性」など「性」という単語そのものに大きな意味があるわけではなく、別の語に置き換え可能な単語内にしか「性」が登場していないものはカットした。加えて、記事内に登場する「性」を含む言葉が「女性」もしくは「男性」しかなかった場合は「女性＋男性」と同じ文脈になるためカットしたが、記事内に「性的少数者」など別の「性」を含む単語が登場している場合は内容確認を行うこととした。尚、上記の条件を満たす記事の一覧は付録(表 23)に添付した。

「女性＋性＋自己肯定感」の記事内容としては、①性的少数者についての記事、②性被害・性犯罪について扱った記事、③性教育についての記事が多く見られ、一つの記事の中に①～③のいずれかが重複して扱われている場合もあった。

まず性的少数者に焦点を当てた記事については、先述したとおりトピックの中心に来るのは「女性」ではなく性的少数者と呼ばれる人々であり、彼らについて説明する言葉として「女性」「男性」という言葉が用いられていた。

具体的には、たとえば 2017 年 3 月 10 日の「学習指導要領の改訂案では、小中学校の体育で「思春期になると異性への関心が芽生える」と記載された。いまの指導要領と変わっておらず、多様な性についての記載を求めてきたＬＧＢＴなど性的少数者の当事者らは「ＬＧＢＴなどの子どもが教室にいるという実情を反映した内容にしてほしい」と訴える。(中略)室井さんは「ＬＧＢＴ当事者の子どもたちが自分と同じような思いをしないように」と１４年１１月、ネット署名サイト「Ｃｈａｎｇｅ．ｏｒｇ」で、新学習指導要領に多様な性に配慮した記述を求めるキャンペーンを開始。これまで約２万２千人の賛同者が集まった。(中略)東京都内の高校で英語を教える池田えり子さん（２８）も賛同者の一人。バイセクシュアルの当事者で、２年前にトランスジェンダーの男性と婚姻届を出した。「思春期に授業で『異性を好きになる』などと見聞きすると、『自分は当てはまらないから普通じゃない』と思い、自己肯定感を持ちづらくなる。子どもたちにとっての情報源でもある教科書だからこそ、性的少数者についてポジティブな記載をしてほしい」と話す。」という朝日新聞の記事があった。

また他にも、2019 年 12 月 24 日の「(前略)岩井さんは戸籍上は女性だが、自らは男性と認識するトランスジェンダー。(中略)成人して同性愛を知り、２２歳で同性愛者だとカミングアウト。彼女もできた。飲食店やホテルなど職を転々とした。自己肯定感が低く、「『マイナス』を補おうと人一倍頑張った」。すると接客で「女性として」の気遣いを褒められ、そのたびに傷ついた。本名の「きほ」を「かずほ」と男性風に読み替えて日常を送る。１０月に乳房を除去する手術を受け、「コンプレックスがなくなり、すっきりした」とも言う。岩井さんは、制度の創設がゴールではないと考えている。「こんな『性』に生まれたことが不幸なのではない。制度を契機に、誰でも幸せになれる世の中になれば」と願う。(後略)」という読売新聞の記事などがあった。

次に性被害・性犯罪についての記事も多く見られた。記事内容は幅広く、未成年に目を向けているものもあれば(2017 年 10 月 7 日(朝日),2021 年 5 月 2 日(読売))、発達障害などがある女性が被害者になりやすいことに着目した記事(2019 年 6 月 21 日(毎日),2021 年 10 月 28 日(朝日))もあった。また性教育について扱った記事では、家庭での性教育について扱った記事だけでなく、性教育と性犯罪の関連について語っているものも多く、性教育を行うことによって同意のない性行為やそれによる心の傷つきを防ぐことができる、という内容の記事(2021 年 4 月 7 日(朝日),2022 年 8 月 29 日(毎日))が見られた。

＜女性＋働く＋自己肯定感についての調査結果＞

「女性＋働く＋自己肯定感」でヒットした記事のうち、①女性が代名詞としてしか用いられていないなど記事の中心にない場合、②女性、働く、自己肯定感が記事内の別のトピ

ックで使用されている場合、③「プラスにはたらく」など、「働く」が仕事や労働の意味で使われていない場合は除外し、条件を満たす記事の内容を調査した。尚、条件を満たした記事の一覧は付録(表 24)に添付した。

記事内容としては、女性の働き方や働く女性の悩みについて扱ったものが多く見られ、たとえば「(前略)日本ではこれまで、ジェンダー平等の視点が経済や労働、防災、インフラ、地方創生など、市民生活にかかわる多くの分野において不十分で、男女間の格差やニーズの違いは限られた分野でしか可視化されてきませんでした。(中略)劣悪な環境にいるのに「頑張れない自分が悪いんだ」と自分を責める人が少なくありません。自己肯定感が低く、社会から見えない存在になっていることにも気付いていない。「消えたい」といった抽象的な言葉から置かれた状況を分析し、支援につなげる人材を育てる必要があります。(後略)」という 2021 年 3 月 7 日の朝日新聞の記事や、「家事や育児、そして自分の体調管理で精いっぱいで、政府が掲げているような「育児をしながら働く女性」になれません。家事・育児を納得するようにこなしながら、仕事もしっかりできるようになりたいと思う自分について悩むことは、ぜいたくなのでしょうか。」という質問について扱った 2023 年 5 月 20 日の日経新聞の記事などがあった。

また、発達障害などがある女性が抱える就労の困難について扱った記事も複数見られ(2019 年 6 月 21 日(毎日),2022 年 5 月 10 日(朝日))、2022 年 5 月 10 日の朝日新聞の記事では、「(前略)女性の方が、家事も子育ても仕事も、というマルチな役割を多く求められます。学生時代までは「対処行動」をうまくとって、自分のつらさや特性をカバーできても、社会に出たり、結婚したり、子どもができたりすると、求められる役割や、やらなければいけないことの負荷が急に増えます。(中略)日本では「やまとなでしこ」のような特質が、いまだに望ましいと考えられていないでしょうか。でも、ＡＤＨＤの特性は逆です。「おてんば」でいろいろな活動に参加したり、リスクが大きいことに飛びついたり。男の子なら「勇気があっていい」となるけれど、女の子だと「おてんばが過ぎる」とか、ネガティブな言葉をかけられやすいのです。ＡＤＨＤの女性には、自己肯定感が低かったり、不安が強かったりする人が多くいます。(中略)早めに特性に気づいて診断を受ける「早期発見」がキーワードです。仕事を選ぶ際の失敗も減ると思います。(後略)」とされていた。

記事内容の確認を通して、この時期の記事の特徴としては、これまでと異なり学校教育以外の文脈の記事も多く見られるということがわかった。具体的には、働き方や人生設計について悩みを抱える女性、性被害を受け苦しむ女性についての記事が多く見られ、中には障害がある女性の就労の困難さ、障害がある女性を狙った性犯罪についての記事も存在した。さらに、性的少数者に焦点を当てた記事も多く、同性婚についての記事やトランスジェンダーの方へのインタビュー記事も複数見られた。

またこれまでは、たとえば教育の専門家や教育現場に携わる大人たちが児童生徒や発達障害を抱える子どもたちについて「自己肯定感が低い」と記事の中で語っていたのに対し、この時期には女性や性的少数者など、悩みを抱える人々自身が「自分は(あるいは自分と同じ属性を持つ人々は)自己肯定感が低い」と語っている。この「「自己肯定感」について語る主体の変化」が、この時期の記事の大きな特徴であると言えるだろう。

そこで、次の項では「「自己肯定感」について語る主体の変化」を量的に確認し、同時に佐藤(2013)の言う専門家の二つの役割が果たされているか否かを検討する。

4-5-6.「自己肯定感」について語る主体の変化について

ここでは、これまでに内容を確認してきた新聞記事において「自己肯定感」について語る主体の割合がどのように変化してきたのか確かめることを目的とする。

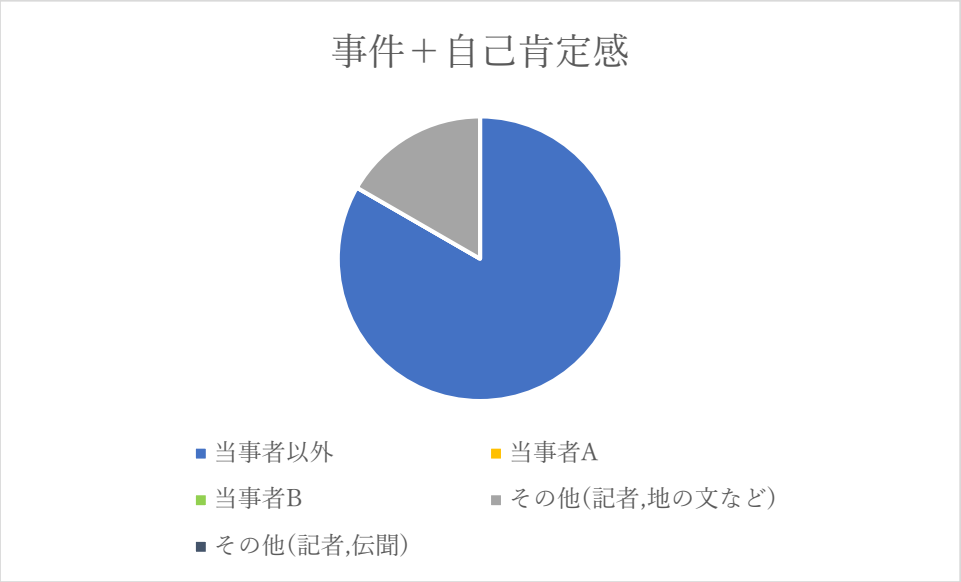
そこで、各時期の代表的な記事として取り上げた「事件＋自己肯定感(1999 年～2007 年/五紙の合計記事数が 50 以下の時期)」のヒット記事、「発達障害＋自己肯定感(2008 年～2012 年/五紙合計の記事数が 51～100 の時期)」のヒット記事、「施設＋自己肯定感(2013 年～2016 年/五紙合計の記事数が 101～200 の時期)」及び「保護＋自己肯定感(2013 年～2016 年/五紙合計の記事数が 101～200 の時期)」のヒット記事、「女性＋男性＋自己肯定感(2017 年～2023 年 6 月/五紙合計の記事数が 201 以上の時期)」、「女性＋性＋自己肯定感(2017 年～2023 年 6 月/五紙合計の記事数が 201 以上の時期)」及び「女性＋働く＋自己肯定感(2017 年～2023 年 6 月/五紙合計の記事数が 201 以上の時期)」のヒット記事の内容を確認し、発言者の属性を分類した。

分類方法について、それぞれの時期の検索ワードが示す対象者(1999 年～2007 年の「事件」であれば、事件の被告人など)を「当事者」として扱い、それ以外の人々を「当事者以外」とした。なお、たとえば当事者である女性が他の女性たちについて「自己肯定感が低い」と言っている場合は「当事者 A」として扱い、付録の表上では黄色で示した。また当事者である女性が自分のことを「自己肯定感が低い」と言っている場合は「当事者 B」として扱い、付録の表上では緑色で示した。

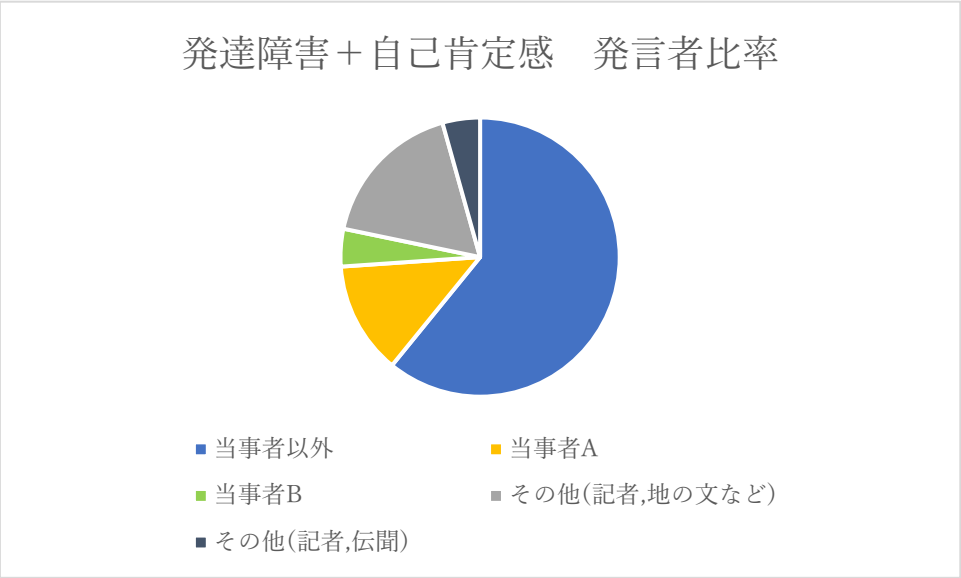
また記者が地の文の中で「自己肯定感」という言葉を用いている場合はその他に分類した。また記者が伝聞の形で「自己肯定感」という言葉を用いているケースについては、取材相手が本当に「自己肯定感」という言葉を用いたのか他の類似した言葉を用いたのか不明なため、この場合についても「その他(伝聞)」に分類した。

それぞれの時期の発言者の割合が以下のグラフである。

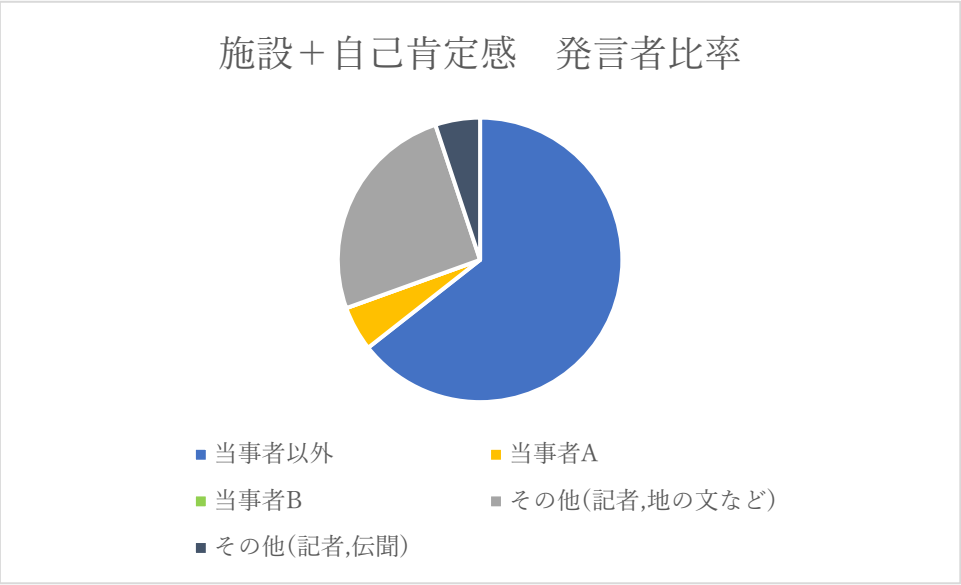
［グラフ 11：事件＋自己肯定感(1999 年～2007 年/五紙の合計記事数が 50 以下の時期)］



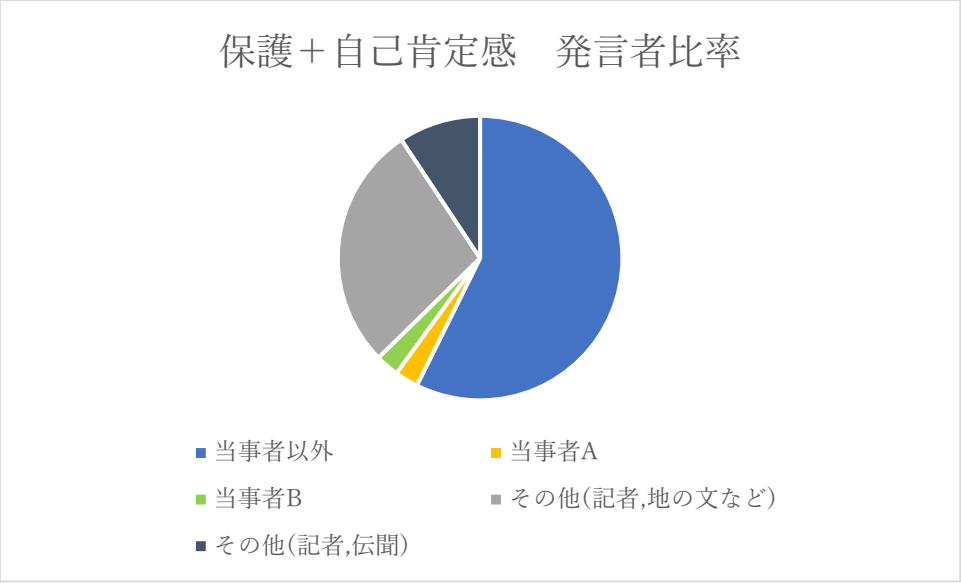
［グラフ 12：発達障害＋自己肯定感(2008 年～2012 年/五紙合計の記事数が 51～100 の時期)］



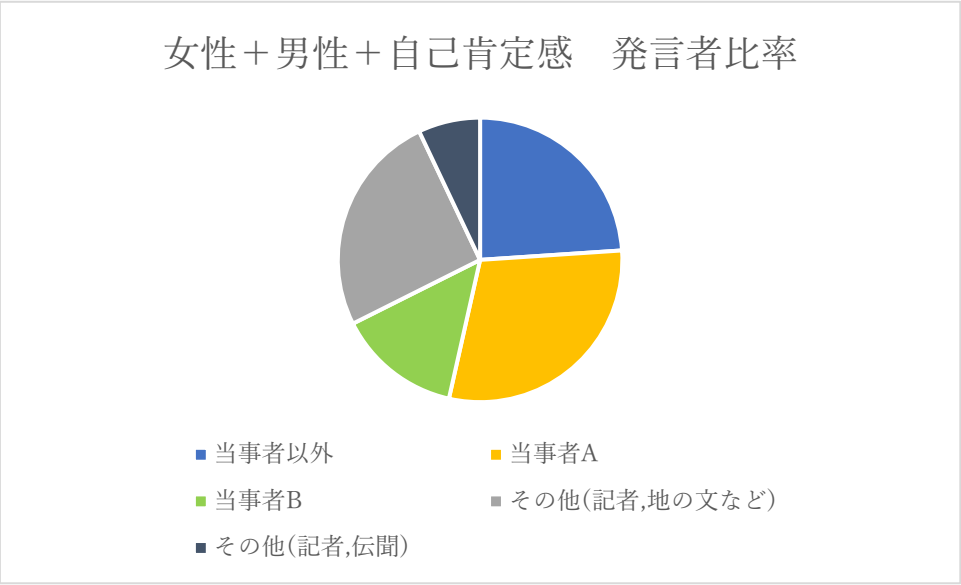
［グラフ 13：施設＋自己肯定感(2013 年～2016 年/五紙合計の記事数が 101～200 の時期)］



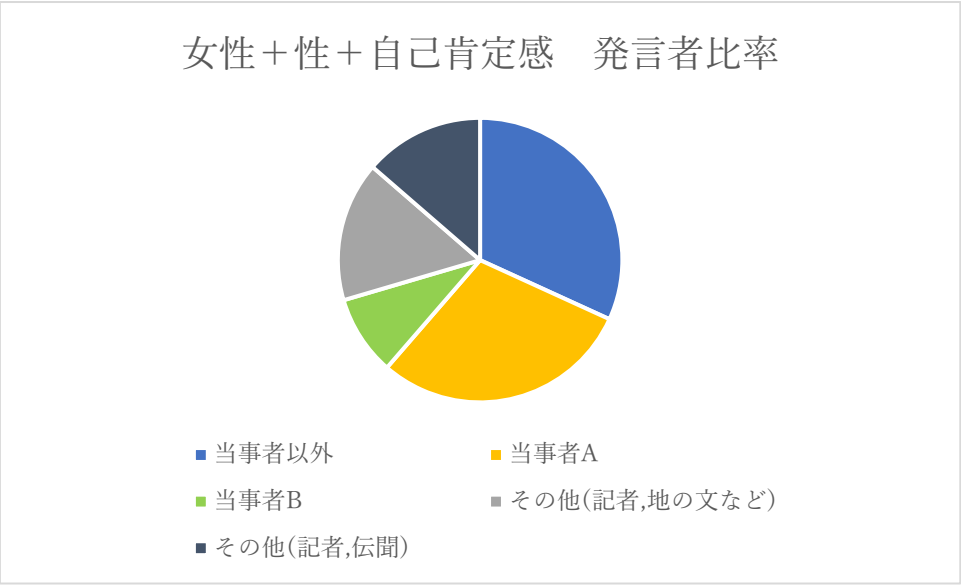
［グラフ 14：保護＋自己肯定感(2013 年～2016 年/五紙合計の記事数が 101～200 の時期)］



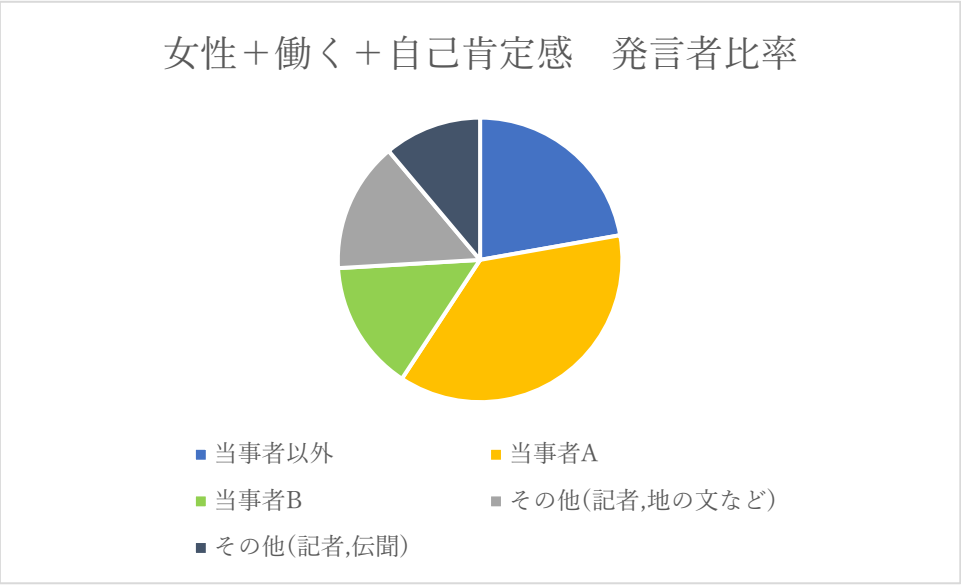
［グラフ 15：女性＋男性＋自己肯定感(2017 年～2023 年 6 月/五紙合計の記事数が 201 以上の時期)］



［グラフ 16：女性＋性＋自己肯定感(2017 年～2023 年 6 月/五紙合計の記事数が 201 以上の時期)］



［グラフ 17：女性＋働く＋自己肯定感(2017 年～2023 年 6 月/五紙合計の記事数が 201 以上の時期)］



上記のグラフからも、五紙合計の記事数が 201 以上の時期である 2017 年～2023 年 6 月に急激に当事者が「自己肯定感」という言葉を使う割合が増えていることがわかる。

時系列順に確認していくと、まず「事件＋自己肯定感」のヒット記事の中には当事者が「自己肯定感」という言葉を用いているケースは一つもなかった。

次の「発達障害＋自己肯定感」のヒット記事では、当事者(ここでは発達障害がある人)が他の発達障害がある人の自己肯定感について触れている例が 3 件、自分自身の自己肯定感について述べている例が 1 件見られた。また前者は「発達障害の人の多くは、学校や会社で『努力が足りない』『相手の気持ちを考えろ』などと散々叱られ、自信をなくしている。自己肯定感を取り戻すことが重要です(2011/2/17(毎日))」「発達障害の人は自己肯定感に乏しい。批判や助言はそれに追い打ちをかけ、トラブルになることもある(2012/1/10(産経))」など、発達障害がある人々の「自己肯定感の低さ」に着目している一方で、後者(当事者が自分自身の自己肯定感について述べている例)では、障害者の演劇集団「中村一座」の座長が、「「みんなが見てくれることで、自己肯定感が持てる。幕が下りたあと、喜び合える仲間がいるのは大きい」とプラスの内容を発信していた。

五紙合計の記事数が 101～200 の時期(2013 年～2016 年)にあたる、「施設＋自己肯定感」「保護＋自己肯定感」では、どちらにおいても当事者の発言が確認できた。まず「施設＋自己肯定感」のヒット記事では、当事者が「自己肯定感」という言葉を用いている例は 3 件見られ、そのいずれも対象となる「施設」は異なっていた。まず 2014 年 2 月 5 日の朝日新聞の記事において、産後入院施設に勤める助産師であり自身も母親である女性が「自己肯定感が低いと、育児に自信が持てず自分を責めてしまうこともあります」と発言

していた。次に、2014 年 3 月 21 日の朝日新聞の記事において、児童養護施設で育ち、現在は児童養護施設出身者の相談を受けている男性が、相談者について「虐待経験者は自己肯定感が低く、人間関係に悩みがちだと感じている」と発言していた。最後に、2016 年 5 月 25 日の読売新聞の薬物依存からの回復支援施設についての記事では、薬物依存の過去を持つ男性が「薬物を使うと、つらい気持ちや痛みを一時（いっとき）忘れられる。リストカットの心理も似ていて、慢性の心の痛みを急性の痛みでそらす。罪悪感が強まるとクスリに頼りたくなる。だから自分を責めるのをやめ、自己肯定感を取り戻すことが大切なんです」と述べていた。このように、「施設＋自己肯定感」の記事の中にも当事者による発言が複数見られたが、この時期最も多く登場している「施設」である「児童養護施設」の当事者による記事はほとんど見られなかったということには注意が必要であろう。

次に「保護＋自己肯定感」についての記事では、「保護者」と「生活保護を受けている当事者」による発言が見られた。まず前者については、発達障害がある子どもを持つ保護者が通級指導について「本人の自己肯定感が高まった」と述べていた(2016 年 11 月 4 日(朝日))。次に生活保護を受けている当事者についての記事では、「風俗勤務だけの時は、社会から切り離されている感じだった。人に言える活動をして、自己肯定感が強くなった」というデリヘルで働く女性の発言(2016 年 5 月 16 日(朝日))や、生活保護を受けている人々について「苦しい生活を自分のせいだと責め、自己肯定感が低くなっている人が多い」とする、福岡市を拠点に働く女性の相談に乗る「自律・自立支援倶楽部」のメンバーの発言(2016 年 11 月 7 日(朝日))が見られた。

ここまでの時期においても当事者が「自己肯定感」という言葉を用いている例を複数確認することができたが、その総数は決して多くないと分かった。その数が急激に上昇したのが、五紙合計の記事数が 201 以上の時期(2017 年～2023 年 6 月)だ。もちろん、総数が上昇していることには全体の記事数が上昇していることも大きく影響しているだろう。しかし、記事数に対しての割合自体も同時に急増していることから、やはりこの時期に「「自己肯定感」を語る主体の変化」が起きているということができるように思う。

実際に記事を確認する。まず「女性＋男性＋自己肯定感」のヒット記事では、当事者(女性や性的少数者)が他の当事者について「自己肯定感が低い」と言っている例が多く見られた(2020/7/15(朝日),2021/3/7(朝日),2023/5/1(日経))。それと同時に、当事者が自分の「自己肯定感」について触れている記事も 10 件ほど見られ、これまでの約 5 倍となっていた。当事者が自分の「自己肯定感」について触れている記事の中には、「母はいろいろなことを我慢して私を育ててくれた。ぜいたくをした姿を見たことがない。だから「自分は母から大切にされている」という自己肯定感を自然に得ることが出来たような気がする。」というようなプラスの声もあれば(2018/2/23(朝日))、「自分はいつまでも見下される対象なんだと思うと、心底嫌になります。(中略)自信のなさや自己肯定感の低さが無意識のうちに態度に出ているのかもしれません。強く見られるためにはどうしたらいいので

しょうか」というような自身の自己肯定感の低さについて語る記事も複数見られた(2022/11/1(読売))。

次に「女性＋性＋自己肯定感」のヒット記事においても当事者が「自己肯定感」という言葉を用いている例が見られ、中でも「性的少数者」の文脈が多く見られた。自身も性的少数者である人が他の性的少数者について語っている記事では、「性同一性障害の人たちは、学校や会社の制服などといったものに折り合いが付けられない面があります。だから自らの『第１希望』をつかめず、自己肯定感が低くなりがち(2020/3/1(毎日))」「トランスジェンダーでパートナーと幸せに生きているロールモデルが見えないから、当事者は自己肯定感を持てず、家族も未来を描けない(2023/6/18(朝日))」など、性的少数者の自己肯定感の低さについて触れた記事が多く見られた。

また当事者が自身の自己肯定感について触れている記事でも、「アルバイトをするとき、履歴書には女に〇をつけるが、面接で驚かれるのがストレスだった。(中略)温泉（男湯）には行かない。自己肯定感は常に低い(2022/10/27(日経))」といった自身の自己肯定感の低さに触れた記事が見られた。

最後に「女性＋働く＋自己肯定感」のヒット記事では、仕事や働き方に悩みを抱える女性の声が、当事者が他の当事者に対して「自己肯定感」という言葉を使っているケースでも、自身に対して「自己肯定感」を用いるケースでも見られ、たとえば 2021 年 3 月 7 日の働く女性の悩みについて取り上げた朝日新聞の記事では、「相談体制の拡充も急務です。劣悪な環境にいるのに「頑張れない自分が悪いんだ」と自分を責める人が少なくありません。自己肯定感が低く、社会から見えない存在になっていることにも気付いていない」という記述があった。

詳細な記事数や事例については付録(表 15～19,表 22～24)に預けるが、上述したように五紙合計の記事数が 201 以上の時期、すなわち 2017 年以降の記事では当事者が声をあげている事例が多数見られた。これは、記事の総数が増えていることや「自己肯定感」という言葉の知名度が上がったことはもちろん、言葉が広まったことによって発達障害がある大人、性的少数者である大人、成人女性など、「声を上げることができる立場の弱い人々」のもとにまで「自己肯定感」という言葉が届き、彼らがその言葉を使って自身が置かれている現状を説明しようとしたからではないだろうか。逆に言えば、これ以前の時期に当事者による発信が数的に見ても割合から見ても少なかったのは、それまで焦点を当てられていた人々は児童生徒(特に発達障害がある子ども)や児童養護施設に暮らす子どもなど、「声を上げることができない弱い立場にいる人々」だったことも関係しているかもしれない。

また最後に、簡単にはなるが佐藤(2013)において主張されていた専門家の役割が新聞上で果たされていたのかについて確認する。「自己肯定感」という言葉を含む記事すべてに目を通すことは困難であるため、発言者の割合を出した際と同様に、各時期において細かく内容調査を行った記事のみを対象に内容を確認したが、専門家(心理学の専門家)がほと

んど記事に登場していないことに加え、彼らもごく自然に「自己肯定感」という言葉を用いており、言葉の用例や「自己肯定感が低い」と主張する人々に対する批判などは見られなかった。さらに言えば、「自己肯定感」という言葉が新聞に登場した最初期である 1991 年から 1998 年の記事においても、「4-5-2.五紙合計の記事数が 1 桁にとどまっている時期(1991 年～1998 年)について」で確認したとおり、提唱者である高垣に言及している記事、言葉の意味に言及している記事、言葉の用法に言及している記事はほとんど存在しなかった。

よって、新聞上において果たされていたのは一部の専門家による「流行の先導者としての役割」のみであり、「流行の抑制者としての役割」は見られなかったと結論づけることができるだろう。

4-6.結果と考察

第 4 章では、全国紙五紙を対象にデータベースを用いて対象記事を選定し、記事数を基準に時期を区分した。その後「①五紙合計の記事数が 1 桁にとどまっている時期(1991 年～1998 年)」については、すべての記事に目を通し、記事の内容及びそのおおまかな特徴をまとめ、「②五紙合計の記事数が 50 以下の時期(1999 年～2007 年)」「③五紙合計の記事数が 51～100 の時期(2008 年～2012 年)」「④五紙合計の記事数が 101～200 の時期(2013 年～2016 年)」「⑤五紙合計の記事数が 201 以上の時期(2017 年～2023 年 6 月)」の計 2871 記事については、KH Coder を用いた計量テキスト分析を行った。

その結果、「①五紙合計の記事数が 1 桁にとどまっている時期(1991 年～1998 年)」では「自己肯定感」という言葉はいじめや不登校、校内暴力などの学校問題や親子関係、子育てといった文脈で使用されることが多かったこと、「自己肯定感」という言葉が登場した最初期であるにも関わらず、言葉の用法や意味について記述された記事はほとんどないことがわかった。

次に「②五紙合計の記事数が 50 以下の時期(1999 年～2007 年)」では、この時期社会問題ともなっていた少年犯罪と関連づけて「「自己肯定感」の低さ」について語るものが一定の割合を占めていたこと、また「母親」「家庭」などの単語が全体に対して占める割合が多く、この頃は「自己肯定感」という言葉が、学校教育というよりは家庭での子育てと結びつけて語られることが多かったことがわかった。

「③五紙合計の記事数が 51～100 の時期(2008 年～2012 年)」では、「障害」や「支援」といった抽出後がこれまでと比べて急増しており、「障害」は特に「発達障害」の文脈で多く使われていること、それと関連して 2006 年 3 月の学校教育法等改正によりはじまった 2007 年以降の特別支援教育に関する記事も複数見られることがわかった。またこの時期は「学校」という単語が全体に占める割合が増加し、かつ単語の出現回数も増加していたが、これは国や地方による取り組みや、公立の小中高等学校に通う生徒を対象とし

た全国的な調査が行われる中で、初めは家庭との関連で語られることが多かった「自己肯定感」が、学校教育との結びつきで語られることが増加していったためであると読み取ることができた。

「④五紙合計の記事数が 101～200 の時期(2013 年～2016 年)」では、記事数が大きく伸びていることに加え、「施設」や「保護」という抽出語がこのときのみ抽出語ランキングの上位に入っているという特徴があった。また「施設」は特に「児童養護施設」や「放課後等デイサービス」を実施している施設の文脈で、「保護」は「保護者」や「生活保護」の文脈で使われていることが多かった。「児童養護施設」や「放課後等デイサービス」については厚生労働省ガイドラインとの関連で語られているものも複数見られ、この時期に記事数が大きく増加した要因としては、こうした国の政策により「自己肯定感」という言葉の知名度が上がったことや、幅広い世代に対して「自己肯定感」という言葉が使われるようになったことなどがあると推測された。

最後に「⑤五紙合計の記事数が 201 以上の時期(2017 年～2023 年 6 月)」では、2018 年から 2019 年にかけてのタイミングで記事数が 2013 年から 2014 年のとき以上に大きく伸びていること、1 つ前の時期にはじめてランキング入りした「女性」という語がこの時期に大きく伸びていることが主な特徴としてあった。「女性」と「自己肯定感」の両方が記事に入っているものをあらためて検索し、計量テキスト分析を行ったのち「女性＋自己肯定感」の記事にのみ特有の語だけを抽出したランキングを作成したところ、「男性」「性」「働く」といった単語が上位にランク入りした。「女性＋男性＋自己肯定感」「女性＋性＋自己肯定感」「女性＋働く＋自己肯定感」それぞれのヒット記事の内容を確認したところ、働き方や人生設計について悩みを抱える女性、性被害を受け苦しむ女性についての記事が多く見られ、中には障害がある女性の就労の困難さ、障害がある女性を狙った性犯罪についての記事も存在した。さらに、性的少数者に焦点を当てた記事も多く、同性婚についての記事やトランスジェンダーの方へのインタビュー記事も複数見られた。

またこの時期には女性や性的少数者など、悩みを抱える人々自身が「自分は自己肯定感が低い」と語る「「自己肯定感」について語る主体の変化」が起きていることも「4-5-7.「自己肯定感」について語る主体の変化について」における調査で明らかになった。

まとめて言えば、「自己肯定感が低い」とされる対象は、はじめは少年犯罪の被告人、学校教育現場における児童生徒や発達障害がある子ども、児童養護施設で育った子どもなど、「声を上げることができない立場の弱い人々」であり、彼らに対して当事者以外の大人たちが「彼らは自己肯定感が低い」とする文言が記事内に多く登場していた。しかしその後、言葉の知名度が上がったことも関連してか、女性や性的少数者といった「声を上げることができる立場の弱い人々」が、自己肯定感という言葉を「自分は(あるいは自分と同じ属性をもつ人々は)自己肯定感が低い」と当事者の立場から発信するようになった。このような、「自己肯定感が低い」とされる対象の変化と、それを語る主体の変化を新聞の調査結果から読み取ることができた。

しかし、明らかになっていないこともある。それが専門家とメディア、一般の人々の相互作用だ。たとえば「五紙合計の記事数が 101～200 の時期(2013 年～2016 年)」に厚生労働省が里親委託ガイドラインや放課後等デイサービスのガイドラインの中で「自己肯定感」という言葉を用いていることを述べたが、これについて、一般の人々の間で「自己肯定感」という言葉が知られていたから国がこの言葉を用いたのか、また国がこの言葉を用いたことで一般の人々の間での言葉の知名度が上昇したのか、どちらなのかははっきりしていない。

そこで続く第 5 章では、こうした相互作用の確認と、メディアを通じて広まったであろう「自己肯定感」を一般の人々がどう捉えているのか確かめることを目的に調査を行う。

第 5 章　一般の人々の間に流布している自己肯定感はどのようなものなのか

本章においては、専門家、メディア、一般の人々の相互作用と、一般の人々の間で「自己肯定感」がどのようなものとして捉えられているのか調査することを目的とする。

5-1.対象と方法論

専門家、メディア、一般の人々の相互作用と、一般の人々の間で「自己肯定感」がどのようなものとして捉えられているのか調査するため、ここでは Google Trends と CiNii を対象として設定する。

Google Trends を対象として選定したのは、一般の人々が情報を取得するための手法として近年最もよく用いられているインターネットにおいて、特定の検索ワードがどの程度頻繁に入力されているのかを把握できる一般的なサービスであり、論文上での使用例も多く存在することに加え、データの提供開始時期が 2004 年と約 20 年分のデータを検証することができるためである。また CiNii は論文に加え、研究者ではない一般の人々に向けた図書(書籍)数の推移を同時に確認できることから対象に選定した。

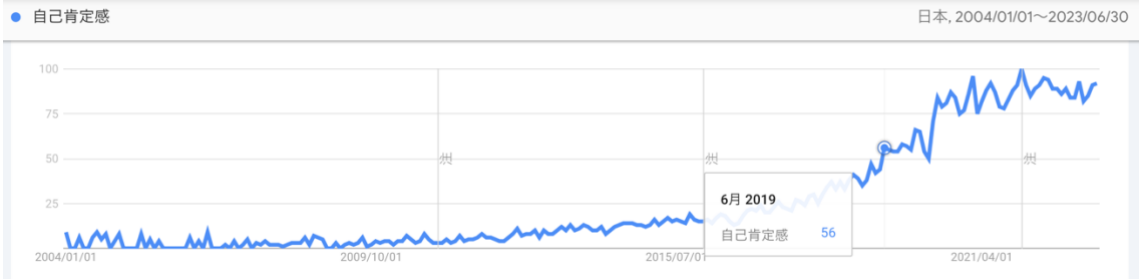
まず Google Trends において多くの一般の人々が「自己肯定感」という言葉に着目し始めた時期を特定した上で、その前後に多くの人々が注目するに至ったきっかけがあるか否か、きっかけがあると考えられる場合、それにより人々が「自己肯定感」をどのような文脈の中で捉えたと考えられるのかを調査する。

それと並行して、CiNii を用いて論文数と書籍数の変遷を追い、それが先ほど確認したメディア(新聞)や一般の人々の反応(Google Trends)とどのように関係しているのかを調査する。

5-2. Google Trends の調査結果について

Google Trends において、検索ワードに「自己肯定感」と入力し、地域を日本、時期をデータ提供開始時期である 2004 年から新聞調査の終了時期と同じ 2023 年 6 月、カテゴリ「すべて」、検索方法をウェブ検索と指定した上でグラフを取得した。その結果が以下である(※データ取得日：2024 年 1 月 28 日)

［グラフ 18：Google Trends における「自己肯定感」の人気度の動向］



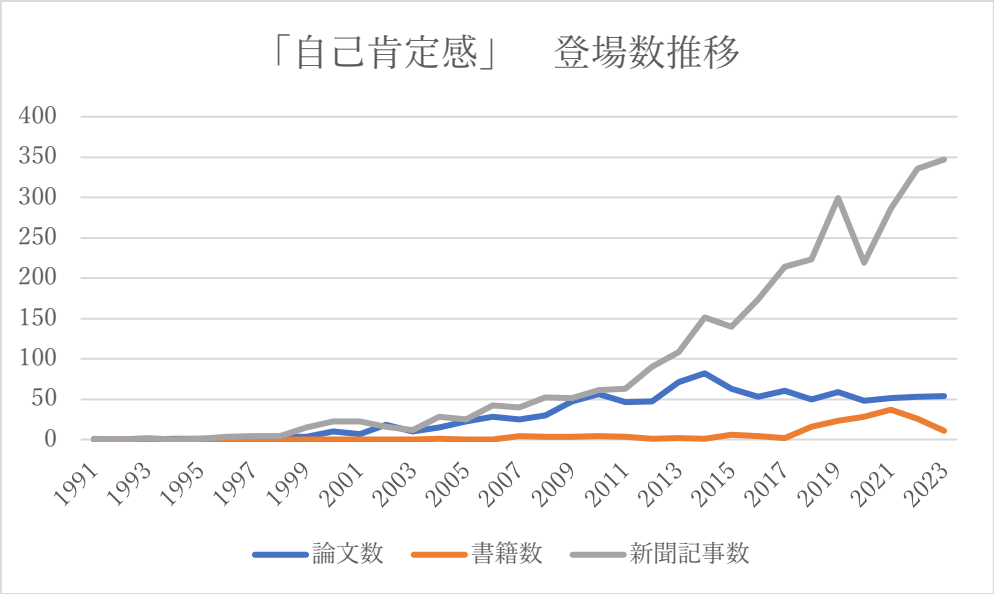
結果として、①新聞の記事数が増加した 2010 年前後や 2014 年前後もインターネット上における注目度にはほとんど変化がないこと、②「自己肯定感」の人気度が初めて 50%を上回ったのが 2019 年の 6 月であること、③2020 年の 4 月から 6 月にかけて最も人気度が伸びていること、④人気度が最も高いタイミングは 2022 年 1 月(100%)であることがわかった。

そこで続いては、上記の 4 つのタイミングでそれぞれどのようなトピックに注目が集まり、なぜ先述したような動きが Google Trends に現れたのかを確認する。しかし、そのためには新聞や論文、書籍との相互作用も同時に確認する必要があるため、先に CiNii における論文数、書籍数の変遷について述べる。

5-3. CiNii における論文数・書籍数の調査結果について

CiNii において、1991 年から 2023 年までの「自己肯定感」という単語をタイトルに含む論文数、書籍数の推移をそれぞれ調査した。その結果をまとめ、新聞記事数と重ねたものが以下のグラフである。

［グラフ 19：CiNii 掲載論文・書籍、全国五大紙における「自己肯定感」登場数推移］



結果を見ると、新聞の記事数と論文数は 2014 年ごろまでは山が来るタイミングが重なっていることもあり、特に 2010 年前後と 2014 年前後は比較的似た動きをしていることが見てとれた。また論文数はその後若干減ってはいるものの、2019 年の新聞記事数増加のタイミングでも同じように山が来ている。その一方で書籍数は 2017 年ごろまではほぼ平坦であり、2018 年以降急激に数が増加し、2021 年にピークを迎えている。新聞記事と論

文、書籍数の動きに Google Trends の人気度の変化も加えて時系列順に整理をすると、以下のようになる。

[表 25：各媒体における「自己肯定感」ヒット数の時系列整理]

時期	出来事
2010 年前後	新聞記事数と論文数が増加
2014 年前後	新聞記事数と論文数が増加
2018 年	書籍数が大幅増加
2019 年前後	新聞記事数が大幅増加(論文数も増加)
2019 年 6 月	Google Trends において、はじめて「自己肯定感」の人気度が 50%を上回る
2020 年 4 月～6 月	Google Trends において人気度が急上昇
2021 年	書籍数のピーク
2022 年 1 月	Google Trends における自己肯定感の人気度のピーク(100%)

そこで次の項では、上記の時期ごとにそれぞれの媒体にどのような文脈で「自己肯定感」という言葉が登場しているのか、媒体ごとの相互作用が見られるのかを調査する。

5-4.専門家・メディア・一般の人々の相互作用について

ここでは、上記の表 25 における時期ごとに、各媒体においてどのような文脈で「自己肯定感」という言葉が用いられているのかを調査する。また論文と書籍の内容は総数が多いため、論文については、論文のタイトル、刊行物名、出版元を対象とし、KH Coder によるテキスト分析を行なって頻出語を調べることとした。これは本来の KH Coder の利用目的とは異なるが、対象を主観によらず客観的・数量的に捉えるためこの手法を用いることとした。

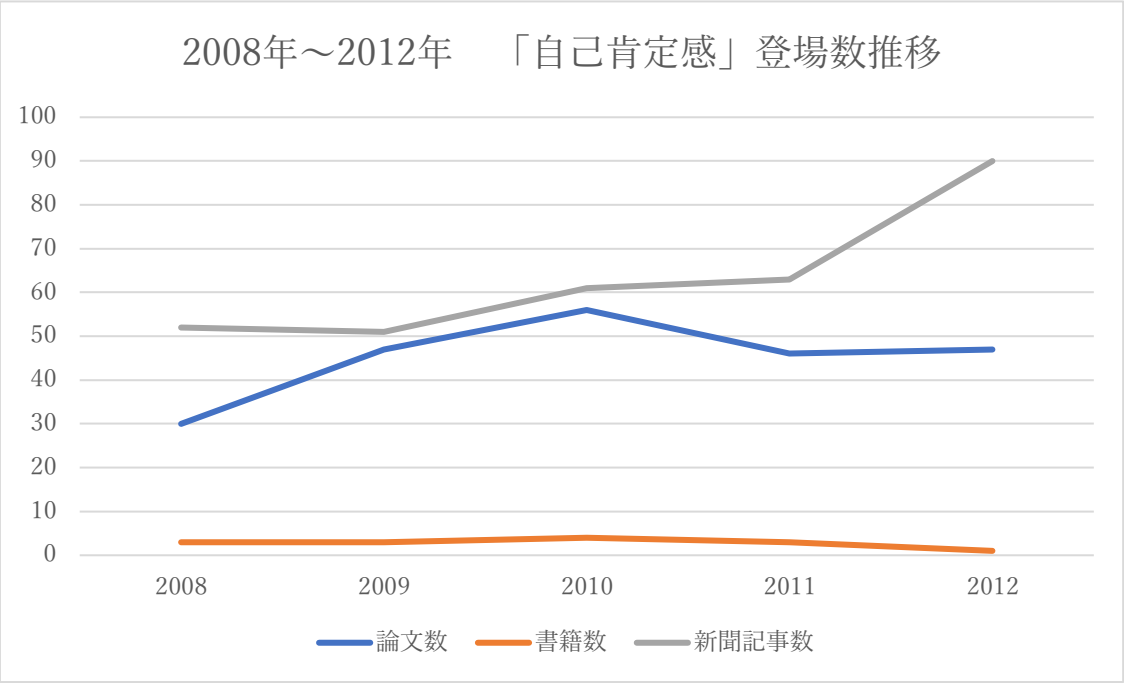
また書籍については、該当書籍の NDC(日本十進分類法)の番号を確認し、その番号からおおよその内容及び想定読者層を割り出すこととした。

尚、論文数・書籍数・新聞記事数の変化及び書籍の NDC についての詳細な情報は付録(表 26,表 27)に添付した。

5-4-1.2010 年前後の新聞記事数と論文数の増加について

2010 年前後のタイミングでは、新聞記事数と論文数が大幅に増加している。それをわかりやすく示すため、2010 年を基準に前後 2 年分の論文数、書籍数、新聞記事数をグラフにした。その結果が以下である。

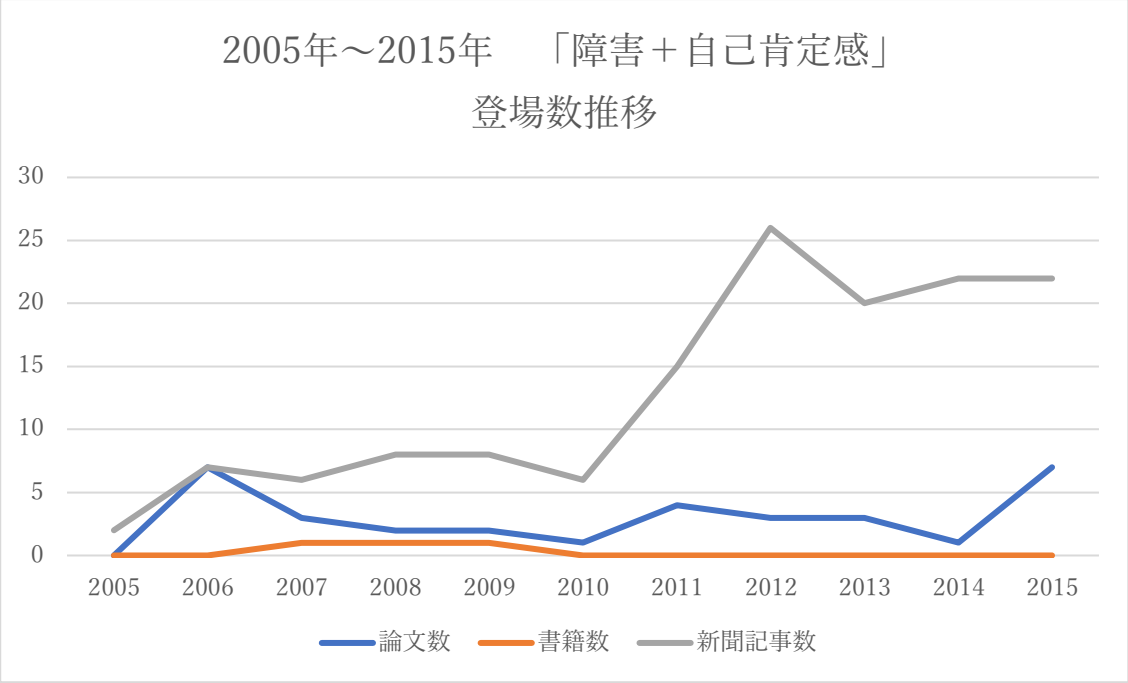
［グラフ 20：各媒体における「自己肯定感」登場数推移(2008 年～2012 年)］



このグラフからも、2009 年から 2010 年にかけて論文数と新聞記事数が同じように増加していることがわかる。この点に着目した上で、この時期の各媒体の特徴及び相互作用についてまとめる。

まず、新聞記事上では、第 4 章でも触れたとおり、この時期には「障害(特に発達障害)」という単語が急増していた。この点に着目し、2010 年を基準に前後 5 年、すなわち計 11 年分の、各媒体における「障害＋自己肯定感」登場数推移のグラフを作成した。その結果が以下である。

［グラフ 21：各媒体における「障害＋自己肯定感」登場数推移(2005 年～2015 年)］



グラフからは、2006 年に新聞記事、論文の両方において登場数が増加しているものの、その後論文数は減少していること、2010 年～2011 年のタイミングでは論文数も緩やかに上昇しているものの、伸び率は新聞記事ほどではないことが確認された。

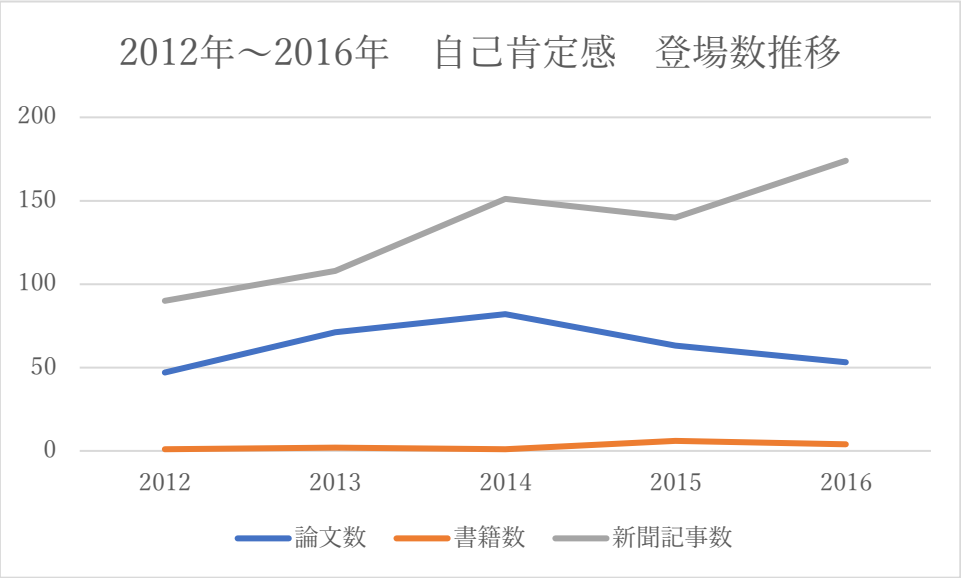
しかし論文と新聞記事に全く関係がないわけではおそらくない。2010 年以前、「障害」という単語を含んだ論文は 20 件書かれているが、そのうち 8 件は 2006 年に書かれていた。新聞記事数増加には 2006 年 3 月の学校教育法等改正によりはじまった 2007 年以降の特別支援教育の実施も大きく寄与しているであろうが、この論文数の増加が新聞記事数にも多少なりとも影響を及ぼしていた可能性は否定できないだろう。また書籍についても、2007 年～2009 年にかけて 1 冊ずつ障害がある子どもについて言及したものが出版されていた(付録：表 27)。

この時期の新聞記事、論文、書籍について、何がきっかけとなって同じ題材を取り扱っているのかを特定することは叶わなかったが、少なくともそれぞれが異なる話題ではなく、「学校教育」や「障害児教育」などの類似した題材を取り上げていることは確認できた。また時期を 2009 年～2011 年に指定した Google Trends においても、この時期の関連トピックに「発達障害-疾患」が含まれていたことから、一部の一般の人々の間でも「自己肯定感と障害」との関係性についての関心が生まれていたのであろうことが予測できた。

5-4-2.2014 年前後の新聞記事数と論文数増加について

続いて、2014 年前後の新聞記事数と論文数増加について取り上げる。この時期においても 2010 年前後同様、2014 年を基準に前後 2 年を含めた計 5 年分のグラフを作成した。その結果が以下である。

［グラフ 22：各媒体における「自己肯定感」登場数推移(2012 年～2016 年)］



グラフからは、2012 年から 2014 年にかけて新聞記事数と論文数の両方が上昇したのち 2015 年に一度減少していること、その後は、新聞記事数は増加している一方で論文数は減少し続けていることを読み取ることができた。この点に注目した上で、この時期の各媒体の特徴及び相互作用について確認する。

まず、新聞記事上ではこの時期「施設」や「保護」といった単語が急増しており、それらの単語は特に「児童養護施設」「里親制度」「放課後等デイサービス」などの文脈で語られていた。そこで、これらに関する論文が存在するかを確認したが、児童養護施設については 2014 年に 1 本出ているのみであり、保護についても 5 年間でヒットは 2 件のみであった。

では、この時期書かれていた論文はどのような内容のものだったのであろうか。それを確かめるため、2013 年～2015 年の論文のタイトル、刊行物名、出版元を対象とし、KH Coder によるテキスト分析を行なって頻出語を調べることとした。尚、年代をこの 3 年間のみに絞ったのは、時期を広くとってしまっては、却ってこの時期のトレンドを掴みにくくなると考えたためである。結果としては、抽出語の上位には教育、保育、子ども、学校、児童などの単語が多く見られ、複合語検出から割り出した刊行物・発行元からも、こ

の時期の論文では学校教育及び幼児保育の文脈で自己肯定感という言葉が使用されていたことがわかった(付録：表 28)。

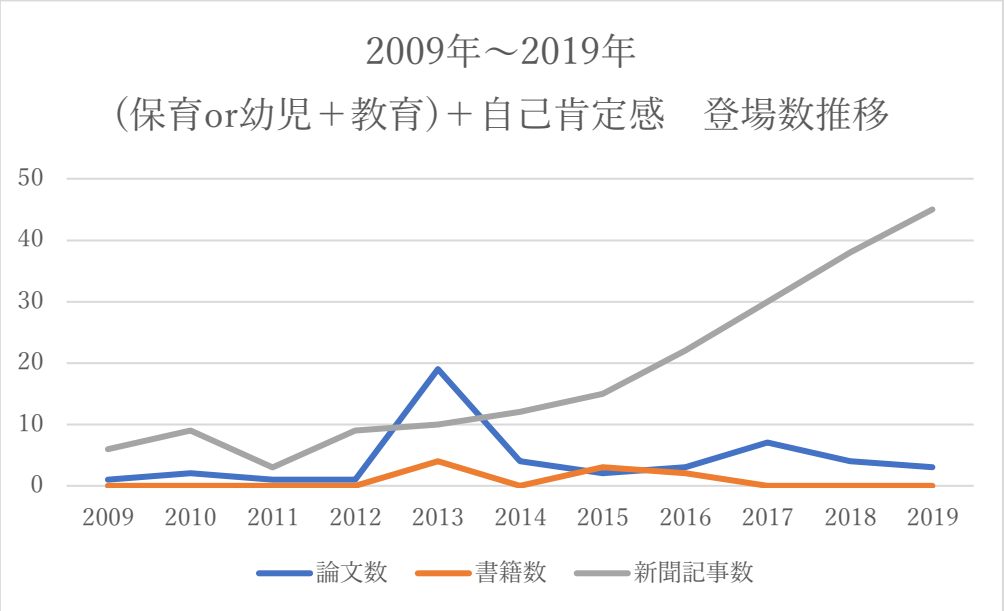
次にこの時期に出版された書籍について確認する。グラフ 22 からも読み取れるとおり、この時期は発行された書籍の数自体少ないことには注意が必要だが、割合としては論文同様、学校教育系統、特に幼児教育についての本が多く見られた。実際に、2012 年から 2016 年にかけて発行された書籍合計 14 冊のうち 10 冊は NDC が学校教育または幼児教育関連のものであった(付録：表 27)。

最後に Google Trends について述べる。Google Trends においても時期を長く取るがあまり 2014 年時点のトレンドを見落とすことを防ぐため、2013 年～2015 年に時期を指定して調査を行ったところ、関連トピックの 1 位に「保育」がランク入りしており、論文や書籍との関係が見てとれた。

以上のことから、この時期においては論文、書籍における話題の類似性を確認することができ、一部の一般の人々もそれに着目していたことが Google Trends の結果から推測できた。

また第 4 章の新聞調査では、各時期に特有の抽出語のみを取り上げたことから、記事内容の取りこぼしも十分にありうると考え、ここで改めて論文及び書籍上で取り上げられていた「保育」及び「幼児教育」の文脈でヒットする記事がないかを確認したところ、新聞上でも同じ文脈の記事が存在することを確認できた(グラフ 23)。よって、この時期の記事全体に占める割合は多くなくとも、新聞記事上でも論文、書籍と同じ話題が扱われていたことは確認することができたと言えるだろう。

［グラフ 23：各媒体における「(保育 or 幼児＋教育)＋自己肯定感」登場数推移(2009 年～2019 年)］



5-4-3.2018 年～2019 年 6 月の書籍数増加と新聞記事数増加及び Google Trends における人気度の上昇について

続いて、2018 年の書籍数の増加、2019 年前後の新聞記事数の大幅増加、2019 年 6 月の Google Trends(人気度が初めて 50%を上回った)について取り上げる。これら 3 つの出来事は時期が非常に近く、相互の影響が大きいと考え、切り離さずひとつのトピックとして扱うこととした。

まず、第 4 章では 2019 年前後の新聞記事上では「女性」に関する記事がこれまでと比較して増えていることに着目したが、論文及び書籍では女性のみに着目して書かれたものはほとんどなかった。

論文について、2014 年前後の時期と同じ手法でタイトル、刊行物名、出版元をもとに傾向を調査したところ、2014 年前後とあまり大きな変化はなく、学校教育関連の論文が多く見られた(付録：表 29)。一方で、内容に変化が生じたのが書籍だ。

これ以前の時期の書籍は、数は少ないもののその内容のほとんどはこれまで確認したとおり新聞記事及び論文上のトレンドと似通ったものとなっており、時期ごとに障害児教育、学校教育及び幼児教育を中心に本が出版されていた。しかしこの時期に出版された書籍の約半数は論文と異なり、「自己肯定感が低い人」として読者本人を想定している。つまり、論文では幼児、児童生徒など論文を直接読むわけではない人を対象としているのに対し、書籍は「読者(大人)」が対象になっているのである。

もちろん子育てや学校教育関連の書籍がなくなったわけではないが、発行された書籍数の中の「自己肯定感が低い大人に向けた本」の割合は急上昇している。そしてこれが、第 4 章の最後に検証した、新聞記事上での「「自己肯定感が低い」と語る主体の変化」を導いた可能性は高いであろう。しかしその真偽を確かめるためには、書籍が実際に一般の人々に影響を及ぼしたのかどうか知る必要がある。そこで再び Google Trends にて調査を行った。

Google Trends において、「自己肯定感」の人気度がはじめて 50%を上回った 2019 年を基準に前後 1 年ずつ、すなわち 2018 年～2020 年に時期を指定した上で調査をした(付録：表 30)。その結果、関連トピックの 1 位に「自己肯定感の教科書」、3 位に「書くだけで人生が変わる自己肯定感ノート」、4 位に「自己肯定感の教科書」と関連する「チェックシート」、7 位に「子どもの自己肯定感を高める 10 の魔法の」、8 位に「7 日間で自己肯定感をあげて自分らしく」、10 位に「自己肯定感を育てるたった 1 つの習慣」と、この時期に発売された書籍のタイトルの一部である文字列が多く見られた。

またキーワードにおいても、1 位に「自己肯定感の教科書」、2 位と 3 位に「HSP」,「HSP 自己肯定感」、5 位に「自己肯定感が低いあなたが」、7 位に「自己肯定感を育てるたった 1 つの習慣」、8 位に「職場の人間関係は自己肯定感が 9 割」、9 位に「自己肯定感が低いあなたがすぐ変わる」と書籍に関する単語が多く見られた。

また 2019 年 6 月に Google Trends において「自己肯定感」の人気度が 50%を上回った理由をさらに正確に分析するため、時期を 2019 年 6 月 1 日～2019 年 6 月 30 日に設定した上で関連トピックと関連キーワードを確認した(付録：表 31)。

結果としては、トピックの 1 位に「チェックシート」、キーワードの 1 位にも同じく「自己肯定感チェックシート」、5 位にはほぼ同義の「自己肯定感チェック」がランキング入りしていた。このチェックシートは先述したとおり中島輝著の「自己肯定感の教科書」の中に掲載されているものであり、この本の影響で 2019 年 6 月の Google Trends における人気度の上昇が起こったことが確認できた。

以上のことから、書籍の内容が一般の人々にも影響を及ぼしていたこと、新聞記事上における「「自己肯定感が低い」と語る主体の変化」は、この時期に出版された書籍およびそれを手に取った人々の影響で起こったものであろうことが推測できた。また 2019 年に新聞記事数が上がっている要因の一つには、Google Trends からうかがえるこの「一般の人々の「自己肯定感」への興味」もあるかもしれない。他に新聞記事数が上がった要因としては、2018 年に「自己肯定感」に関する書籍数が急増したことも影響しているであろうが、2018 年の書籍数急増については正確に原因を突き止めることは叶わなかった。しかしここまで新聞記事、論文、書籍、Google Trends にある程度の相関関係が確認できたことをもとに考えると、2018 年の書籍数増加にはメディア(新聞)における「自己肯定感」の登場数が増加し続けていることや Google Trends における人気度も継続して上がり続けており、人々の興味が「自己肯定感」に向いていること、すなわち本を出せばある程度の売り上げが見込めることを予想できたことなどが要因としてありうるだろう。

またここで一度、一般の人々の「自己肯定感」の捉え方に大きな影響を与えたであろう「自己肯定感の教科書」の著者、中島輝の「自己肯定感」の捉え方を確認する。

中島が新聞記事上において登場していないか確認したところ、朝日新聞、読売新聞、日本経済新聞では名前は挙がっているのの、いずれも記事内容はベストセラー紹介や読書会を取り上げた記事において中島の本のタイトルが挙がっているのみであり、毎日新聞と産経新聞とでは記事がヒットしなかった。

そこで今回は朝日新聞の AERA dot.の記事を参照した。中島は記事の中で、自己肯定感について「自己肯定感というものは何歳からでも後天的に育てることができますし、そのときの状況によって高くなったり低くなったりするのが当たり前なのですから」とし、さらに自己肯定感を高めるためには「自分には価値があると思える「自尊感情」、ありのままの自分を認める「自己受容感」、「自分にはできる」と思える「自己効力感」、自分を信じられる「自己信頼感」、自分で決定できるという「自己決定感」、自分は何かしらの役に立っているという「自己有用感」の六つ」をバランスよく持つことが大切だと主張している。

中島の、自己肯定感は「そのときの状況によって高くなったり低くなったりするのが当たり前」という考えは、第 3 章で確認した「自己肯定感」の提唱者、高垣の対局にあると

言っても良いであろう。また中島は、第 2 章で検討した自尊感情や自己効力感についても「自己肯定感」を支えるものとして扱っており、自尊感情と自己肯定感を同じもの、あるいは似たものとして扱っていた論文ともまた異なる立場をとっている。

こうした中島の考えが一般の人々の間に浸透したことにより、一般の人々も自己肯定感を「状況依存的なもの」として捉えるようになった可能性、また一般の人々が「自己肯定感」とその類似概念とを混同するようになった可能性は高いと考えられる。

5-4-4.2020 年 4 月～6 月の Google Trends における人気度の上昇について

続いて、2020 年 4 月～6 月にかけて Google Trends における「自己肯定感」の人気度が急上昇した要因を突き止める。

Google Trends の急上昇に新聞記事、論文、書籍のどれが最も大きく影響しているのかを知るため、今回は Google Trends の調査を先に行った(付録：表 32)。結果としては、トピックの 4 位に「自己肯定感の教科書」がランクインしていた。またキーワードについては、3 位に「HSP　自己肯定感」、8 位に「自己肯定感　論文」、13 位に「自己肯定感の教科書」がランキング入りしており、書籍が Google Trends の急上昇に最も影響していることがわかった。続いてキーワードの 8 位に「自己肯定感　論文」が含まれていることから、一部の一般の人々は論文の内容も参照しているのであろうことが予測できたため、論文の内容についても確認をする。

論文については 2014 年前後と 2019 年前後の調査の際にわかったことを引用すれば、書籍と異なり子育てというよりは学校教育関連の文脈で書かれているものが多い。最後に書籍について、特に注目度が高いものは Google Trends にタイトルが含まれているものであろうが、その他の書籍の傾向についても述べる。

内容としては、2018,2019 年と変わらず子育て関連の本と同時に読者(大人)本人の自己肯定感の高め方について書かれたものが多い。また変化している点としては著者の属性がある。これまではカウンセラーや精神科医、学校教育の専門家などが多く見られたが、この時期に入ると専門家ではない「インフルエンサー」の書籍も複数発売されている。このような、インターネット上において発信力がある人々の本が出版されたことにより、「自己肯定感」の知名度がさらに上がった可能性は高いだろう。

5-4-5.2021 年の書籍数増加について

続いて 2021 年に書籍数がピークを迎えたことについて取り上げる。まず要因としては、2019 年と 2020 年 4 月～6 月の調査を通じて確認できた一般の人々の「自己肯定感」に対する興味関心があるだろう。2019 年,2020 年 4 月～6 月ともに Google Trends のトピックやキーワードには書籍に関する単語が多く含まれており、このことから一般の人々が

発売された書籍に関心を持っていたことがわかる。そのような流れの中で、「自己肯定感」は「売り上げが見込めるジャンル」として書籍を執筆する著者や刊行元に認識され、2021 年にさらに多くの書籍が出版されたのではないだろうか。

また実際に 2021 年の Google Trends のトピックやキーワードも調査したところ(付録：表 33)、トピックの 5 位には「子どもの自己肯定感が高まる天使の口ぐせ」、7 位には「「自己肯定感低めの人」のための本」、キーワードには 1 位と 5 位に「自己肯定感　天使の口ぐせ」「子どもの自己肯定感が高まる天使の口ぐせ」、6 位に「習慣化は自己肯定感が 10 割」と発売された書籍に関する単語が多く含まれており、この年も自己肯定感に関する書籍が注目を集めていたことが確認できた。

5-4-6.2022 年 1 月の Google Trends における人気度の上昇について

最後に 2022 年 1 月に Google Trends において「自己肯定感」の人気度が 100%に至った理由を調査する。2020 年 4 月～6 月同様、今回も Google Trends の調査を先に行ったところ(付録：表 34)、トピックの 1 位に「あさイチ」、キーワードにおいても 2 位～4 位に「あさイチ」「朝イチ　自己肯定感」,「あさイチ　自己肯定感」があった。NHK アーカイブスを確認したところ、1 月 26 日に「なりたい自分になる!“ハッピーの達人”に学ぶ新習慣」の中で「自己肯定感」のチェックリストと自己肯定感を高める方法が番組内で放送されたことがわかった。またこの番組のチェックリストを監修したのは先に取り上げた中島輝であり、中島自身がその旨を X(旧 Twitter)上のプロフィールに「NHK「あさイチ」で「自己肯定感心理テスト」を監修。同番組内で著名な心理カウンセラーと紹介される。」と記していた。

このことから、2022 年 1 月の Google Trends における人気度の上昇は論文、書籍、新聞記事のいずれでもなく、テレビ番組の影響で生じたものであることがわかった。

5-5.結果と考察

結果として、どの時期においても論文、書籍、新聞記事、一般の人々の相互作用を確認することができた。しかし 2018 年より前の、論文と新聞記事において「自己肯定感」が中心に取り上げられていた時期は、書籍や一般の人々も同じ話題を扱っていたり興味を持っていたりすることは調査から読み取れたものの、その総数自体は決して多くはなく、影響があったとは言ってもそれがあまり大きいものでなかったのであろうことが推測できた。

一方で 2018 年の書籍数の大幅増加以降は、論文や新聞記事以上に書籍が大きな影響力を持ち、一般の人々の関心を高めたのであろうこと、その際に発行された書籍の中には「大人の自己肯定感を高める」ことを目的とした本が多かったために、第 4 章で確認した

新聞記事上における「「自己肯定感」について語る主体の変化」が起きたのであろうことがわかった。また 2019 年の時期に Google Trends 上で注目を集めていた中島輝が一般の人々の「自己肯定感」に対するイメージを形成した可能性が高く、彼の言う「自己肯定感」が状況依存的なものであること(提唱者である高垣の「自己肯定感」とは異なること)から、一般の人々もまた自己肯定感を状況によって変動する不安定なものとして捉えている可能性が高いこともわかった。

第 6 章　おわりに

本研究では、「自己肯定感」という言葉が、すでに「自尊感情」や「自己効力感」といった類似概念が存在する中でどのような意味を持って生まれ、その意味や使われ方が人々の間に広まる中でどのように変化していったのかを探るため、佐藤(2013)を参考に、「RQ.1 自己肯定感の類似概念はそれぞれどのように定義づけられているのか」「RQ.2 自己肯定感は研究者の間でどのようなものとして理解されているのか」「RQ.3 自己肯定感はメディアにおいてどのようなものとして捉えられているのか」「RQ.4 一般の人々の間に流布している自己肯定感はどのようなものなのか」という 4 つのリサーチクエスチョンを設定した。

第 2 章では、結果的に大衆化するに至った「自己肯定感」という言葉がどのような過程で生産されたのか、その背景を確認するために、「自己肯定感」という言葉の誕生以前から存在した「自尊感情」や「自己効力感」といった類似概念がそれぞれどのように定義づけられているのかについて、論文を対象に調査を行った。その結果、自己効力感については提唱者である Bandura の定義が最も多く用いられており、研究者の間で一定の共通認識がある一方で、自尊感情の定義については研究者によって認識に差があり、そこには「自分で自分自身を評価する」ことによる困難が伴っていることがわかった。

第 3 章では、先述したとおり「自尊感情」や「自己効力感」とは異なるものとして誕生したはずの「自己肯定感」という言葉を、その提唱者高垣忠一郎をはじめとする研究者たちがどのように扱っていたのかについて分析するため、第 2 章同様論文を対象に調査を行った。その結果、高垣は「自己肯定感」を自尊感情や他の類似概念とは別のものとして提唱しているにもかかわらず、他の多くの研究では「自己肯定感」がむしろ「自尊感情」に似通ったものとして扱われていることがわかった。

高垣は、状況や対象に依存的でないものこそが「自己肯定感」であると言おうとしたからこそ、自尊感情や自己効力感といった類似概念が既に存在していたにも関わらず、新たに「自己肯定感」という概念を生み出し、また尺度を用いてそれを測定しようとすることはしなかったのだろう。しかし、近年の「自己」研究は個人の測定やコントロールに焦点を当てた実証的な研究が非常に多い。そのような潮流の中で、「自己肯定感」についても「自尊感情」や「自己効力感」同様、尺度を用いて研究を行う例が増加し、「自尊感情」に近しいものを「自己肯定感」として扱う研究が増加していったのではないかと考えた。

よって、「自己肯定感」という言葉は、メディアで扱われる以前から、研究者によって扱いが異なる曖昧な概念であったということができる。

続く第 4 章では、はじめは一部の人々の間でのみ用いられていた「自己肯定感」という言葉が一般に広く使われるようになったこと、またその過程で意味が変化したことの要因には研究者と人々との架け橋になるメディアの存在があったのではないかと推察し、新聞を対象に調査を行った。

その結果、新聞記事上において「自己肯定感」という言葉が登場した最初期である 1991 年～1998 年の記事においても、言葉の用法や意味について記述された記事はほとんどないことが確認された。

また新聞記事上において、「自己肯定感が低い」とされる対象は、はじめは少年犯罪の被告人、学校教育現場における児童生徒や発達障害がある子ども、児童養護施設で育った子どもなど、「声を上げることができない立場の弱い人々」であり、彼らに対して当事者以外の大人たちが「彼らは自己肯定感が低い」とする文言が記事内に多く登場していたことがわかった。しかしその後、言葉の知名度が上がったことも関連してか、女性や性的少数者といった「声を上げることができる立場の弱い人々」が、自己肯定感という言葉を「自分は(あるいは自分と同じ属性をもつ人々は)自己肯定感が低い」と当事者の立場から発信するようになっていた。このような、「自己肯定感が低い」とされる対象の変化と、それを語る主体の変化を新聞の調査結果から読み取ることができた。

第 5 章では、新聞記事上からのみでは読み取ることができなかった研究者とメディア、一般の人々との相互作用を確認し、また一般の人々が「自己肯定感」をどのようなものとして捉えているのかを探ることを目的に、CiNii に掲載されている論文と書籍、第 4 章でも扱った新聞記事、そして Google Trends を対象に据えて、各媒体で目立った動きがあった時期を中心に調査を行った。

結果としては、いずれの時期においても相互作用を確認することができたが、2018 年より前の、論文と新聞記事において「自己肯定感」が中心に取り上げられていた時期は、書籍や一般の人々も同じ話題を扱っていたり興味を持っていたりすることは調査から読み取れたものの、その総数自体は決して多くはなく、相互作用があまり大きいものでなかったのであろうことが推測できた。

一方で 2018 年の書籍数増加以降は、論文や新聞記事以上に書籍が大きな影響力を持ち、一般の人々の関心を高めたのであろうこと、その際に発行された書籍の中には「大人の自己肯定感を高める」ことを目的としたものが多かったために、第 4 章で確認した新聞記事上における「「自己肯定感」について語る主体の変化」が起きたのであろうことがわかった。

また一般の人々の「自己肯定感」についてのイメージは、2019 年前後に Google Trends 上で注目を集めていた中島輝が形成した可能性が高く、彼の言う「自己肯定感」が状況依存的なものであること(提唱者である高垣の「自己肯定感」とは異なること)から、一般の人々もまた自己肯定感を状況によって変動する不安定なものとして捉えている可能性が高いこともわかった。

以上の検証を通して、本研究は「自己肯定感」という言葉が時代の中でどのように使われ、人々にどのような言葉として認識されてきたかを明らかにしてきた。これが「自己肯定感」を扱った先行研究にはなかった点であり、本研究の貢献である。

しかし本研究にはいくつか課題も残されているため、最後にその課題について述べ、本文を締めたい。まず一つに、新聞記事の中には扱うことができていない話題も多くあるという点がある。本研究では KH Coder によるテキスト分析の結果得られた、その時期ごとに特徴的な記事のみを中心に取り上げ、残りの記事については共起ネットワークと抽出語のランキングを通じて簡単に傾向を示すにとどめた。そのため、重要な記事の見落としが生じていた可能性もある。

次に、一般の人々の反応を Google Trends 以外のものから調査できなかったという点がある。Google Trends において示されるものはあくまでその時代の傾向のみであり、それがなぜ生じたのか、人々がどういった意図でそのトピックに注目していたのかといったことまでは読み取ることができない。一般の人々の理解をより深く探るのであれば、この点まで視野に入れるべきであっただろう。

最後に、「各媒体が同じ時期に似た話題を扱っている」ということから相互作用を確認することはできたものの、どの媒体が、なぜ最初にその話題を取り上げたのか、また何が最も他の媒体に大きく作用したのかを完全に明らかにすることが叶わなかったという点がある。こうした点にまで調査範囲を広げることで、本研究の更なる発展が望めるであろう。

【謝辞】
本論文の執筆にあたり、長期にわたり丁寧かつ適切なご指導をくださった指導教官の小熊英二先生に深く感謝申し上げます。
また研究発表の際に丁寧にコメントをしてくださった研究会の皆さまにも感謝いたします。

【参考文献】

From Greer, S. (2003). Self-esteem and the De-moralized Self A Genealogy of Self Research and Measurement. In D. Hall and M. Krall (Eds.), About Psychology: Essays at the Crossroads of History, Theory, and Philosophy, 89-108. SUNY Press.

Kitano H,1989, Alcohol and drug use and self-esteem: A sociocultural perspective, The social importance of self-esteem 294-326, Berkeley, CA: University of California Press

NHK,2022,「なりたい自分になる！“ハッピーの達人”に学ぶ新習慣」,NHK ホームページ,(2024 年 1 月 31 日, https://www.nhk.jp/p/asaichi/ts/KV93JMQRY8/episode/te/8V47N9PMKQ/)

青木邦男,2015,「在宅高齢者の主観年齢に関連する要因」,社会福祉学 2015 年 56 巻 1 号 74-86

青木善治,2010,「考える力,表現する力,かかわり合う力を育て,自己肯定感を育む図画工作：低学年の子どもの造形活動における相互行為の論理に基づく臨床的教育実践研究」, 美術教育学：美術科教育学会誌 2010 年 31 巻 1-12

青木善治,2016,「考える力，表現する力，自己肯定感を育むための鑑賞活動の試み」,美術教育学研究 2016 年 48 巻 1 号 1-8

赤川学,2017,「社会問題の歴史社会学をめざして」,社会学評論 2017-2018, 68 巻 1 号, 118-133

明橋大二,2010,「子育てハッピーアドバイス　大好き！が伝わる　ほめ方・叱り方」, １万年堂出版

安達智子,2003,「大学生の職業興味形成プロセス――手段性・表出性,自己効力感,結果期待の役割について――」,教育心理学研究 2003 年 第 51 巻 308-318

阿部 美帆, 今野 裕之,2007,「状態自尊感情尺度の開発」, パーソナリティ研究 2007 年 第 16 巻 第 1 号 36-46

新井博達, 弘中由麻, 近藤清美,2015,「社交不安症状と対人的自己効力感が大学生のひきこもり親和性に与える影響」, パーソナリティ研究 2015 年 第 24 巻 第 1 号 1-14

アルバート・バンデューラ,本明寛・野口京子・春木豊・山本多喜司(訳),1997,「激動社会の中の自己効力」,金子書房(Albert Bandura, 1995, Self-efficacy in changing societies, Cambridge University Press)

伊川美保・楠見孝,2020,「統計リテラシー自己効力感尺度日本語版の作成――統計教育の効果測定――」,心理学研究 2020 年 第 90 巻 第 2 号 133-141
碇山恵子・湯川恵子・細川和彦・木村尚仁・川上敬,2014,「工学系学生の活動履歴が「就職決定力」に及ぼす要因の研究」, 工学教育 2014 年 62 巻 4 号 4_76-4_80
市川玲子・望月聡,2014, 「パーソナリティ障害特性と自尊感情の諸側面との関連―変動の大きさおよび随伴性に着目して」, パーソナリティ研究 2014 年 第 23 巻 第 2 号 80-90
市川玲子・望月聡,2015,「パーソナリティ障害と顕在的-潜在的自尊感情間の乖離との関連」,心理学研究 2015 年 第 86 巻 第 5 号 434-444
市村(阿部)美帆,2011,「自尊感情の高さと変動性の 2 側面と自尊感情低下後の回復行動との関連」,心理学研究 2011 年 第 82 巻 第 4 号 362-369
市村美帆,2012,「自尊感情の変動性の測定手法に関する検討」, パーソナリティ研究 2012 年 第 20 巻 第 3 号 204-216
伊藤崇達,1996,「学習達成場面における自己効力感,原因帰属,学習法略の関係」,教育心理学研究 1996 年 第 44 巻 340-349
伊藤正哉・小玉正博,2005,「自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討」,教育心理学研究 2005 年 第 53 巻 74-85
伊藤正哉・小玉正博,2006,「大学生の主体的な自己形成を支える自己感情の検討――本来感,自尊感情ならびにその随伴性に着目して――」,教育心理学研究 2006 年 第 54 巻 222-232
伊藤正哉・川崎直樹・小玉正博,2011,「自尊感情の 3 様態――自尊源の随伴性と充足感からの整理――」,心理学研究 2011 年 第 81 巻 第 6 号 560-568
伊藤美奈子,2017,「いじめる・いじめられる経験の背景要因に関する基礎的研究――自尊感情に着目して――」,教育心理学研究 2017 年 第 65 巻 26-36
伊藤裕子,2001,「青年期女子の性同一性の発達――自尊感情,身体満足度との関連から――」,教育心理学研究 2001 年 第 49 巻 458-468
井上裕文・山下純,2021「コミュニケーション交流学習への取り組み―ホスピタリティの涵養とコミュニケーション能力の向上をめざして―」,薬学教育 2021 年 5 巻
上田諭,2014,「老年期に生じやすい危機 : うつ病は身体の病,認知症は心の病(シンポジウム:女性のライフステージと心身症,2013 年,第 54 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会(横浜))」,心身医学 2014 年 54 巻 7 号 679-684
榎本博明,2006,「人格心理学領域における研究動向」,教育心理学年報 第 45 巻 61-71,日本教育心理学会
及川恵・坂本真士,2007,「女子大学生を対象とした抑うつ予防のための心理教育プログラムの検討――抑うつ対処の自己効力感の変容を目指した認知行動的介入――」,教育心理学研究 2007 年 第 55 巻 501-513

及川恵, 山蔦圭輔, 坂本真士,2013,「抑うつ対処の自己効力感による抑うつ低減プロセス―気晴らしへの集中に着目して」, パーソナリティ研究, 2013 年 22 巻 2 号 185-188
太田真紀,2007,「吃音児の自尊感情――話す領域に関する自己評価と重要度との関連――」,教育心理学研究 2007 年 第 55 巻 106-119
大谷和大, 中谷素之,2011,「学業における自己価値の随伴性が内発的動機づけ低下に及ぼす影響プロセス――状態的自尊感情と失敗場面の感情を媒介として」, パーソナリティ研究, 2011 年 19 巻 3 号 206-216
岡田努,2011,「現代青年の友人関係と自尊感情の関連について」, パーソナリティ研究, 2011 年 20 巻 1 号 11-20
岡田涼, 小塩真司, 茂垣まどか, 脇田貴文, 並川努,2015,「日本人における自尊感情の性差に関するメタ分析」, パーソナリティ研究, 2015 年 24 巻 1 号 49-60
小川翔大,2020,「知覚された自尊感情の変動性尺度の日本語版作成と信頼性・妥当性の検討」,心理学研究 2020 年 第 91 巻 第 3 号 173-182
小塩真司,1998,「青年の自己愛傾向と自尊感情,友人関係のあり方との関連」,教育心理学研究 1998 年 第 46 巻 280-290
小塩真司・岡田涼・茂垣まどか・並川努・脇田貴文,2014,「自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響―Rosenberg の自尊感情尺度日本語版のメタ分析― 」, 教育心理学研究, 62,273-282
小塩真司,・西野拓朗・速水敏彦,2009,「潜在的・顕在的自尊感情と仮想的有能感の関連」, パーソナリティ研究, 2009 年 17 巻 3 号 250-260
折橋晃美,2016,「語らせる言語活動から語り出す言語活動へ――青い目の人形を題材にして――」,小学校英語教育学会誌 2016 年 16 巻 01 号 1-17
甲斐村美智子,2010,「女子学生の月経の経験と自己肯定感 : 初経教育およびその後の月経の経験と自己肯定感との関連」,女性心身医学 2010 年 14 巻 3 号 277-284
加納寛子,2022,「新型コロナウイルス(COVID-19)流行時におけるインターネット上の大学や遠隔授業に対する人々の言説分析」,情報教育ジャーナル 2022 年 4 巻 1 号 1-11
上地雄一郎, 宮下一博,2009,「対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性」, パーソナリティ研究, 2009 年 17 巻 3 号 280-291
神原歩・遠藤由美,2011,「高合意性情報が強制承諾実験における態度変化に与える効果：自己肯定感の維持という観点からの検討」,実験社会心理学研究 2013 年 52 巻 2 号 116-124
神原歩・遠藤由美,2013,「合意性推測の高さが脅威に晒された自己肯定感を修復する効果」,実験社会心理学研究 2013 年 52 巻 2 号 91-103
河越麻佑・岡田みゆき,2015,「大学生の自己肯定感に及ぼす影響要因」,日本家政学会誌 2015 年 66 巻 5 号 222-233

河内清彦,2004,「障害学生との交流に関する健常大学生の自己効力感及び障害者観に及ぼす障害条件,対人場面及び個人要因の影響」,教育心理学研究 2004 年 第 52 巻 437-447
神野雄,2018,「青年の恋愛関係における嫉妬傾向は自尊感情に規定されうるか――自己愛的観点からの検討」,パーソナリティ研究, 2018 年 27 巻 2 号 125-139
北村琴美,2008,「過去および現在の母娘関係と成人女性の心理的適応性――愛着感情と抑うつ傾向,自尊感情との関連――」,心理学研究 2008 年 第 79 巻 第 2 号 116-124
北村達也・能田由紀子・吐師道子・竹本浩典,2019,「大学生・大学院生を対象とした発話のしにくさの自覚に関するアンケート調査」,日本音響学会誌 2019 年 75 巻 3 号 118-124
木村大樹,2019,「自閉スペクトラム症傾向の高い大学生の対人不安の特徴――自尊感情および公的自意識との関連から」, パーソナリティ研究, 2019 年 28 巻 2 号 97-107
清田哲男,2012,「総合学科高等学校における自己肯定感を育む美術教育モデルの一考察：地域によって育まれる高校生の自主運営による美術展覧会をとおして」,美術教育学：美術科教育学会誌　2012 年 33 巻 175-186
小池 春妙・伊藤 義美,2015,「自尊感情と自己効力感が大学生の精神科受診意図に与える影響」,カウンセリング研究 2015 年 48 巻 1 号 11-19
小出真奈美・片岡千恵・荒井信成,2021,「小学校低学年における児童の自己肯定感を高める授業の試み――特別の教科道徳と体育の教科等横断的な取り組みから――」,日本健康教育学会誌 2021 年 29 巻 1 号 61-69
厚生労働省,2011,「「里親委託ガイドラインについて」の一部改正について」, 厚生労働省ホームページ,(2023 年 12 月 30 日,https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00tb7626&dataType=1&pageNo=1)
厚生労働省,2021,「放課後等デイサービスの現状と課題について」, 厚生労働省ホームページ,(2023 年 12 月 30 日,https://www.mhlw.go.jp/content/12401000/000806210.pdf)
高史明,2013,「Twitter における中国人についての言説の計量テキスト分析」, 日本心理学会大会発表論文集, 2013, 77 巻 75
国立国会図書館収集書支部,2017,「国立国会図書館「日本十進分類法(NDC)新訂 10 版」分類基準」,国立国会図書館ホームページ, (2024 年 1 月 31 日, https://www.ndl.go.jp/jp/data/NDC10code201708.pdf)
小林伸雄,2009,「専攻科(保育専攻)における「修了研究及び論文」の実践報告」,夙川学院短期大学教育実践研究紀要 2009 年 2009 巻 1 号 39-44
近藤卓,2016「子どものこころのセーフティネット―二つの自尊感情と共有体験―」,少年写真新聞社
齊藤彩,2015,「中学生の不注意および多動性・衝動性と内在化問題との関連――学校ライフイベントと自尊感情を媒介として――」,教育心理学研究 2015 年 第 63 巻 217-227

齊藤彩・松本聡子・菅原ますみ,2016,「児童期後期の不注意および多動性・衝動性と抑うつとの関連――養育要因と自尊感情に着目して」, パーソナリティ研究, 2016 年 25 巻 1 号 74-85
齊藤彩・松本聡子・菅原ますみ,2020,「思春期の注意欠如・多動傾向と不安・抑うつとの断続的関連」,教育心理学研究 2020 年 第 68 巻 237-249
齊藤真善・吉田真代,2020,「大学生における社会的同調圧に対する自閉症スペクトラム傾向および自己肯定感の影響について」,北海道特別支援教育研究第 14 巻 1 号 19-27
佐久間路子・無藤隆,2003,「大学生における関係自己の可変性と自尊感情との関連」,教育心理学研究 2003 年 第 51 巻 33-42
笹川果央理,2015,「自尊感情が主観的幸福感へ及ぼす影響の検討―自己価値の随伴性からの整理」, パーソナリティ研究, 2015 年 24 巻 2 号 112-123
佐々木掌子,2018,「中学校における「性の多様性」授業の教育効果」,教育心理学研究 2018 年 第 66 巻 313-326
佐藤広英,2021,「顔の自撮りの加工が自尊感情およびポジティブ気分に及ぼす効果」, パーソナリティ研究, 2021 年 30 巻 3 号 127-129
佐藤雅浩,2013,「精神疾患の歴史社会学――「心の病」はなぜ流行するのか」,新曜社
下村英雄,2007,「中学校におけるコンピュータを活用したキャリアガイダンスが進路自己効力感に与える影響」,教育心理学研究 2007 年 第 55 巻 276-286
週刊朝日,2019,「あなたの「自己肯定感」は大丈夫？専門家監修チェックシートを見よ」,AERAdot.(2024 年 1 月 31 日, https://dot.asahi.com/articles/-/117562)
菅沼真樹,1997,「老年期の自己開示と自尊感情」,教育心理学研究 1997 年 第 45 巻 378-387
杉原秀保,2021,「ニューノーマル時代のチームビルディングに関する提言–1 on 1 による心理的安全性確保と組織生産性について–」,プロジェクトマネジメント研究報告 2021 年 1 巻 1 号 63-67
鈴木敬子・青木直和・小林裕幸,2011,「写真の力を利用した授業カリキュラムの開発」,日本写真学会誌,2011 年 74 巻 2 号 77-91
高垣忠一郎,2015,「生きづらい時代と自己肯定感「自分が自分であって大丈夫」って？」,新日本出版社
多賀谷智子・佐々木和義,2008,「小学 4 年生の学級における機会利用型社会的スキル訓練」,教育心理学研究 2008 年 第 56 巻 426-439
高橋あつ子,2002,「自己肯定感促進のための実験授業が自己意識の変化に及ぼす効果」,教育心理学研究,2002 年 50 巻 1 号 103-112
滝沢真智子・田中 道弘,2011,「幼稚園教育実習と保育実習の実習成果に関する考察」,教育実践学研究 2011 年 15 巻 63-77
竹内健太,2017,「子供たちの自己肯定感を育む――教育再生実行会議第十次提言を受けて――」,立法と調査 392 号 65-72,参議院常任委員会調査室・特別調査室

竹田剛,2012,「神経性過食症患者が抱く食事を巡る問題ー自己ー対人関係の関連性――M-GTA による自己物語の分析――」,教育心理学研究 2012 年 第 60 巻 249-260
田中道弘,2005,「自己肯定感尺度の作成と項目の検討」, 人間科学論究,13,15-27, 常磐大学大学院人間科学研究科
田中道弘,2012,「自己肯定感尺度の検討（１）」, 日本心理学会大会発表論文集, 2012, 76 巻
田中道弘・榎本博明,2011,「自己肯定感と自己実現との関係」,日本心理学会大会発表論文集 2011, 75 巻
谷島弘仁,2010,「教師が学校コンサルタントに求める援助特性に関する検討」,教育心理学研究 2010 年 第 58 巻 57-68
田村修一・石隈利紀,2002,「中学校教師の援助志向性と自尊感情の関連」,教育心理学研究 2002 年 第 50 巻 291-300
趙善英・松本芳之・木村裕,2009,「公的自己意識と対人不安,自己顕示性の関係への自尊感情の調節効果の日韓比較」,心理学研究 2009 年 第 80 巻 第 4 号 313-320
築地典絵 ・藤原靖浩・折口量祐,2021,「自己肯定感を育むための 3 領域からのアプローチ 自己肯定感尺度の検討(1)」,人間環境学研究 2021 年 19 巻 2 号 141-147
豊田加奈子・松本恒之(2004),「大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究」, 東洋大学人間科学総合研究所紀要　創刊号（2004） 38－54
内閣府,2014,「平成 26 年版 子ども・若者白書」
内閣官房教育再生実行会議,2017,「自己肯定感を高め、自らの手で未来を切り拓く子供を育む教育の実現に向けた、学校、家庭、地域の教育力の向上(第十次提言)」
永井智,2010,「大学生における援助要請意図――主要な要因間の関連から見た援助要請意図の規定因――」,教育心理学研究 2010 年 第 58 巻 46-56
中西良文,2004,「成功/失敗の方略帰属が自己効力感に与える影響」,教育心理学研究 2004 年 第 52 巻 127-138
中西良文・大道一弘・梅本貴富,2018,「知識の正確性ならびに知識再構築に対する自己効力感と概念変化」,教育心理学研究 2018 年 第 66 巻 199-211
中間玲子,2013,「自尊感情と心理的健康との関連再考――「恩恵享受的自己感」の概念提起――」,教育心理学研究 2013 年 第 61 巻 374-386
成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子,1995,「特性的自己効力感尺度の検討――生涯発達的利用の可能性を探る――」,教育心理学研究 1995 年 第 43 巻 306-314
新延知美, 今野裕之,2014,「自己注目が失敗からの心理的成長に与える影響―自尊感情および自己価値の随伴性を媒介として」, パーソナリティ研究, 2014 年 23 巻 1 号 57-59
西村多久磨・藤原和政・村上達也・福住紀明,2022,「中学生のソーシャルスキルと学校適応問題――学校生活満足度,自尊感情,抑うつ,攻撃生徒の関連――」,心理学研究 2022 年

西村多久磨・村上達也・櫻井茂男,2015,「共感性を高める教育的介入プログラム――介護福祉系の専門学校生を対象とした効果検証――」,教育心理学研究 2015 年 第 63 巻 453-466
野村信威,2009,「地域在住高齢者に対する個人回想法の自尊感情への効果の検討」,心理学研究 2009 年 第 80 巻 第 1 号 42-47
橋場典子,2011,「社会的包摂と法教育「つながり」の法教育の可能性」,法社会学 2011 年 2011 巻 75 号 105-119
林幸史・青野明子,2020,「フォト・ベースド・コミュニケーションの教育現場での活用：写真表現を通した子どもの自己肯定感の向上」,コミュニティ心理学研究,2020 年 24 巻 1 号 53-68
林有紀,2010,「大型遊具制作についての実践報告」,夙川学院短期大学教育実践研究紀要 2010 年 2010 巻 2 号 88-92
林原洋二郎,2021,「放課後等デイサービスにおけるプログラミングを利用した自己肯定感を育む支援」,日本教育工学会論文誌 2021 年 44 巻 Suppl. 号 49-52
原田宗忠,2008,「青年期における自尊感情の揺れと自己概念との関係」,教育心理学研究 2008 年 第 56 巻 330-340
樋口耕一,2020,「社会調査のための計量テキスト分析 第 2 版 内容分析の継承と発展を目指して」,ナカニシヤ出版
平沼貞義,2012,「行事等への参加に激しい抵抗を示し行動調整ができない小学生 A 子への発達支援」,自閉症スペクトラム研究 2012 年 10 巻 2 号 57-64
福留広大・森永康子,2018,「自己評価的尺度における肯定的・否定的項目群因子の年齢別の分析――ローゼンバーグ自尊感情尺度と特性的自己効力感尺度――」,教育心理学研究 2018 年 第 66 巻 212-224
福留広大・藤田尚文・戸谷彰宏・小林渚・古川善也・森永康子,2017,「中学生におけるローゼンバーグ自尊感情尺度の 2 側面――「肯定的自己の受容」と「否定的自己像の拒否」――」,教育心理学研究 2017 年 第 65 巻 183-196
藤井勉,2014,「顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連」,心理学研究 2014 年 第 85 巻 第 1 号 93-99
藤井裕子・林幹士・浦田雅夫,2020,「保育者を志望する学生の自己肯定感の育成をめぐって――現職保育者から学生に対する期待と学生自身の自己点検の分析――」,神戸教育短期大学研究紀要 2020 年 1 巻 6-23
細田絢・田嶌誠一,2009,「中学生におけるソーシャルサポートと自他への肯定感に関する研究」,教育心理学研究 2009 年第 57 巻 3 号 309-323
松尾直博,新井邦二郎,1998,「児童の対人不安傾向と公的自己意識,対人的自己効力感との関係」,教育心理学研究 1998 年 第 46 巻 21-30

松岡美幸・中山晃,2014,「特別支援学級と交流学習での外国語活動の試み」,小学校英語教育学会誌 2014 年 14 巻 01 号 36-49
松岡弥玲,2006,「理想自己の生涯発達――変化の意味と調節過程を捉える――」,教育心理学研究 2006 年 第 54 巻 45-54
松岡弥玲・加藤美和・神戸美香・澤本陽子・菅野真智子・詫間里嘉子・野瀬早織・森ゆき絵,2006,「成人期における他者視点(子ども,配偶者,両親,友人,職場の人)の理想 自己のズレが自尊感情に及ぼす影響――性役割観との関連から――」,教育心理学研究 2006 年 第 54 巻 522-533
松沼光泰,2004,「テスト不安,自己効力感,自己調整学習及びテストパフォーマンスの関連性――小学校 4 年生と算数のテストを対象として――」,教育心理学研究 2004 年 第 52 巻 426-436
松本厚枝・西村瑠美・藤原奈津美,2020,「歯科衛生学生におけるカウンセリング教育の効果――自己肯定意識尺度を用いて――」, 日本歯科心身医学会雑誌 2020 年 35 巻 1-2 号 5-12
水谷聡秀・雨宮俊彦,2015,「小中高時代のいじめ経験が大学生の自尊感情と Well-Being に与える影響」,教育心理学研究 2015 年 第 63 巻 102-110
水野治久・石隈利紀,2001,「アジア系留学生の専門的ヘルパー,役割的ヘルパー,ボランティアヘルパーに対する被援助志向性と社会・心理学的変数の関連」,教育心理学研究 2001 年 第 49 巻 137-145
箕浦有希久・ 成田 健一,2015,「状態自尊感情の測定とその展望：状態-特性自尊感情の視点から」
箕浦有希久・ 成田 健一,2016,「2 項目自尊感情尺度を用いた状態自尊感情の測定―実験的に操作された場面想定法による妥当性の検討」,パーソナリティ研究,2016 年第 25 巻 2 号 151-153
三宅幹子,2000,「特性的自己効力感が課題固有の自己効力感の変容に与える影響――課題成績のフィードバック操作を用いて――」,教育心理学研究 2000 年 第 48 巻 42-51
三好昭子,大野久,2011,「人格特性的自己効力感研究の動向と漸成発達理論導入の試み」,心理学研究 2011 年 第 81 巻 第 6 号 631-645
望月美紗子・近藤卓・宮森孝史,2016,「日本における小・中・高校生の自尊感情の実態――性別と学年による違い――」, 学校メンタルヘルス 19(2), 173-181
安田美弥子・松下年子,2002,「依存症の回復におけるセルフヘルプグループの機能の研究(4) : アルコール依存症からの回復の諸相およびセルフヘルプグループの意義」,東京保健科学学会誌 2002 年 5 巻 2 号 61-74
安成英文,2014,「すごいデスカンファレンス―会議手法の工夫」,日本プライマリ・ケア連合学会誌 2014 年 37 巻 3 号 285-288

柚洞 一央・山下 聖・高橋 冴,2016,「室戸高校における地理学的視点を取り入れたジオパーク教育」,地学雑誌 2016 年 125 巻 6 号 813-829
吉崎聡子・平岡恭一,2015,「自己決定理論に基づく動機づけと自己効力感からみたキャリア探索」,心理学研究 2015 年 第 86 巻 第 1 号 55-61
吉田拓也,2011,「和太鼓の体験学習が及ぼす教育的効果についての実証的研究 : 自己肯定感や動機づけ及び対人的態度等の基盤となる気持ちに及ぼす影響(4.日本伝統音楽を扱う授業構成,I カリキュラムと授業構成)」,学校音楽教育研究 2011 年 15 巻 143-144
與那覇里子,2020,「フェイクニュースと若者を結びつける新聞言説はどのように広がったか」,社会情報学 2020 年 8 巻 3 号 1-13
四方田健二,2020,「新型コロナウイルス感染拡大に伴う不安やストレスの実態：Twitter 投稿内容の計量テキスト分析から」,体育学研究 2020 年 65 巻 757-774
若本純子,2007,「中高年期の自己評価における発達的特徴――自尊感情との関連, および領域間の関連に注目して」, パーソナリティ研究,2007 年第 16 巻 1 号 1-12
若本純子・無藤隆,2004,「中年期の多次元的自己概念における発達的特徴――自己に対する関心と評価の交互作用という観点から――」,教育心理学研究 2004 年 第 52 巻 382-391

【付録】

［表 5：大宅壮一文庫　雑誌記事検索結果］

年	「自尊感情」記事数	「自己効力感」記事数	「自己肯定感」記事数
1995	0	0	0
1996	0	0	1
1997	0	0	0
1998	0	0	0
1999	1	0	0
2000	0	0	0
2001	2	0	1
2002	0	1	1
2003	0	0	0
2004	1	0	1
2005	1	0	2
2006	1	0	2
2007	0	0	1
2008	0	0	1
2009	1	0	1
2010	0	0	4
2011	1	0	3
2012	0	0	3
2013	0	0	10
2014	1	0	3
2015	0	1	1
2016	2	0	2
2017	0	2	5
2018	0	0	7
2019	0	0	16
2020	1	0	41
2021	2	0	37
2022	1	1	36
2023 年 6 月まで	1	1	7

［表 6：雑誌別　自己肯定感に関する記事数推移］

掲載雑誌	年数（記事数）	メモ
an・an 20 代前半から 30 代前半の読者が中心。	2018(1 本) 2020(18 本) 2021(1 本) 2022(8 本)	2020 特集あり →タイトル：メンタルを強くする自己肯定感ワーク →内容：著名人へのインタビュー・対談など

平均年齢 31 歳。男女比についてのデータはないがファッションアイテムなどは女性のもののみが取り上げられている。特集内容によっては男性も購入している可能性あり		2022 特集あり →タイトル：自己肯定感レッスン →内容：著名人へのインタビュー・対談など
AERA ウィズ・キッズ 読者の 9 割が女性・年齢層は 30 代後半～40 代前半	2010(1 本) 2011(1 本) 2013(3 本) 2015(1 本) 2018(1 本) 2019(2 本) 2020(3 本) ※2020 臨増 2021(2 本)	
CLASSY 20 代後半から 30 代前半の女性	2020(1 本) 2021(13 本)	2021 特集あり →タイトル：“自己肯定感”あがる服！ →内容：ファッション特集
プレジデントファミリー	2022(10 本)	2022 特集あり →タイトル：判明！「自己肯定感」の育て方 →内容：著名人へのインタビューなど
日経ヘルス 読者の平均年齢は 38.9 歳。	2020(2 本) 2021(3 本) 2022(2 本)	
AERA 週刊誌・男女半々・コア層は 30 代～50 代	1996(1 本) 2012(2 本) 2019(2 本) 2022(1 本)	
LEE 30～40 代の主婦がメインターゲット	2021(3 本) 2022(3 本)	
non・no 20 歳前後の女性がターゲット	2020(6 本)	2020 は特集あり タイトル：元気になれる！自己肯定感アゲ相談室

		内容：著名人(タレント、アナウンサーなど)へのインタビュー
エッセ 30 代～40 代の子育て中の主婦がターゲット	2019(2 本) 2022(2 本) 2023(2 本)	
プレジデント 40～50 代・男女比は 8：2	2019(2 本) 2020(1 本) 2022(3 本)	
女性自身 40 代、50 代を中心に、20 代から 60 代まで多くの女性が愛読	2016(1 本) 2018(1 本) 2019(2 本) 2020(1 本)	
からだにいいこと 30～40 歳代の女性	2019(1 本) 2020(2 本) 2021(1 本)	
週刊朝日 男性 7 割・読者の 6 割以上が 50 代	2004(1 本) 2006(1 本) 2012(1 本) 2019(1 本)	
日経ウーマン 読者の中心は２０代・３０代の働く女性たち	2005(1 本) 2020(2 本) 2022(2 本)	
SPA! ３５、６歳がコアな読者層	2013(1 本) 2019(1 本) 2023(2 本)	
THE21 30,40 代が主な読者層・読者の 7 割が男性	2017(1 本) 2018(1 本) 2021(1 本)	
現代のエスプリ 購買層不明/現在休刊	2007(1 本) 2010(2 本)	
週刊ダイヤモンド 30 代から 50 代のビジネスマン	2014(1 本) 2019(1 本) 2020(1 本)	
BAILA 20 代後半～30 代女性	2021(2 本)	

ELLE JAPON	2021(1 本) 2023(1 本)	
STORY 購買層不明	2021(1 本) 2022(1 本)	
家の光 メイン読者層は農家の主婦	2020(2 本)	
グラツィア 35 歳前後の女性	2011(1 本) 2013(1 本)	
週刊新潮 男性 60.1%	2019(1 本) 2021(1 本)	
致知 購買層不明	2010(1 本) 2017(1 本)	
婦人公論 40 代の女性	2009(1 本) 2020(1 本)	
ゆうゆう 50 代の女性	2013(2 本)	
CREA	2020(1 本)	
Hanako	2021(1 本)	
JUNON	2021(1 本)	
Newton	2022(1 本)	
PHP スペシャル	2014(1 本)	
POTATO	2022(1 本)	
pumpkin	2021(1 本)	
Switch	2013(1 本)	
潮	2017(1 本)	
オレンジページ	2023(1 本)	
音楽と人	2022(1 本)	
クロワッサン	2011(1 本)	
経済界	2014(1 本)	
サイゾー	2021(1 本)	
サッカーダイジェスト	2017(1 本)	
サンデー毎日	2019(1 本)	
週刊金曜日	2016(1 本)	
週刊現代	2013(1 本)	
週刊女性	2018(1 本)	

週刊東洋経済	2018(1 本)	
週刊文春	2021(1 本)	
女性セブン	2021(1 本)	
セブンティーン	2021(1 本)	
ダ・ヴィンチ	2023(1 本)	
ダカーポ	2005(1 本)	
日経キッズプラス	2008(1 本)	
日経ビジネス	2001(1 本)	
日経ビジネス　アソシエ	2013(1 本)	
美 ST	2022(1 本)	
プシコ	2002(1 本)	
武道	2017(1 本)	
ムー	2021(1 本)	
ゆほびか	2018(1 本)	
ルミーナ	2006(1 本)	

［表 7：朝日新聞　記事数推移］

年	「自尊感情」記事数	「自己効力感」記事数	「自己肯定感」記事数
1993	1	0	1
1994	0	0	0
1995	1	0	1
1996	0	0	2
1997	1	0	0
1998	5	1	1
1999	4	1	5
2000	4	0	8
2001	3	0	7
2002	2	0	7
2003	8	0	4
2004	4	1	11
2005	6	1	5
2006	9	0	13
2007	9	1	10
2008	12	0	19
2009	14	0	22
2010	20	0	18
2011	4	0	20
2012	17	0	24
2013	17	0	41
2014	19	0	49

2015	18	1	51
2016	10	0	66
2017	18	1	73
2018	11	0	73
2019	14	2	99
2020	5	1	62
2021	9	2	83
2022 2023(6 月まで)	10 4	5 2	74 55

［表 8：読売新聞　記事数推移］

年	「自尊感情」 記事数	「自己効力感」 記事数	「自己肯定感」 記事数
1991	1	0	1
1992	0	0	0
1993	0	0	0
1994	0	0	0
1995	0	0	0
1996	1	0	0
1997	0	1	2
1998	3	0	0
1999	3	0	1
2000	12	1	1
2001	5	0	5
2002	9	0	6
2003	7	0	3
2004	5	0	6
2005	10	0	6
2006	14	0	13
2007	12	0	16
2008	11	0	11
2009	14	0	5
2010	12	0	14
2011	10	1	13
2012	18	1	32
2013	15	1	24
2014	14	2	27
2015	13	0	29
2016	8	1	32
2017	11	0	56
2018	6	0	51
2019	8	1	79

2020	4	2	83
2021	10	3	79
2022 2023(6 月まで)	4 3	3 0	83 37

［表 9：日本経済新聞　記事数推移］

年	「自尊感情」 記事数	「自己効力感」 記事数	「自己肯定感」 記事数
1985	1	0	0
1986	0	0	0
1987	0	0	0
1988	0	0	0
1989	0	0	0
1990	0	0	0
1991	0	0	0
1992	0	0	0
1993	0	0	1
1994	0	0	0
1995	0	0	0
1996	1	0	0
1997	0	0	0
1998	2	0	0
1999	1	0	1
2000	0	0	2
2001	2	0	1
2002	1	0	0
2003	2	0	0
2004	0	0	1
2005	1	0	4
2006	1	0	3
2007	0	0	1
2008	3	0	3
2009	3	2	0
2010	0	0	7
2011	4	1	6
2012	1	3	7
2013	3	1	5
2014	1	2	14
2015	4	4	10
2016	3	1	16
2017	3	3	12
2018	0	3	19

2019	3	2	36
2020	3	5	25
2021	2	8	35
2022 2023(6 月まで)	0 2	4 4	46 28

［表 10：毎日新聞　記事数推移］

年	「自尊感情」 記事数	「自己効力感」 記事数	「自己肯定感」 記事数
1985	0	0	0
1986	0	0	0
1987	0	0	0
1988	0	0	0
1989	0	0	0
1990	0	0	0
1991	0	0	0
1992	0	0	0
1993	0	0	0
1994	1	0	0
1995	0	0	0
1996	0	0	0
1997	2	0	1
1998	3	0	2
1999	4	0	6
2000	3	0	4
2001	7	0	8
2002	4	1	1
2003	7	0	3
2004	3	0	4
2005	7	0	3
2006	7	0	7
2007	10	0	10
2008	11	0	15
2009	12	0	15
2010	7	0	14
2011	11	0	15
2012	8	0	12
2013	10	0	25
2014	16	1	37
2015	7	0	36
2016	14	1	38
2017	16	3	52

2018	10	0	61
2019	12	3	65
2020	7	1	32
2021	7	3	59
2022 2023(6 月まで)	10 5	4 1	85 32

［表 11：産経新聞　記事数推移］

年	「自尊感情」 記事数	「自己効力感」 記事数	「自己肯定感」 記事数
1985	0	0	0
1986	0	0	0
1987	0	0	0
1988	0	0	0
1989	0	0	0
1990	0	0	0
1991	0	0	0
1992	0	0	0
1993	0	0	0
1994	0	0	0
1995	1	0	0
1996	0	2	1
1997	0	0	1
1998	2	1	1
1999	1	1	2
2000	0	0	7
2001	1	0	1
2002	3	0	2
2003	3	0	2
2004	7	0	6
2005	5	0	7
2006	5	2	6
2007	3	0	3
2008	14	0	4
2009	11	0	9
2010	3	0	8
2011	7	0	9
2012	6	0	15
2013	2	2	13
2014	2	2	24
2015	6	0	14
2016	1	2	22

2017	5	0	21
2018	8	1	19
2019	0	2	20
2020	2	0	17
2021	6	2	30
2022 2023(6 月まで)	1 4	1 4	40 23

［表 12：五紙合計　記事数推移］

年	「自尊感情」 記事数	「自己効力感」 記事数	「自己肯定感」 記事数
1993	1	0	2
1994	1	0	0
1995	2	0	1
1996	2	2	3
1997	3	1	4
1998	15	2	4
1999	13	2	15
2000	19	1	22
2001	18	0	22
2002	19	1	16
2003	27	0	12
2004	19	1	28
2005	29	1	25
2006	36	2	42
2007	34	1	40
2008	51	0	52
2009	54	2	51
2010	42	0	61
2011	36	2	63
2012	50	4	90
2013	47	4	108
2014	52	7	151
2015	48	5	140
2016	36	5	174
2017	53	7	214
2018	35	4	223
2019	37	10	299
2020	21	9	219
2021	34	18	286
2022 2023(6 月まで)	22 18	15 11	336 175

[表 15：全国紙五紙における「事件＋自己肯定感」　記事一覧]

掲載年月日(新聞社)	見出し	発言者
1999/2/16(朝日)	人殺し　大人はもっと厳しい問いを　久田恵（チャンネルＴＶ）	当事者以外(ノンフィクション作家)
2000/2/8(産経)	【プリズム検証】新潟少女監禁・京都小２殺害　息子暴走　母は無力だった	当事者以外(社会評論家,芹沢俊介氏)
2000/5/25(朝日)	さんさんネット　ふくおか　／福岡	当事者以外(藤森研・論説委員（教育担当）)
2000/6/1(朝日)	イラムカ多い？埼玉っ子　小中高生３０００人アンケート　／埼玉	その他(アンケート結果/記者まとめ)
2000/6/24(朝日)	自分を他者を、肯定しよう　藤森研（観測点論説記者の目）	当事者以外(藤森研・論説委員（教育担当）)
2000/11/27(朝日)	細見潤さん（話して！みやざきキーパーソン）　／宮崎	当事者以外(細見潤,県精神保健福祉センター所長)
2001/1/5(読売)	［潮流］「生と死の教育」試行錯誤　いのちの尊さ考える（解説）	当事者以外(解説部,井上憲司さん)
2001/1/13(毎日)	「高校間の競争で生徒にストレス」　岡山のバット殴打事件で報告－－全教教研集会	当事者以外(岡山高教組)
2001/3/17(読売)	［こども発ニッポン］第２部・街へ出かけて（３）高校生の恋愛事情（連載）	当事者以外(一橋大学講師,村瀬幸浩さん)
2001/8/8(毎日)	［子どもたちの声がきこえますか］小さなメッセージに耳を澄ませる社会に	当事者以外(伝聞形式,名前なし)
2001/12/26(毎日)	［本はともだち］子どもの本この１年を振り返って　ファンタジーぞくぞく	その他(記者,地の文)
2002/10/8/(朝日)	少年集団暴行、２人に不定期刑求刑　「ゲーム感覚で執拗」　／新潟	当事者以外(被告人の弁護士)
2003/7/22(読売)	［論陣・論客］どう防ぐ少年犯罪　藤井誠二氏ＶＳ芹沢俊介氏＝見開き	当事者以外(評論家,芹沢俊介さん)

2004/1/11(読売)	［社説］決断の年　教育のグランドデザイン描け　基本法改正の時だ	その他(記者,地の文)
2004/6/6(産経)	小６同級生殺害　「子ども家庭教育フォーラム」代表・富田富士也氏に聞く	当事者以外(「子ども家庭教育フォーラム」代表,富田富士也氏)
2004/7/9(毎日)	［特集ＷＯＲＬＤ］言葉が凶器化する時代　子供の「伝え合う力」どう育てるか	当事者以外(京都府立大学,築山崇教授)
2004/8/28(読売)	佐世保の教訓　“荒れた学級”が遠因　女児殺害で教委報告（解説）	その他(記者,地の文)
2005/7/18(産経)	民間団体「心の中」調査　小学生５割「いつかキレるかも」　「疲れる」小中生７割	当事者以外(民間の教育研究団体「麻布台学校教育研究所」)
2005/7/18(産経)	「自分嫌い」な子供たち　中学生の半数以上心の意識調査	当事者以外(民間の教育研究団体「麻布台学校教育研究所」)
2005/10/15(日経)	連続リンチ殺人控訴審判決、元少年３被告に死刑――判決の言い渡し、立ちつくす被告。	当事者以外(斎藤義房弁護士)
2006/2/7(読売)	［教育ルネサンス］深める・伝え合う力（１）まず「大切な自分」知る（連載）	当事者以外(高塚人志さん,（元鳥取県立赤碕高校教諭）)
2006/2/19(毎日)	滋賀・長浜の園児刺殺：国際結婚、コミュニケーションの壁、強いストレス…識者に聞く	当事者以外(国人の母親交流会などの支援活動をしている「とよなか国際交流協会」,榎井縁事業課長)
2006/4/12(読売)	［論点］少年法改正案　人間関係紡げる環境必要　福田雅章（寄稿）	当事者以外(山梨学院大法科大学院教授,福田雅章さん)

2007/10/2(読売)	「命は大切」死の教育から　元兵庫県教育次長・近藤靖宏さん７０	当事者以外(元兵庫県教育次長,近藤靖宏さん)

[表 16：全国紙五紙における「発達障害＋自己肯定感」　記事一覧]

掲載年月日(新聞社)	見出し	発言者
2008/3/4(毎日)	学校は変わったか：特別支援教育の１年／上　発達障害、積極指導	当事者以外(大潟町小 特別支援教育コーディネーター,大野教諭)
2008/4/3(朝日)	「自己肯定感」を遊びで育み１年　発達障害の子と１対１　西東京の相談室　／東京都	その他(記者,地の文)
2008/5/23(読売)	［教育ルネサンス］特別支援（４）違い認めて伝える工夫（連載）	その他(記者,地の文)
2008/5/31(読売)	［教育ルネサンス］特別支援（１０）読者の声　「理解されない」嘆き（連載）	当事者以外(「ＬＤ親の会けやき」副会長,新堀和子さん)
2008/7/17(読売)	［第５７回読売教育賞から］（２）児童生徒指導（連載）	当事者以外(賀県長浜市立西中学校　特別支援教育担当　澤（さわ）豊治教諭)
2008/11/12(朝日)	発達障害、もっと理解を　悩み持つ若者ら勉強会　浜田で月１回　／島根県	当事者以外(島根県西部発達障害者支援センター「ウインド」)
2008/12/1(朝日)	舞台、全員にライト　障害者の演劇集団「中村一座」　７作目、成長ぶり披露　／岐阜県	当事者(障害者の演劇集団「中村一座」の座長)
2009/2/4(毎日)	自立支援フォーラム：不登校や問題行動　自己肯定感育てよう－－和歌山　／和歌山	当事者以外(新潟大教育学部,長澤正樹准教授)
2009/5/14(朝日)	発達障害理解へ県がパンフ作成　／広島県	当事者以外(西村浩二・県発達障害者支援センター長)

2009/9/27(朝日)	「嫌だ」の裏に願いあるね　自閉症児育む教育、講演会で体験談　／群馬県	当事者以外(東京都立しいの木特別支援学校の佐藤比呂二教諭)
2011/2/17(毎日)	特集ワイド：ご存じですか？　２０～３０代で受診増「大人の発達障害」	当事者(大人の発達障害を抱える当事者の会「イイトコサガシ」,冠地情さん)
2011/6/10(毎日)	新教育の森：佐賀・太良高校の特別枠　不登校や発達障害者ら受け入れ　／福岡	当事者以外(県立太良高校,白水敏光校長)
2012/1/5(読売)	発達障害の生きにくさ　読み書き困難で自己否定　できる部分伸ばし肯定感	当事者以外(国立特別支援教育総合研究所総括研究員,笹森洋樹さん)
2012/1/10(産経)	増える大人の発達障害　仕事に支障、ひきこもりも	当事者(発達障害者同士の自助グループ「イイトコサガシ」の冠地情さん(自らもＡＤＨＤとＡＳの混合型)
2012/1/21(産経)	【解答乱麻】ＴＯＳＳ代表・向山洋一　全国に広がる新型学級崩壊	当事者以外(ＴＯＳＳ代表,向山洋一さん)
2012/4/21(読売)	［教育ルネサンス］発達障害と大学（６）支援側に回って自信（連載）	当事者以外(南山大学瀬戸キャンパス 保健室室長 精神科医,早川徳香・専任講師)
2012/4/24(朝日)	保護者や子の本音反映・多様な個性を受け止め　阿部知事が描く教育改革　／長野県	当事者以外(阿部守一知事)
2012/8/31(毎日)	ＡＤＨＤ：褒めて改善、夏期治療　米国の行動療法を導入－－県立大出雲キャンパス　／島根	その他(記者,地の文(伝聞))

2012/9/15(読売)	「ＬＤは僕のＩＤ　字が読めないことで見えてくる風景」南雲明彦著	当事者(LD(学習障害)当事者 南雲明彦さん)
2012/9/16(毎日)	障害児支援施設：「ワンピース」生駒に開所　障害児に自己肯定感を、療育と個別学習に特色　／奈良	当事者以外(障害児への個別学習支援や集団活動などを行う施設「ワンピース」,代表者の石田慶子さん)
2012/9/18(産経)	「できる」体験重ねて　子供一人一人に合った支援を	その他(記者,地の文)
2012/9/27(読売)	［大人の発達障害］（中）「イイトコ」褒め合い　自信に（連載）	その他(記者,地の文)
2012/10/5(読売)	［ひと紀行］発達支援　切れ目なく　塩尻市「元気っ子応援事業」＝長野	当事者以外(長野県塩尻市教育委員会家庭支援室の保健師,永原敏美さん)

［表 17：全国紙五紙における「特別支援教育 or 特別支援学校 or 特別支援学級＋自己肯定感」　記事一覧］

掲載年月日(新聞社)	見出し	発言者
2007/2/7(毎日)	発達障害児：教育に光、親の会「支援員配置を」　文科省新施策、高まる期待　／秋田	その他(記者,地の文)
2008/3/4(毎日)	学校は変わったか：特別支援教育の１年／上　発達障害、積極指導	当事者以外(大潟町小 特別支援教育コーディネーター,大野教諭)
2008/5/23(読売)	［教育ルネサンス］特別支援（４）　違い認めて伝える工夫（連載）	その他(記者,地の文)
2008/5/31(読売)	［教育ルネサンス］特別支援（１０）　読者の声　「理解されない」嘆き（連載）	当事者以外(「ＬＤ親の会けやき」副会長,新堀和子さん)

2008/7/17(読売)	［第５７回読売教育賞から］（２）児童生徒指導（連載）	当事者以外(賀県長浜市立西中学校　特別支援教育担当　澤（さわ）豊治教諭)
2009/2/4(毎日)	自立支援フォーラム：不登校や問題行動　自己肯定感育てよう－－和歌山　／和歌山	当事者以外(新潟大教育学部,長澤正樹准教授)
2009/9/27(朝日)	「嫌だ」の裏に願いあるね　自閉症児育む教育、講演会で体験談　／群馬県	当事者以外(東京都立しいの木特別支援学校の佐藤比呂二教諭)
2011/10/1(読売)	［深層追跡］七生養護学校訴訟、最高裁へ　障害者の性教育、議論を＝多摩	その他(記者,地の文)
2011/11/22(毎日)	現場から記者リポート：特別支援の生徒急増　全日制高と“共学”　／滋賀	当事者以外(長浜養護学校,前田聡子教諭)
2012/1/5(読売)	発達障害の生きにくさ　読み書き困難で自己否定　できる部分伸ばし肯定感	当事者以外(国立特別支援教育総合研究所総括研究員,笹森洋樹さん)
2012/9/16(毎日)	障害児支援施設：「ワンピース」生駒に開所　障害児に自己肯定感を、療育と個別学習に特色　／奈良	当事者以外(障害児への個別学習支援や集団活動などを行う施設「ワンピース」,代表者の石田慶子さん)
2012/12/22(読売)	近隣支援学級で生活指導　羽村特別支援学校　就活への道　手助け＝多摩	その他(記者,地の文)

[表 18：全国紙五紙における「施設＋自己肯定感」　記事一覧]

日付・新聞社	見出し	施設の文脈	発言者
2013/3/5(朝日)	（きょういくトーク埼玉）褒める時、具体的に　県里親会・日野理事長に聞く　／埼玉県	児童養護施設	当事者以外(埼玉県里親会の日野慶次郎理事長)

2013/3/24 (朝日)	「子どもを守るシェルターを」夜回り先生が講演　和歌山　／和歌山県	児童養護施設	当事者以外(「夜回り先生」として知られる元高校教諭の水谷修さん)
2013/3/27 (読売)	心の傷　メークで癒やす　保護施設の女性に美容支援　ヘアカットモデルにも	婦人保護施設・更生保護施設	その他(記者,地の文)
2013/7/9(日経)	里子すくすく「大家族の家」――虐待・親が病気・経済的理由…、ケア必要な子増加。	児童養護施設	当事者以外(厚労省)
2013/8/4(毎日)	みんな夢中：「南勢地区傾聴ネットワーク　みんなの輪」の古橋清子さん　／三重	介護施設など	当事者以外(「南勢地区傾聴ネットワーク　みんなの輪」,古橋清子さん)
2013/9/18 (毎日)	漂流する１０代：／上　広島遺棄、容疑の少女　いつも独りぼっち　「家庭、どんなん？」憧れ	自立援助のための施設	その他(記者,地の文)
2013/10/7 (産経)	【助けて下さい－子供性被害の現場から】（下）精神病んでいく児童	養護施設	当事者以外(親子関係がこじれたりして居場所を失った子供たちの緊急避難所「カリヨン子どもセンター」理事長で弁護士の坪井節子さん
2013/10/11 (読売)	［子ども］屋内型の遊戯施設が人気　着替え持参、そばで見守る	屋内型遊戯施設	当事者以外(聖徳大学准教授（児童文化）,神谷明宏さん)
2013/10/22 (朝日)	（はぐくむ）若者の自立　学校と支援施設の連携を　青砥恭　／埼玉県	若者就労支援施設(厚生労働省)	その他(記者,地の文)
2013/10/26 (毎日)	新教育の森：ほっかいどう　子供たちに基礎学力を　市民グループ「カコタム」、札幌で教室　大学生、社会人が学習支援　／北海道	児童養護施設	当事者以外(児童養護施設のボランティア,北海道大大学院生の星野朱音さん)

2013/10/29 (毎日)	母子保健奨励賞：加須の保育士、木村弘美さん受賞　母親の子育て支援、仲間として一緒に／埼玉	子育て支援施設	その他(記者,地の文(伝聞))
2013/11/30 (読売)	［若年性認知症・現場から考える］（下）小物作りイベントで販売（連載）＝青森	若年性認知症専門通所施設	その他(記者,地の文)
2013/12/14 (読売)	里親制度普及へ官民ＰＲ　登録家庭増加目指し研修、討論会＝和歌山	児童養護施設	当事者以外(厚生労働省)
2014/1/31 (読売)	医療功労賞に２人＝富山	子どもの発達支援の施設	当事者以外(高岡市きずな子ども発達支援センター（高岡市）,行枝貴子所長)
2014/2/5(朝日)	（単刀直入）県助産師会会長・小島由美さん　産後の母親ケア、課題は　／山梨県	産後入院施設	当事者(山梨県助産師会会長・小島由美さん)
2014/2/15 (朝日)	（土曜テラス）「解けた」将来への糧に　数学者・瀬山士郎さん　／群馬県	少年施設	当事者以外(数学者・瀬山士郎さん)
2014/3/7(日経)	子供たち、演劇や音楽で思い表現――先生は芸術家、思いやりの気持ち育む、いじめなど克服に期待（学ぶ）	文化施設	その他(記者,地の文)
2014/3/14 (朝日)	「自分らしく」障害者の性　施設職員・養護教諭ら「ゆいの会」　／福井県	障害者施設	当事者以外(障害児・者の性を考える「ゆいの会」代表の東みすゑさん)
2014/3/21 (朝日)	（養護施設の子ども、自立への壁：上）ほしいのは、自分でおれる場所	児童養護施設	当事者(安田和喜さん,父親からの虐待で、中３から都内の児童養護施設で暮らした＋現在は施設を出た人の相談を受ける)
2014/4/13 (日経)	ワンコインの居場所、心育む――「学びたい」子供に伴走（結び人）	公的施設	その他(記者,地の文)

2014/4/22 (産経)	障害児の学童保育所「放課後等デイサービス」　株式会社も参入、選択肢拡大	障害のある子どもが通える施設	その他(記者,地の文)
2014/5/13 (朝日)	（教育２０１４）普通科高も職業学ぶ　県立茨城東高、キャリアカリキュラム　／茨城県	その他(設備的な意味合い)	当事者以外(筑波大学の藤田晃之教授（キャリア教育）)
2014/6/6(朝日)	（医療・介護最前線）川崎ダルク　脱・薬物依存、支えて１０年　／神奈川県	薬物依存に苦しむ人たちの回復を支える施設	当事者以外(薬物依存に苦しむ人たちの回復を支える施設で、ＮＰＯ法人「川崎ダルク支援会」の近藤伸夫さん（３８))
2014/10/8 (日経)	お笑い集団ＮＡＭＡＲＡ代表江口歩氏――「こわれ者」は社会の財産、自己肯定で社会活性化（はばたく新潟時の人）	介護施設	当事者以外(お笑い集団ＮＡＭＡＲＡ代表,江口歩さん)
2014/10/17 (毎日)	問題行動調査：荒れる小学校　貧困からストレス　過度な指導は「体罰」、先生も遠慮	問題行動を起こした生徒を受け入れるための施設	当事者以外(元小学校教員の増田修治・白梅学園大教授（臨床教育学）)
2014/10/17 (毎日)	問題行動調査：小中高の暴力、大阪府ワースト　荒れる子、感情抑制が苦手　「別室指導は疎外感」懸念も	問題行動を起こした生徒を受け入れるための施設	当事者以外(元小学校教員の増田修治・白梅学園大教授（臨床教育学）)
2014/10/17 (毎日)	問題行動調査：反抗・暴言、荒れる児童　社会のひずみ、ストレスに	問題行動を起こした生徒を受け入れるための施設	当事者以外(元小学校教員の増田修治・白梅学園大教授（臨床教育学）)
2014/11/19 (読売)	［ほのぼの＠タウン］１１月１９日＝神奈川	児童養護施設	当事者以外(県立田奈高校,金沢信之教諭)
2015/1/8(読売)	［医療ルネサンス］回復力（４）自分を受け入れ前へ進む（連載）	児童福祉施設	その他(記者,地の文(伝聞))

2015/1/18 (朝日)	グローブ１５１号<いまを読む>子どもの貧困対策は社会への投資、具体的な経済支援を　阿部彩	児童養護施設・公的施設	当事者以外(国立社会保障・人口問題研究所　社会保障応用分析研究部部長,阿部彩さん)
2015/2/21 (毎日)	遊ナビ：美術　／東京	児童養護施設	その他(記者,地の文)
2015/3/25 (毎日)	友達ロボット：発達障害児に名大など共同実験	発達障害児の学習・交流施設	当事者以外(名古屋大や名古屋工業大、中京大などのチーム)
2015/3/31 (産経)	発達障害をロボットで支援　世話させ自己肯定感高める	発達障害児の学習・交流施設	当事者以外(名古屋大や名古屋工業大、中京大などのチーム)
2015/5/30 (毎日)	追跡２０１５：虐待を超えて生きる　見守られ自立模索　／愛知	児童養護施設	その他(記者,地の文)
2015/6/10 (毎日)	フリースクール法案：不登校対策に光明　多様な教育の場、保障へ　／石川	不登校の子どもを受け入れる施設(フリースクール)	当事者以外(白山市別宮町のフリースクール、「ワンネススクール」の中村広太郎さん)
2015/8/18 (読売)	養護施設の子ら　地域が親代わり　「社会的共同親」　退所前後を支援	児童養護施設	当事者以外(京都市の児童養護施設「迦陵園」の施設長,松浦弘和さん)
2015/8/26 (産経)	０～２歳児の養育里親求む　大阪府が増加策　１カ月で応募８件	児童養護施設	当事者以外(厚生労働省)
2015/9/27 (朝日)	捨て犬しつけ、目指す更生　八街少年院が独自プログラム　／千葉県	更生施設	当事者以外(八街少年院の法務教官,山下嘉一さん)
2015/9/30 (毎日)	見聞録@：知的・発達障害抱える子ども　支援学校・施設、利用増える　／岡山	療育施設(知的障害や発達障害を抱える子どものための施設)	その他(記者,地の文(伝聞))

2016/1/10 (読売)	退院後の子　勉強サポート　ボランティア学生ら協力　大阪の病院	難病の子ども向け施設	当事者以外(大阪教育大,平賀健太郎准教授)
2016/1/22 (朝日)	子ども守る避難所「るーも」が２年　のべ２９人を支援　自立の受け皿足りず／和歌山県	児童養護施設	当事者以外(虐待や育児放棄などにより居場所をなくした子どもが一時的に難を逃れる「子どもシェルターるーも」を運営するＮＰＯの理事,伊藤あすみ弁護士)
2016/2/18 (朝日)	（学びを語る）養護施設の子　自立へ、親代わりの見守り必要　小林英義さん	児童養護施設	当事者以外(東洋大学ライフデザイン学部教授・小林英義)
2016/4/6(朝日)	堺市里親会、里親同士がつながる場１０年　「迷っているならやってみて」　／大阪府	児童養護施設	当事者以外(里親を支援する社会福祉士の脇田仁美さん)
2016/5/2(読売)	実家気分「食堂」で交流　新潟・東区にオープン　ＮＰＯが運営＝新潟	児童養護施設	その他(記者,地の文)
2016/5/25 (読売)	［語る　聞く］仲間と築く居場所　薬物依存からの回復支援　倉田めばさん６１	薬物依存からの回復支援施設	当事者(大阪ダルクのディレクター,倉田めばさん(薬物依存の過去がある))
2016/7/27 (産経)	相模原殺傷　一方的に障害者憎悪　専門家「ゆがんだ価値観」	知的障害者施設・福祉施設	当事者以外(奈良女子大の岡本英生教授（犯罪心理学）)
2016/8/4(産経)	【産経女子特区】化粧療法　いくつになってもキレイは元気のもと	介護老人保健施設	その他(記者,地の文)
2016/8/25 (産経)	施設の子供たちにスポットライトを　「寂しさ分かる」大衆演劇のスターが協力	児童養護施設	当事者以外(児童養護施設「あおぞら」,永野良子施設長)

2016/8/27 (読売)	空中ブランコ　やればできる 養護施設の子供たち挑戦＝愛知	児童養護施設	その他(記者,地の文)
2016/8/30 (朝日)	空中の大技挑戦　名古屋で養護施設児童ら　／愛知県	児童養護施設	当事者以外(南山中学・高校男子部の教諭で児童養護施設を支援している中谷豊実さん)
2016/9/8(読売)	貧困　子どもへの影響探る　県と龍谷大　支援職員に調査＝滋賀	児童福祉施設	その他(地の文,滋賀県と龍谷大が共同で行ったアンケート結果)
2016/9/29 (朝日)	引きこもり、親子に支援の輪 全国５４万人、長期・高年齢化進む　／神奈川県	就労支援施設	当事者以外(川崎市の委託を受けたＮＰＯ法人「フリースペースたまりば」の西野博之理事長)
2016/10/12 (読売)	読書や自然体験支援強化へ　文科省　小中学生　格差解消狙い	児童養護施設	その他(独立行政法人・国立青少年教育振興機構（東京）が行った調査結果)
2016/10/14 (日経)	認知症の介護費削減――公文「学習療法」施設・自治体負担軽く（耳寄りな話）	介護施設	当事者以外(学習療法センター（東京・港）の伊藤眞治副代表)
2016/10/31 (朝日)	（子どもと貧困）困窮に疲れ、高校中退　バイト・家事・弟妹の世話…すり減る意欲	自立支援施設	当事者以外(花園大,吉永純（あつし）教授（公的扶助論）)
2016/11/5 (毎日)	教える育む学び合う：絵本作家・夢ら丘さんら　児童養護施設で読み聞かせ　／和歌山	児童養護施設	当事者以外(絵本作家,夢ら丘実果さん)
2016/11/21 (日経)	キッズコーポレーション大塚雅斗社長――個性伸ばす自由保育を徹底、幼少期に自己肯定感育てる（みちしるべ）	保育施設	当事者以外(保育サービスのキッズコーポレーション（宇都宮市）の大塚雅斗社長)

2016/12/20 (毎日)	まんぺいさんち：来月から旧岩鼻の元村長・徳江さんの自宅、障害児の憩いの場に　あすまで内覧会　／群馬	障害児の放課後等デイサービス施設	その他(記者,地の文)
2016/12/21 (朝日)	（声　どう思いますか）１１月３０日付掲載の投稿「いじめに警察の導入と厳罰化を」	矯正施設	当事者以外(中学校教員,伊東達矢さん)

[表 19：全国紙五紙における「保護＋自己肯定感」　記事一覧]

日付(新聞社)	見出し	文脈	発言者
2013/2/18 (毎日)	シンポジウム：発達障害者の就労考える　「自己肯定感持てる支援を」－－中区　／岡山	保護者	当事者以外(倉敷芸術科学大学健康管理センター,長友陽子さん)
2013/3/5 (朝日)	（きょういくトーク埼玉）褒める時、具体的に　県里親会・日野理事長に聞く　／埼玉県	子どもを保護する	当事者以外(埼玉県里親会の日野慶次郎理事長)
2013/3/6 (産経)	小学校入学準備　生活習慣を身につけるのが大事	保護者	その他(記者,地の文(伝聞))
2013/3/24 (朝日)	「子どもを守るシェルターを」　夜回り先生が講演　和歌山　／和歌山県	子どもを保護する	当事者以外(「夜回り先生」として知られる元高校教諭の水谷修さん)
2013/3/27 (読売)	心の傷　メークで癒やす　保護施設の女性に美容支援　ヘアカットモデルにも	婦人保護施設や更生保護施設	その他(記者,地の文)
2013/4/2 (朝日)	（耕論）土曜授業ふたたび　宮崎栄樹さん、若月秀夫さん、佐川光晴さん	保護者	当事者以外(里山で開く土曜学校の校長・宮崎栄樹さん)
2013/6/9 (朝日)	生きづらい若者、苦しむ現状語る雨宮処凛さん講演　／三重県	生活保護	当事者以外(若者の「生きづらさ」をテーマに文筆活動や街頭活動を繰り広げる作家,雨宮処凛さん)

2013/6/9 (朝日)	「生きづらさ、個人だけの問題ではない」　津で作家・雨宮さん講演／三重県	生活保護	当事者以外(若者の「生きづらさ」をテーマに文筆活動や街頭活動を繰り広げる作家,雨宮処凛さん)
2013/9/18 (毎日)	漂流する１０代：／上　広島遺棄、容疑の少女　いつも独りぼっち「家庭、どんなん？」憧れ	生活保護	その他(記者,地の文)
2013/10/7 (産経)	【助けて下さい－子供性被害の現場から】（下）精神病んでいく児童	養護施設	当事者以外(親子関係がこじれたりして居場所を失った子供たちの緊急避難所「カリヨン子どもセンター」理事長で弁護士の坪井節子さん
2013/10/19 (毎日)	情報プラザ：発達障害＆アートセラピー　アートで《深める》＋《理解する》コミュニケーション術　／大阪	保護者	その他(記者,地の文)
2013/12/14 (読売)	里親制度普及へ官民ＰＲ　登録家庭増加目指し研修、討論会＝和歌山	子どもを保護する	当事者以外(厚生労働省)
2013/12/28 (朝日)	いじめ、引き金と認定せず　富士見町・中３自殺調査委報告書　／長野県	保護者	その他(学校の自己評価アンケート)
2014/3/14 (朝日)	「自分らしく」障害者の性　施設職員・養護教諭ら「ゆいの会」　／福井県	保護者	当事者以外(障害児・者の性を考える「ゆいの会」代表の東みすゑさん)
2014/3/31 (朝日)	（教育２０１４　つながる学び：２）併設型の小中一貫校　英語・自然…学校の魅力／静岡県	保護者	当事者以外(石川敦久校長)
2014/4/15 (日経)	星空観察や昆虫捕り、自然ふれあう子供急増、体力低下心配、保護者が促す。	保護者	当事者以外(国立青少年教育振興機構（東京）)
2014/4/16 (毎日)	くらしＱ：メディア依存対策　親子関係見直し安心感を　／九州	保護者	その他(記者,地の文)
2014/4/22 (産経)	障害児の学童保育所「放課後等デイサービス」　株式会社も参入、選択肢拡大	障害のある子どもが通える施設	その他(記者,地の文)

2014/5/20 (毎日)	ご近所のお医者さん：／２８９　自己肯定感＝牧村智広さん　／大阪	子どもを保護する	当事者以外(マキムラクリニック院長,牧村智広さん)
2014/7/10 (朝日)	「自分に自信」の子が増加　「親は頼りになる」９割超　内閣府、小中学生調査	保護者	当事者以外(内閣府の調査担当者)
2014/7/27 (産経)	全国小中学校　防災教育・避難訓練実態調査　子供に自覚「命守る」	保護者	その他(記者,地の文(伝聞))
2014/8/19 (毎日)	わがまち・マイタウン：発達障害児の２次障害予防で講演－－戸畑　／福岡	保護者	その他(記者,地の文(伝聞))
2014/8/23 (朝日)	貧困の子に学びの場を　日本福祉大生ら学習会、社団法人目指す　【名古屋】	生活保護	その他(記者,地の文)
2014/9/11 (朝日)	（インタビュー）見えない子どもたち　作家・天童荒太さん	子どもを保護する	当事者以外(作家・天童荒太さん)
2014/9/22 (産経)	【不登校－その時、保護者は】 （１）自己肯定感　生き方、否定しないで	保護者	その他(記者,地の文)
2014/10/3 (朝日)	（耕論）少年事件を考える　高岡健さん、井垣康弘さん	子どもを保護する	当事者以外(元裁判官・弁護士,井垣康弘さん)
2014/10/3 (毎日)	２１世紀ｄｏｔａｎｋ発：親も育つ子育て　／山梨	保護者	当事者以外(国の基本指針)
2014/12/4 (毎日)	わたしの争点：２０１４衆院選／２進学の機会奪う貧困　親を含めた幅広い支援を	生活保護	当事者以外(日本福祉大（本部・同県美浜町）の学生団体「アンビシャス・ネットワーク」,メンバーの田中嵩久（たかひさ）さん)
2014/12/8 (朝日)	（この人に聞く）越前市子ども福祉課・参事、笹田和子さん　／福井県	保護者	当事者以外(越前市子ども福祉課・参事,笹田和子さん)

2014/12/13 (朝日)	（見えない壁を越えて　子どもとスポーツ第１０部：下）奨学金、プロの夢を後押し	生活保護・保護者	当事者以外(貧困の実態調査をしている大阪子どもの貧困アクショングループの徳丸ゆき子代表)
2015/1/8 (毎日)	輝け、いばらきの花：雇用機会均等法３０年／７止　ＤＶ相談支援団体居場所求め駆け込み　／茨城	DV を受けた女性の保護	当事者以外(ＤＶ被害者を支援するＮＰＯ法人「らいず」,三富和代代表)
2015/1/15 (朝日)	（上と下　格差のいま：６）「子どもの貧困」著者・阿部彩さんに聞く／東京都	生活保護	当事者以外(国立社会保障・人口問題研究所　社会保障応用分析研究部部長,阿部彩さん)
2015/1/18 (朝日)	グローブ１５１号＜いまを読む＞子どもの貧困対策は社会への投資、具体的な経済支援を　阿部彩	生活保護	当事者以外(国立社会保障・人口問題研究所　社会保障応用分析研究部部長,阿部彩さん)
2015/1/24 (朝日)	（きょういく埼玉）「なんとなく中退」防ごう　高校生を支える試み広がる　／埼玉県	保護者	当事者以外(新座高校の藤本成校長)
2015/1/31 (毎日)	足立区：２３区初「子供貧困対策担当」　専門部署　／東京	生活保護・保護者	当事者以外(足立区,近藤弥生区長)
2015/2/12 (日経)	格差を考える（下）阿部彩国立社会保障・人口問題研究所社会保障応用分析研究部長――対立避け社会の連帯を（経済教室）	生活保護	その他(記者,地の文)
2015/2/18 (読売)	全児童・生徒に「心の調査」　佐世保市教委、高１殺害を反省　新年度から＝長崎	保護者	その他(記者,地の文)
2015/2/22 (朝日)	携帯・スマホ、低年齢化　小学生４割所有　県教委調査　／三重県	保護者	その他(記者,地の文)
2015/2/23 (朝日)	携帯・スマホ利用若年化、県教委調査　小学生、４割が所有　半数がネット接続／三重県	保護者	その他(記者,地の文)
2015/2/27 (毎日)	くらしナビ・ライフスタイル：２分の１成人式、より盛大に	保護者	その他(記者,地の文(伝聞))

2015/3/5 (朝日)	不登校対策にリーフレット　県教委作成へ　／和歌山県	保護者	当事者以外(県教委学校指導課)
2015/3/18 (産経)	発達に課題のある子供の塾　小学校入学に備え社会性育む	保護者	当事者以外(発達に課題のある未就学児から高校生までを対象とする「リーフ」の教室長,川崎翔太郎さん)
2015/5/21 (読売)	更生に社会貢献５日間　公園清掃　高齢者介護補助　除雪　来月から義務化	保護観察対象者・改正更生保護法	その他(記者,地の文)
2015/6/19 (毎日)	ウォッチ三重：養護必要な子ども５０３人　「里親登録」県が促進　ミニ説明会を随時開催予定「制度や意義に理解を」　／三重	保護者	当事者以外(三重県)
2015/7/4 (毎日)	子どもの発達障害：「理解を」冊子作製	保護者	その他(記者,地の文(伝聞))
2015/7/14 (毎日)	わがまち・マイタウン：命の大切さ　看護師が講演　戸畑　／福岡	保護者	当事者以外(誕生学協会九州・沖縄支部,大江田由美支部長)
2015/9/1 (朝日)	小学生は０．５３％　中学生３．２１％　県内の不登校、文科省昨年度分調査／和歌山県	保護者	当事者以外(教育法学が専門の早稲田大・喜多明人教授)
2015/9/30 (毎日)	見聞録@：知的・発達障害抱える子ども　支援学校・施設、利用増える／岡山	保護者	その他(記者,地の文(伝聞))
2015/10/8 (朝日)	組み体操、揺れる現場　事故多発、安全確保に課題　高さ制限・中止の学校も　【大阪】	保護者	当事者以外(兵庫県伊丹市立の中学校の吉野義郎教諭)
2015/11/2 (朝日)	（フォーラム）子どもの貧困：２　みんなの考え	子どもを保護する	当事者以外(新聞読者の 50 代女性)
2015/12/9 (読売)	障害児　放課後の居場所　「デイサービス」３年で２．６倍＝神奈川	保護者	当事者以外(横浜市都筑区「レインボースマイル」代表,柳川弘美さん)

2015/12/11 (日経)	リタリコ、発達障害の児童向け教室、個別指導で長所伸ばす、悩む親に新たな受け皿。	保護者	当事者以外(障害者向け就労支援を手がけるＬＩＴＡＬＩＣＯ（リタリコ、東京・目黒）の指導員)
2015/12/20 (毎日)	いつもそばで：田奈高校の挑戦／下 進路支援　助けを待っている　／神奈川	生活保護	その他(記者,地の文)
2016/2/10 (産経)	いじめ許さない学校風土に　傍観者の行動変える教育	保護者	その他(記者,地の文(伝聞))
2016/3/10 (朝日)	（春よ　ＬＧＢＴのいま：５）学校・家庭で考える　性の多様性、学ぶ機会を／和歌山県	保護者	当事者(福祉関係の仕事に就くゲイの津村雅稔（まさとし）さん)
2016/3/14 (毎日)	くらしナビ・子育て・親子：習い事、楽しんで長続き	保護者	当事者以外(千葉敬愛短期大学,明石要一学長)
2016/3/20 (朝日)	子どもの居場所、担う役割　貧困連鎖防ぐ学習支援事業	生活保護	当事者以外(「さいたまユースサポートネット」の青砥恭代表)
2016/3/24 (朝日)	自分好きな子、４年前より増加　昨夏の県アンケート　／三重県	保護者	当事者以外(三重県担当者)
2016/4/23 (朝日)	虫歯数や朝食抜き、生活困難の子多く　足立区、実態調査の結果　／東京都	保護者	その他(記者,地の文)
2016/5/3 (日経)	生活習慣良好な小中高生、スマホ熱中度低く、青少年機構。	保護者	その他(地の文,国立青少年教育振興機構（東京）の調査結果)
2016/5/10 (産経)	足立区立小の１年生児童、４人に１人「生活困難世帯」　風疹など未接種、朝食抜き…健康への影響懸念	保護者	その他(記者,地の文)
2016/5/16 (朝日)	（「夜」の女性　支える：下）昼の仕事へ、橋渡し　実習の場を提供、履歴書補う	生活保護	当事者(デリヘルで働く女性)

2016/6/24 (日経)	発達障がいファミリーサポートＭａｒｂｌｅ、国沢代表理事に聞く――学校と家庭、連携大切（学ぶ）	保護者	当事者以外(支援団体「発達障がいファミリーサポートＭａｒｂｌｅ」代表理事,国沢真弓さん)
2016/8/25 (読売)	家族と食事　児童に好影響　福岡女子大教授ら調査＝福岡	保護者	その他(記者,地の文)
2016/9/2 (朝日)	学校行けない子に居場所　「小山フリースクール」きょう開校　／栃木県	保護者	当事者以外(「小山フリースクールおるたの家」代表で唯一のスタッフの稲葉祐一朗さん)
2016/9/8 (読売)	通知表に「市民性」　春日市教委　市立全１８小中学校で＝福岡	保護者	その他(記者,地の文)
2016/9/8 (読売)	貧困　子どもへの影響探る　県と龍谷大　支援職員に調査＝滋賀	保護者	その他(地の文,滋賀県と龍谷大が共同で行ったアンケート結果)
2016/10/31 (朝日)	（子どもと貧困）中退防止へ、支援手探り　【大阪】	生活保護	当事者以外(花園大の吉永純（あつし）教授)
2016/10/31 (朝日)	（子どもと貧困）困窮に疲れ、高校中退　バイト・家事・弟妹の世話…すり減る意欲	生活保護	当事者以外(花園大の吉永純（あつし）教授)
2016/11/4 (朝日)	「通級指導」先生足りない　発達障害の子の別室指導、拡充求める声	保護者	当事者(発達障害の子を持つ母親)
2016/11/4 (日経)	「個性派」学校、親心捉える――授業、実体験ふんだんに、「自ら学ぶ力、身に付けて」（学ぶ）	保護者	当事者以外(大東文化大,上野正道教授（教育学）)
2016/11/7 (朝日)	（フォーラム）「見えない」女性たち　非正規・シングル・中年	生活保護	当事者(福岡市を拠点に働く女性の相談に乗る「自律・自立支援倶楽部」のメンバーで自身も非正規で働く成瀬穫美（えみ）さん)

2016/11/11 (朝日)	パン食べて、子ども守れ　虐待防止へ、売り上げ一部寄付　／和歌山県	保護者	当事者以外(いじめや暴力、性被害について学ぶワークショップなどを続けている市民グループ「ハッピーママライフ（ハミル）」)
2016/11/15 (朝日	小・中学生「ほめて伸ばそう」　県教委が保護者向け動画　／静岡県	保護者	その他(記者,地の文)
2016/12/30 (朝日)	「なぜ自ら命を」向き合い　東尋坊で保護された人と同居、保健師になった２９歳【大阪】	保護する/生活保護	当事者以外(自殺をしようとした人たちと暮らし、その問いと向き合ってきた小野寺萌さん)

［表 22：全国紙五紙における「女性＋男性＋自己肯定感」　記事一覧］

日付・新聞社	見出し	文脈	比率	発言者
2017/1/16 (産経)	【ＷＯＭＥＮ】経営・管理に「男女の違い」考慮　女性の特性知り育成を	女性の働き方について 女性の社会進出について	女性中心	当事者(「女性社員を育成するためのマネジメント研修」講師の２１世紀職業財団,大野任美さん)
2017/2/3 (産経)	永田カビさん実録漫画　居場所内苦悩、率直に綴る	女性の生き方について	女性中心	その他(記者,地の文)
2017/3/8 (朝日)	（Ｄｅａｒ　Ｇｉｒｌｓ）黒柳徹子さん、春名風花さんインタビュー	インタビュー(男らしさ、女らしさへの疑問?)	女性中心	当事者(女優,タレント,黒柳徹子さん)
2017/5/15 (朝日)	（フォーラム）性的少数者の授業	教育(多様な性について)	半々	その他(記者,地の文(伝聞))
2017/6/9 (毎日)	特集ワイド：「親に疲れた症候群」って？	親との関わりについて	半々	当事者以外(老年精神医学を専門とする和田秀樹さん)

2017/8/7 (産経)	【ＷＯＭＥＮ】少女たちの居場所を作る　虐待、ＤＶ、いじめから支援	貧困や虐待、いじめなどに苦しむ女性について	女性中心	当事者以外(川美里・京都府更生保護女性連盟事務局長)
2017/9/7 (産経)	ひきこもりを語り合う「女子会」　苦しさ共感、社会への一歩	引きこもりの女性について	女性中心	その他(記者,地の文)
2017/09/23 (読売)	［人生案内］失恋後、恋愛求める自分が惨め	恋愛について	女性中心	当事者以外(大学教授,大日向雅美さん)
2017/10/7 (朝日)	（Ｄｅａｒ　Ｇｉｒｌｓ）朝日新聞×雑誌「ニコラ」アンケート：下　見た目、言われたくない	外見や性的トラブルについて	女性中心	その他(記者,地の文)
2018/1/12 (読売)	［解説スペシャル］女性刑務所　増える高齢者　孤独　居場所求め犯す罪	女性受刑者について	女性中心	当事者以外(刑務所に勤務する社会福祉士)
2018/2/23 (朝日)	（声）耐える育児、批判されるべきは	子育ての現状	女性中心	当事者(高校講師　太田標(こずえ)さん)
2018/6/2 (朝日)	性的少数者カップル、４２組認定　札幌市、パートナーシップ宣誓制度　／北海道	パートナーシップ制度について	半々	当事者以外(鈴木賢・明大教授)
2018/7/17 (日経)	きょうのお題は、罪悪感抑える家事ノート――生活コラムニストももせいづみ、できたことを褒めよう（時短家事）	女性の家事・育児について	女性中心	その他(生活コラムニスト,地の文(伝聞))
2018/7/28 (朝日)	（ｂｅ　ｒｅｐｏｒｔ）性的少数者の終活　広がる選択肢知って、備える	性的少数者の終活	男性中心	当事者(性的少数者の高齢期を支えるＮＰＯ「パープル・ハンズ」事務局長で自らも当事者の行政書士、永易（ながやす）至文さん)
2019/1/17 (朝日)	（記者のツボ）タイトルは変えたけど…　危うさ感じたドラマ初回　【大阪】	女性らしさ・かわいげへの疑問	女性中心	その他(記者,地の文)

2019/1/28 (読売)	［フォーカス！！］女性の発達障害（上）診断で軽くなった心（連載）	発達障害について	女性中心	当事者以外(発達障害のある人を支援している福岡市の臨床心理士,中島美鈴さん)
2019/2/5 (朝日)	《朝日新聞デジタル》（魂の中小企業）「性を表通りに」、ＴＥＮＧＡの挑戦：４そして、「革命」の担い手たち	女性らしさへの疑問	女性中心	当事者(TENGA 社員,西野芙美さん)
2019/2/6 (読売)	［ただいま活動中］性と人権ネットワークＥＳＴＯ＝秋田	性的少数者について	半々	その他(記者,地の文)
2019/3/8 (朝日)	（サヨナラしたい８つの呪縛：７）年齢や容姿、「自虐」で予防線	女性らしさへの疑問	女性中心	その他(記者,地の文)
2019/3/22 (朝日)	《朝日新聞デジタル》（漫画偏愛主義）誰のためのかわいい？自分を変えるとは　「カワイイ私の作り方」（六多いくみ）	エンタメ 容姿コンプレックスなど	女性中心	その他(記者,地の文)
2019/4/5 (朝日)	《朝日新聞デジタル》（漫画偏愛主義）パーフェクトな彼だけど、承認してあげるのは私なの　「ジェンダーレス男子に愛されています。」（ためこう）	エンタメ 容姿コンプレックスなど	半々	その他(記者,地の文)
2019/4/29 (朝日)	（平成×奈良：６）女性の生き方　自分らしさ、諦めない／奈良県	女性の働き方について	女性中心	当事者(「女性の未来を真ん中に」との思いを込めた会社、ウィメンズ・フューチャー・センター（ＷＦＣ）の社長,栗本恭子さん)

2019/5/24 (朝日)	《朝日新聞デジタル》（今さら聞けない世界）同性婚、実は中南米が積極的　ＬＧＢＴ問題はブラジル発	同性婚について	半々	当事者以外(海外の同性婚事情に詳しい金沢大の谷口洋幸准教授)
2019/6/12 (朝日)	（明日へのＬｅｓｓｏｎ）第２週：クエスチョン　性の多様性を考える　金沢大入試問題から	性的少数者について	男性中心	当事者以外(セクシュアリティー教育を専門とする埼玉大の渡辺大輔准教授)
2019/6/18 (朝日)	（耕論）筋肉は裏切らない？倉地美晴さん、森永卓郎さん、谷本奈穂さん	容姿(体型)コンプレックスなどについて	半々	当事者(ビキニ・アスリート,倉地美晴さん)
2019/6/21 (毎日)	記者の目：障害者の性暴力被害　国は実態把握し対策を＝上東麻子（くらし医療部）	障害を抱える女性の性被害について	女性中心	その他(記者,地の文)
2019/7/17 (朝日)	（オトナの保健室）つながりたいけど痛い　女子組	性行為(性交痛)について	女性中心	当事者(「うるおいヘルスケア」代表,小林ひろみさん)
2019/10/12 (朝日)	（フロントランナー）俳優・プラスサイズモデル、藤井美穂さん　「ありのまま」で道ひらく	容姿(体型)コンプレックスなどについて	女性中心	当事者(俳優・プラスサイズモデル,藤井美穂さん)
2019/11/13 (朝日)	（老後レス時代　エイジングニッポン：３）想定されない女性たち	女性の働き方や人生設計について	女性中心	その他(記者,地の文)
2019/12/24 (読売)	［記者ノート２０１９］ＬＧＢＴ「幸せな世に」＝埼玉	性的少数者について	FtM中心	その他(記者,地の文)
2020/3/1 (朝日)	グローブ２２７号＜ジェンダー格差＞１２１位の私たち　ジェンダー格差をどう変える？	男女格差について	女性中心	その他(記者,地の文(伝聞))
2020/3/8 (日経)	ＮＩＫＫＥＩＴｈｅＳＴＹＬＥ――ワーク・ライフバランス社長小室淑恵さん、定時に	女性の働き方について	女性中心	当事者(ワーク・ライフバ

	帰る、未来を変える（ＭｙＳｔｏｒｙ）	女性の社会進出について		ランス社長,小室淑恵さん)
2020/4/6 (日経)	管理職手前の女性、研修・啓発で対策――「自信ない症候群」克服へ（Ｗｏｍｅｎ＠Ｗｏｒｋ）	女性の働き方について 女性の社会進出について	女性中心	その他(記者,地の文)
2020/7/15 (朝日)	当事者が描く発達障害　静岡の俳優１人芝居、オンライン上演　／静岡県	発達障害について	半々	当事者(静岡市在住の俳優関根淳子さん(関根さんはアスペルガー症候群の診断を受けた発達障害の当事者))
2020/12/2 (日経)	２０２０年ヒット商品番付一巣ごもりで自分磨き、おうち時間大切に。	自分磨き(≒容姿)について	男女半々	その他(記者,地の文)
2020/12/9 (朝日)	（明日へのＬｅｓｓｏｎ）第２週：メッセージ　女子サッカーＷＥリーグ「チェア」・岡島喜久子さん×朝日新聞ＤＩＡＬＯＧ	女性の社会進出 女性らしさへの疑問	女性中心	当事者(女子サッカーＷＥリーグ「チェア」,岡島喜久子さん , 女性が一歩踏み出せる社会作りに取り組む二宮理沙子さん)
2021/1/13 (朝日)	（論の芽）「ありのままの姿」って　藤嶋陽子さん、眞子桂子さん、金敬哲さん	容姿コンプレックスについて	半々	その他(記者,地の文)
2021/3/7 (朝日)	（フォーラム）見えない女性たち	女性の働き方について	半々	当事者(内閣府の研究会に参加する大崎麻子さん)
2021/3/16 (毎日)	同性婚訴訟：同性婚訴訟あす判決　誰もが自分らしい社会に　当事者でもある加藤弁護士　／北海道	性的少数者について	半々	その他(記者,地の文(伝聞))

2021/4/8 (読売)	［取材帳］女性刑務所（７）受刑者と向き合う人たち	女性受刑者について	女性中心	当事者以外(栃木刑務所,矯正医官)
2021/4/13 (朝日)	（インタビュー）生きるのをやめたい国　ＮＰＯ法人自殺対策支援センターライフリンク代表・清水康之さん	若者・女性の自殺について	女性中心	当事者以外(ＮＰＯ法人ライフリンク代表,清水康之さん)
2021/5/2 (読売)	「許すな　わいせつ教員」反響２８０件　「私も被害」続く苦しみ	性被害について	半々	その他(新聞読者,50 代女性(伝聞))
2021/6/7 (日経)	アジア開発銀行駐日代表児玉治美――リーダー目指さぬ女性たち、自己肯定感高める教育を（ダイバーシティ進化論）	女性の働き方について 女性の社会進出について	女性中心	当事者(アジア開発銀行駐日代表,児玉治美さん)
2021/6/28 (産経)	【教育はいま】選べる制服、悩む子供救う　奈良の中学校、トイレも多様性配慮	性的少数者について	半々	当事者(ＬＧＢＴの子供や若者の支援をしている認定ＮＰＯ法人「ＲｅＢｉｔ」(東京都),小川奈津己さん)
2021/8/15 (朝日)	男女の差、家庭内から見つめる　子にたくさん選択肢を／まず愛情伝えて　記者サロン	男女格差 女性の働き方について	女性中心	当事者(社会学者,上野千鶴子さん)
2021/8/28 (読売)	［子育てノート］４歳長女　エッセイスト　犬山紙子さん	子育てについて 女性らしさへの疑問について	女性中心	当事者(エッセイスト,犬山紙子さん)
2021/10/9 (毎日)	くらしナビ・ライフスタイル：「包茎は恥」から見えるジェンダー	コンプレックスについて	男性中心	当事者以外(東京経済大,渋谷知美准教授)

2021/10/31 (朝日)	（フォーラム）「ロスジェネ女性　非正規」：１　現在そして将来	女性の働き方について	女性中心	当事者(公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会 キャリアカウンセリング担当,秋葉由美さん)
2022/1/6 (毎日)	わたしらしく～警察学校密着記：／３　指導する側も変わる時来た	警察学校に通う女性について	女性中心	当事者以外(福岡県警察学校,穴吹尚之学校長)
2022/1/18 (日経)	ジェンダー平等へ行動、岡島喜久子（スポートピア）	女性の社会進出について	女性中心	当事者(元日本女子サッカー連盟事務局長,岡島喜久子さん)
2022/2/5 (朝日)	（ひもとく）男が男を省みる加害性と疎外の複雑なねじれ杉田俊介	男らしさへの疑問 女性蔑視の要因について	男性中心	その他(記者,地の文)
2022/2/24 (日経)	特集――大学改革シンポジウム「ポストコロナの学び舎づくり」、４氏パネル討論、学生の心のケア必須。	女性の働き方について	女性中心	当事者以外(金沢工業大学,大沢敏さん)
2022/5/10 (朝日)	（「できない」女？　ＡＤＨＤ女性の生きづらさ：１）見せられない家：上	発達障害(ADHD)について	女性中心	当事者(西原三葉さん(女性であり、ADHDの当事者)
2022/7/1 (読売)	［政策分析　２２参院選］（６）女性活躍　役職・給与いまだ格差	女性の社会進出について	女性中心	当事者以外(企業の女性活躍推進を目指すＮＰＯ法人「Ｊ―Ｗｉｎ」)

2022/8/22 (朝日)	女子大とは、対話で問う　トランスジェンダー学生入学で考える	性的少数者について	女性中心	当事者(トランスジェンダーの当事者で、市民団体「Ｒａｉｎｂｏｗ Ｔｏｋｙｏ 北区」代表,時枝穂（みのり）さん)
2022/9/17 (毎日)	性的少数者：「自分らしく」歩む背押す　性的少数者の元警官、オンライン交流会　心開くと世界はやさしい	性的少数者について 女性らしさへの疑問について	FtM中心	その他(記者,地の文(伝聞))
2022/10/1 (朝日)	（ＨＵＧＳＴＡ　Ｊｏｕｒｎａｌ）夫の家事分担、「人並み」でいい？	男性の家事・育児への関わり方について	男性中心	当事者(「イクメン」の提唱者の一人で、コンサルタントの渥美由喜（なおき）さん)
2022/10/17 (毎日)	特集ワイド：不倫は峠の茶屋に似ている？　一条ゆかりさん、エッセー集が話題　心しみる「一喝」	女性の生き方・働き方について	女性中心	その他(記者,地の文)
2022/10/18 (毎日)	ジェンダー・ステレオタイプ：性差の固定観念いつから４歳から「女性は優しい」、７歳から「男性は賢い」	ジェンダー・ステレオタイプについて	半々	当事者以外(京都大学,森口佑介准教授（発達心理学）)
2022/10/18 (毎日)	ジェンダー・ステレオタイプ：性別思い込み、いつから？　「女性優しい」４歳「男性賢い」７歳　京大など調査	ジェンダーステレオタイプ	半々	当事者以外(京都大学,森口佑介准教授（発達心理学）)
2022/10/27 (日経)	性別って「グラデーション」――性差問わない選択肢を日本性同一性障害と共に生きる人々の会代表　永沼利一氏（生活）	性的少数者について	FtM中心	当事者(日本性同一性障害と共に生きる人々の会代表,

				永沼利一氏 FtM 当事者)
2022/11/1 (読売)	［人生案内］「ちょろい女」と見られたくない	男性とのトラブルについて	女性中心	当事者(相談者の女性)
2023/1/15 (読売)	ＬＧＢＴＱ教員　経験語る　悩んだ過去　クラリネットが救い＝大分	性的少数者について	MtF中心	当事者(トランスジェンダーの教員,倉堀翔さん)
2023/1/16 (朝日)	体育がスポーツ嫌い招かぬために　苦手な人の思い共有して・自己肯定感高まる授業を記者サロン	体育の授業のあり方について	半々	当事者以外(筑波大の佐藤貴弘教授)
2023/2/27 (朝日)	（共生のＳＤＧｓ　コロナの先の２０３０）１６歳で嫁がせた、母は悔やんだ	女性の働き方や人生設計について 女性の自殺率の上昇について	女性中心	その他(記者,地の文)
2023/3/26 (朝日)	「出会える」アプリ婚活拡大　２０代の２８％が利用	マッチングアプリの利用について	女性中心	当事者(時事ユーチューバー,たかまつななさん)
2023/4/4 (毎日)	くらしナビ・ライフスタイル：「子ども欲しくない」に理由いるの？　自分偽る婚活やめた３２歳女性	女性の生き方について	女性中心	当事者(毎日新聞のインターネットラジオへの相談者,会社員の女性)
2023/5/1 (日経)	「オールドボーイズクラブ」対策は　どんどん女子会、連帯が力に　アジア開発銀行副官房長　児玉治美（ダイバーシティ進化論）	女性の働き方について 女性の社会進出について	女性中心	当事者(アジア開発銀行副官房長,児玉治美さん)

2023/5/24 (朝日)	（定年クライシス　居場所はどこに：４）夫の在宅つらい、どうすれば	女性らしさへの疑問や女性の自己肯定感の低さについて	女性中心	当事者(フェミニストカウンセラー,加藤伊都子さん)
2023/6/5 (朝日)	女性議員、もっと増やすには地方で擁立の流れ／法的枠組みで後押しを　記者サロン	女性の社会進出について	女性中心	当事者(自民党元総務会長,野田聖子氏)
2023/6/18 (朝日)	グローブ２８１号＜多様「性」見えていますか＞日本で性的少数者であること　杉山文野	性的少数者について	半々	当事者(元フェンシング女子日本代表でトランスジェンダー、２児のパパ。性的マイノリティーへの理解を深めるためのイベント「東京レインボープライド」主催団体の共同代表理事の杉山文野さん)

［表 23：全国紙五紙における「女性＋性＋自己肯定感」　記事一覧］

日付・新聞社	見出し	登場した言葉 (文脈)	発言者
2017/1/16 (産経)	【ＷＯＭＥＮ】経営・管理に「男女の違い」考慮　女性の特性知り育成を	性差,男女の特性	当事者(「女性社員を育成するためのマネジメント研修」講師の２１世紀職業財団,大野任美さん)
2017/2/3 (産経)	永田カビさん実録漫画　居場所内苦悩、率直に綴る	性的経験	その他(記者,地の文)
2017/3/10 (朝日)	（新！学習指導要領）多様な性、小中学校から教えて　ＬＧＢＴ当事者ら、体験もとに訴え	性(≒性別),性的少数者	当事者(池田えり子さん(バイセクシャルの当事者でもある)

2017/5/15 (朝日)	（フォーラム）性的少数者の授業	性(≒性別),性的少数者,性的指向,性自認	その他(記者,地の文(伝聞))
2017/10/7 (朝日)	（Ｄｅａｒ　Ｇｉｒｌｓ）朝日新聞×雑誌「ニコラ」アンケート：下　見た目、言われたくない	性的な被害,	その他(記者,地の文)
2018/6/2 (朝日)	性的少数者カップル、４２組認定　札幌市、パートナーシップ宣誓制度　／北海道	性的少数者	当事者以外(鈴木賢・明大教授)
2018/7/28 (朝日)	（ｂｅ　ｒｅｐｏｒｔ）性的少数者の終活　広がる選択肢知って、備える	性的少数者	当事者(性的少数者の高齢期を支えるＮＰＯ「パープル・ハンズ」事務局長で自らも当事者の行政書士、永易（ながやす）至文さん)
2018/9/18 (朝日)	（オトナの保健室）性犯罪なぜ？問い続ける　レイプ被害を告発、伊藤詩織さん　女子組	性被害,性犯罪	その他(新聞読者,性別不明のため当時者か否かは不明)
2019/2/5 (朝日)	《朝日新聞デジタル》（魂の中小企業）「性を表通りに」、ＴＥＮＧＡの挑戦：４そして、「革命」の担い手たち	性の話,性のこと,性欲	当事者(TENGA 社員,西野芙美さん)
2019/4/29 (朝日)	（平成×奈良：６）女性の生き方　自分らしさ、諦めない／奈良県	性別役割分担	当事者(「女性の未来を真ん中に」との思いを込めた会社、ウィメンズ・フューチャー・センター（ＷＦＣ）の社長,栗本恭子さん)
2019/5/24 (朝日)	《朝日新聞デジタル》（今さら聞けない世界）同性婚、実は中南米が積極的　ＬＧＢＴ問題はブラジル発	同性婚,同性愛	当事者以外(海外の同性婚事情に詳しい金沢大の谷口洋幸准教授)
2019/6/21 (毎日)	記者の目：障害者の性暴力被害　国は実態把握し対策を＝上東麻子（くらし医療部）	性暴力,性犯罪	その他(記者,地の文)

2019/7/14 (朝日)	ジェンダー争点、異変の参院選　同性婚・夫婦別姓、各党公約に	同性婚,性差別,性暴力	当事者以外(政治思想が専門の東大教授,宇野重規さん)
2019/7/17 (朝日)	（オトナの保健室）つながりたいけど痛い　女子組	性交痛	当事者(「うるおいヘルスケア」代表,小林ひろみさん)
2019/12/24 (読売)	［記者ノート２０１９］ＬＧＢＴ「幸せな世に」＝埼玉	性的少数者	その他(記者,地の文)
2020/3/1 (朝日)	グローブ２２７号＜ジェンダー格差＞１２１位の私たち　ジェンダー格差をどう変える？	性差別	その他(記者,地の文(伝聞))
2020/3/1 (毎日)	ストーリー：自分自身の性を求めて（その２止）　強いられた女性、脱却	性的少数者	当事者(「レインボーさいたまの会」共同代表,岩井紀穂さん(FtM 当事者))
2020/7/15 (朝日)	当事者が描く発達障害　静岡の俳優１人芝居、オンライン上演　／静岡県	性的な搾取	当事者(静岡市在住の俳優関根淳子さん(関根さんはアスペルガー症候群の診断を受けた発達障害の当事者))
2020/7/17 (毎日)	特集ワイド：ステイホームできぬ少女たち　緊急事態宣言下で孤立、さらに深め	性被害,性犯罪	当事者以外(若者を支援するＮＰＯ法人「ＢＯＮＤプロジェクト」,橘ジュン代表)
2020/12/9 (朝日)	（明日へのＬｅｓｓｏｎ）第２週：メッセージ　女子サッカーＷＥリーグ「チェア」・岡島喜久子さん×朝日新聞ＤＩＡＬＯＧ	性別	当事者(女子サッカーＷＥリーグ「チェア」,岡島喜久子さん , 女性が一歩踏み出せる社会作りに取り組む二宮理沙子さん)

2021/3/4 (毎日)	声をつないで：国際女性デー２０２１　「ノーと言える社会に」　性暴力被害のＬＧＢＴら、刑法見直し訴えデモ再開　／兵庫	性的少数者,性被害	当事者(「不同意性交罪」創設を求める「フラワーデモ」の企画者,高橋朗さん(性的少数者の当事者でもある))
2021/3/16 (毎日)	同性婚訴訟：同性婚訴訟あす判決　誰もが自分らしい社会に　当事者でもある加藤弁護士　／北海道	同性愛者,性的少数者	その他(記者,地の文(伝聞))
2021/4/7(朝日)	（声　どう思いますか）性教育どうする：上	性教育,性的同意	当事者以外(元小学校教員　沖田恵子さん)
2021/5/2(読売)	「許すな　わいせつ教員」反響２８０件　「私も被害」続く苦しみ	性被害	その他(新聞読者,50 代女性(伝聞))
2021/6/28 (産経)	【教育はいま】選べる制服、悩む子供救う　奈良の中学校、トイレも多様性配慮	性的少数者	当事者(ＬＧＢＴの子供や若者の支援をしている認定ＮＰＯ法人「ＲｅＢｉｔ」(東京都),小川奈津己さん)
2021/8/15 (朝日)	男女の差、家庭内から見つめる　子にたくさん選択肢を／まず愛情伝えて　記者サロン	性教育,性的同意	当事者(社会学者,上野千鶴子さん)
2021/10/21 (朝日)	（台湾社会の「包容力」：４）同性婚、手をつなぎ歩く日常	性別,同性愛者	当事者(日本語教師の有吉英三郎さん)
2021/10/28 (朝日)	虐待受けた子「普通」の家で安心生活　来月１日、千葉に自立援助ホーム開設　／千葉県	性被害	当事者以外(ＮＰＯ法人「子どもセンター帆希（ほまれ）」の理事長で千葉大の後藤弘子教授（刑事法）)
2022/1/23 (朝日)	（勇さんの発掘！　おうみびと）性教育認定講師・高野真由さん　４２歳　／滋賀県	性教育,性被害	当事者以外(性教育認定講師・高野真由さん)
2022/2/21 (毎日)	シンポジウム：性の多様性、教育現場の取り組みは　学校、共存できる場に　静岡で	性の多様性,性的マイノリティー	当事者以外(東海高校教諭,久田光政さん)

	シンポ　教諭や文科省職員ら／静岡		
2022/7/10 (朝日)	（フォーラム）私の悩み、社会を変える？	性的指向,性差別	当事者(東京都に住むひなたのさくらさん)
2022/8/17 (朝日)	（子どもへの性暴力）第７部・狙われる障害：１　信頼していた施設で娘が	性被害,性暴力	当事者以外(ＮＰＯ法人「しあわせなみだ」理事長の中野宏美さん)
2022/8/22 (朝日)	女子大とは、対話で問う　トランスジェンダー学生入学で考える	性別,多様性	当事者(トランスジェンダーの当事者で、市民団体「Ｒａｉｎｂｏｗ　Ｔｏｋｙｏ　北区」代表,時枝穂（みのり）さん)
2022/8/29 (毎日)	性教育を変えていく：「第一人者」の村瀬幸浩さん／上家庭向け書籍、異例の人気	性教育	当事者以外(東京都三鷹市の元私立高校教員,村瀬幸浩さん)
2022/9/5 (毎日)	性教育を変えていく：「第一人者」の村瀬幸浩さん／下歩み寄り、信頼感生まれる	性教育	当事者以外(東京都三鷹市の元私立高校教員,村瀬幸浩さん)
2022/9/17 (毎日)	性的少数者：「自分らしく」歩む背押す　性的少数者の元警官、オンライン交流会　心開くと世界はやさしい	性的少数者	その他(記者,地の文(伝聞))
2022/9/29 (毎日)	性的少数者：「自分らしく」歩む背中押す　性的少数者の元警官佐藤さん（松江）オンライン交流会　／島根	性的少数者	その他(記者,地の文(伝聞))
2022/10/18 (毎日)	ジェンダー・ステレオタイプ：性差の固定観念いつから４歳から「女性は優しい」、７歳から「男性は賢い」	ジェンダーステレオタイプ	当事者以外(京都大学,森口佑介准教授（発達心理学）)
2022/10/18 (毎日)	ジェンダー・ステレオタイプ：性別思い込み、いつから？　「女性優しい」４歳「男性賢い」７歳　京大など調査	ジェンダーステレオタイプ	当事者以外(京都大学,森口佑介准教授（発達心理学）)

2022/10/18 (毎日)	ジェンダー・ステレオタイプ：性別思い込み、いつから「女性は優しい」４歳、「男性は賢い」７歳	ジェンダーステレオタイプ	当事者以外(京都大学,森口佑介准教授（発達心理学）)
2022/10/27 (日経)	性別って「グラデーション」――性差問わない選択肢を日本性同一性障害と共に生きる人々の会代表　永沼利一氏（生活）	性スペクトラム	当事者(日本性同一性障害と共に生きる人々の会代表,永沼利一氏 FtM 当事者)
2023/1/21 (朝日)	（藤田直哉のネット方面見聞録）集団で攻撃、ゲーム的運動の危うさ	性被害,性差別,性搾取	その他(文芸評論家,地の文)
2023/2/27 (朝日)	（共生のＳＤＧｓ　コロナの先の２０３０）１６歳で嫁がせた、母は悔やんだ	性教育,性的同意,性暴力	その他(記者,地の文)
2023/6/18 (朝日)	グローブ２８１号＜多様「性」見えていますか＞日本で性的少数者であるということ　杉山文野	性的マイノリティ	当事者(元フェンシング女子日本代表でトランスジェンダー、２児のパパ。性的マイノリティーへの理解を深めるためのイベント「東京レインボープライド」主催団体の共同代表理事の杉山文野さん)

［表 24：全国紙五紙における「女性＋働く＋自己肯定感」　記事一覧］

日付・新聞社	見出し	文脈	発言者
2017/1/16 (産経)	【ＷＯＭＥＮ】経営・管理に「男女の違い」考慮　女性の特性知り育成を	女性の働き方について 働く女性の悩みについて	当事者(「女性社員を育成するためのマネジメント研修」講師の２１世紀職業財団,大野任美さん)
2017/2/26 (読売)	［貧困　いま女性は］（１１）識者に聞く　阿部彩教授　橘ジュン代表（連載）	女性の貧困 女性の働き方	当事者以外(ＮＰＯ法人 ＢＯＮＤプロジェクト,橘ジュン代表)

2017/12/24 (朝日)	放課後デイサービス、急増障害ある子預かり、５年で４倍に	共働き世帯からの放課後デイサービスのニーズ	当事者以外(千葉県船橋市にある発達障害児向けの放課後デイ「ＳＴＥＰ（ステップ）」管理者の石毛利枝さん)
2019/1/17 (朝日)	（記者のツボ）タイトルは変えたけど…　危うさ感じたドラマ初回　【大阪】	働く女性の悩みについて	その他(記者,地の文)
2019/3/29 (日経)	レタスクラブ編集長松田紀子氏（上）「よそ者」視点で異例の復活、読者の「日常」に迫る（キャリアの原点）	女性の働き方	当事者(レタスクラブ編集長,松田紀子氏)
2019/4/29 (朝日)	（平成×奈良：６）女性の生き方　自分らしさ、諦めない　／奈良県	働く女性の悩みについて	当事者(「女性の未来を真ん中に」との思いを込めた会社、ウィメンズ・フューチャー・センター（ＷＦＣ）の社長,栗本恭子さん)
2019/6/21 (毎日)	記者の目：障害者の性暴力被害　国は実態把握し対策を＝上東麻子（くらし医療部）	障害を抱える女性の現状について(性暴力・風俗での勤務)	その他(記者,地の文)
2019/6/24 (毎日)	ひと＠あいち：ＮＰＯ「まめっこ」理事長・中井恵美さん（４０）　／愛知	女性の働き方について 働く女性の悩みについて	その他(記者,地の文(伝聞))
2019/9/2 (朝日)	ママ応援、弁当屋さん　短時間勤務・子連れＯＫ・託児当番制　箕面　／大阪府	働く女性の悩みについて	その他(記者,地の文(伝聞))
2019/11/13 (朝日)	（老後レス時代　エイジングニッポン：３）想定されない女性たち	働く女性の悩みについて	その他(記者,地の文)
2019/12/14 (朝日)	（耕論）老後レス時代　いつまで働けばいいの　横石知二さん、宮本太郎さん、李金龍さん	働く女性の悩みについて 定年の延長	当事者以外(中央大学教授,宮本太郎さん)

2020/3/1 (毎日)	ストーリー：自分自身の性を求めて（その２止）　強いられた女性、脱却	性的少数者の働きにくさについて	当事者(「レインボーさいたまの会」共同代表,岩井紀穂さん(FtM 当事者))
2020/3/1 (朝日)	グローブ２２７号＜ジェンダー格差＞１２１位の私たち　ジェンダー格差をどう変える？	働く女性の悩みについて	その他(記者,地の文(伝聞))
2020/3/8 (日経)	ＮＩＫＫＥＩＴｈｅＳＴＹＬＥ――ワーク・ライフバランス社長小室淑恵さん、定時に帰る、未来を変える（ＭｙＳｔｏｒｙ）	女性の社会進出について 女性の働き方について	当事者(ワーク・ライフバランス社長,小室淑恵さん)
2020/3/22 (朝日)	（Ａｇｉｎｇ　Ｇｒａｃｅｆｕｌｌｙ）さよなら分断酸いも甘いも、垣根もこえて	働く女性の悩みについて	当事者(女性に特化した人材コンサルティング会社社長,川崎貴子さん)
2020/4/6 (日経)	管理職手前の女性、研修・啓発で対策――「自信ない症候群」克服へ（Ｗｏｍｅｎ＠Ｗｏｒｋ）	女性の働き方について 女性の社会進出について	その他(記者,地の文)
2021/3/7 (朝日)	（フォーラム）見えない女性たち	働く女性の悩みについて 女性の社会進出	当事者(内閣府の研究会に参加する大崎麻子さん)
2021/10/31 (朝日)	（フォーラム）「ロスジェネ　女性　非正規」：１　現在そして将来	女性の働き方について	当事者(公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会 キャリアカウンセリング担当,秋葉由美さん)
2021/12/10 (日経)	働き方の満足度、６０代以上で高く――「自分らしい」仕事見つけよう（ときめくシニア女性マーケ）	女性の働き方について 働く女性の悩みについて	当事者(「働くことに関する座談会」の参加者女性)

2022/4/18 (読売)	［人生案内］６０代女性、今さら母に不満	働く女性への理解 親子関係	当事者(相談者の女性)
2022/5/10 (朝日)	（「できない」女？　ＡＤＨＤ女性の生きづらさ：１）見せられない家：上	障害がある女性の現状について(働きにくさ)	当事者(西原三葉さん(女性であり、ADHD の当事者)
2022/7/1 (読売)	［政策分析　２２参院選］（６）女性活躍　役職・給与　いまだ格差	女性の社会進出について 女性の働き方について	当事者以外(企業の女性活躍推進を目指すＮＰＯ法人「Ｊ―Ｗｉｎ」)
2022/8/21 (読売)	［人生案内］働けない娘がふびん	鬱病女性の就労について	当事者以外(新聞に寄せられた相談への回答者,心療内科医の海原純子さん)
2022/9/7 (朝日)	（みんなはどう？）専業主婦、思いはそれぞれ	働く女性の悩みについて	当事者(新聞読者,51 歳女性)
2023/2/20 (日経)	セルフエステ　働く女性に人気の理由　「ちょい手間」が育む自己肯定感	働く女性に人気の商品などについて	当事者(女性向け人材コンサルタント,川崎貴子さん)
2023/4/3 (日経)	仕事選び　社会との接点も重要（Ｗｏｍｅｎ’ｓトレンド）	女性の働く動機について	当事者(人材サービスのビースタイルホールディングスのアンケートに協力した女性)
2023/5/20 (日経)	「育児をしながら働く女性」になれない（神奈川県・４０代・女性）――常識を疑い、立場主張して（なやみのとびら）	女性の働き方について 働く女性の悩みについて	当事者以外(俳優,平岳大)

［表 26：各媒体における「自己肯定感」登場数の推移］

年代	論文数	書籍数	新聞記事数
1991	0	0	1
1992	0	0	0
1993	0	0	2
1994	1	0	0
1995	1	0	1

1996	1	0	3
1997	1	0	4
1998	3	0	4
1999	3	0	15
2000	10	0	22
2001	7	0	22
2002	18	0	16
2003	10	0	12
2004	15	1	28
2005	22	0	25
2006	28	0	42
2007	25	4	40
2008	30	3	52
2009	47	3	51
2010	56	4	61
2011	46	3	63
2012	47	1	90
2013	71	2	108
2014	82	1	151
2015	63	6	140
2016	53	4	174
2017	60	2	214
2018	50	16	223
2019	59	23	299
2020	48	28	219
2021	51	37	286
2022	53	26	336
2023	54	11	347

［表 27：CiNii 掲載書籍における NDC 分類］

※本が 1 冊も出版されていない年は除外して表を作成した。

年代	書籍数	書籍 タイトル＋著者の属性＋NDC
2004	1	1.タイトル：「生きることと自己肯定感」 著者：高垣忠一郎(臨床心理学者,「自己肯定感」の提唱者) NDC：371.4(社会科学/教育/教育学 教育思想/教育心理学,教育的環境学)

2007	4	1.タイトル：「"吃音のある子どもの自己肯定感を支えるために　言語に障害のある子どもへの教育的支援に関する研究 : 吃音のある子どもの自己肯定感形成を中心に」 　著者：国立特殊教育総合研究所(障害のある子供の教育に関する研究などを行う国立の組織) 　NDC：378.5(社会科学/教育/障害児教育/言語発達遅滞児．吃音矯正) 2.タイトル：「自己肯定感の育て方 : ほめる、叱る、言葉をかける」 　著者：今井和子(東京成徳大学子ども学部 教授), 波多野ミキ(カウンセラー), 堀内節子(元小学校教諭,のちに幼稚園を開園) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 3.タイトル：「調査研究実践報告書 : 自然体験や社会体験など、自己肯定感と自己存在感を高め、集団への適応力を培う活動を通じた適応指導の在り方」 　著者：青森県総合学校教育センター 　NDC：該当なし 4.タイトル：「子どもの居場所を創る学校 : 集団活動の中で自己肯定感を育てる」 　著者：堀内一男(教育学者) 　NDC：374(社会科学/教育/学校経営・管理 学校保健)
2008	3	1.タイトル：「自己肯定感って、なんやろう」 　著者：高垣忠一郎(臨床心理学者,「自己肯定感」の提唱者) 　NDC：146.8(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/心理療法．カウンセリング) 2.タイトル：「競争社会に向き合う自己肯定感 : もっとゆっくり/信じて待つ」 　著者：高垣忠一郎(臨床心理学者,「自己肯定感」の提唱者) 　NDC：146.8(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/心理療法．カウンセリング) 3.タイトル：「発達障害といじめ・暴力 : 自己肯定感を育む子ども集団づくり」 　著者：楠凡之(全国生活指導研究協議会指名全国委員、北九州子育て支援と子ども文化ネットワーク代表、日本生活指導学会理事)ほか 　NDC：378(社会科学/教育/障害児教育)

2009	3	1.タイトル：「自閉症児者の発達と生活 : 共感的自己肯定感を育むために」 　著者：別府哲(特殊教育学者) 　NDC:378(社会科学/教育/障害児教育) 2.タイトル：「子どもたちの自己肯定感を高めるために : 宿泊を伴う事業の実践事例から : 「やくそくとおきて」の実践のためのプログラムヒント : 平成 20 年度文部科学省委託事業「青少年元気サポート事業」」 　著者：ガールスカウト日本連盟 　NDC：該当なし 3.タイトル：「少女の自己肯定感を高めるキャンプ : 平成 20 年度文部科学省委託事業青少年元気サポート事業 : 少女のための元気サポートプロジェクト : 報告書」 　著者：ガールスカウト日本連盟 　NDC：該当なし
2010	4	1.タイトル：「深谷和子編 3 月号 特集「自己肯定感」を高める セルフエスティームを高める要因-これまでの研究からー 児童心理学」 　著者：眞榮城和美(発達心理学,臨床心理学,自己心理学,発達精神病理学専門)ほか 　NDC：該当なし 2.タイトル：「少女たちが自ら考え行動できる人となっていくために : 「パトロールシステム」の活用で少女たちの自己肯定感が高まる」 　著者：ガールスカウト日本連盟 　NDC：該当なし 3.タイトル：「カウンセリングを語る : 自己肯定感を育てる作法」 　著者：高垣忠一郎(臨床心理学者,「自己肯定感」の提唱者) 　NDC：146.8(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/心理療法．カウンセリング) 4.タイトル：「大丈夫だよ。YOU ARE OK! : 自己肯定感をはぐくむ教育を」 　著者：本間信治(小学校教員) 　NDC：370(社会科学/教育)

2011	3	1.タイトル：「特集・子どもの自己肯定感 = 緊急特集・東日本大震災と子ども支援」 　著者：子どもの権利条約総合研究所(NPO 法人) 　NDC：369.4(社会/社会福祉/児童福祉) 2.タイトル：「ほんものの「自己肯定感」を育てる道徳授業」 　著者：諸富祥彦(心理学,カウンセリング専門) 　NDC：375.35(教育/教育課程 学習指導 教科別教育/道徳) 3.タイトル：「魔法の就活 : 親子関係からの自己肯定感が内定を決める」 　著者：阿部誠一(公認心理士) 　NDC：377.9(教育/大学・高等・専門教育 学術行政/学生・学生生活・学生問題)
2012	1	1.タイトル：「自己肯定感がぐんぐんのびる 45 の学習プログラム : 授業ですぐ使える!」 　著者：越智泰子(詳細不明) 　NDC：375.2(社会科学/教育/教育課程 学習指導 教科別教育/生活指導．生徒指導．ＣＡＩ)
2013	2	1.タイトル：「子どもの心の育ちをエピソードで描く : 自己肯定感を育てる保育のために」 　著者：鯨岡峻(発達心理学者) 　NDC：376.11(社会科学/教育/幼児・初等・中等教育/理論．方法．幼児心理) 2.タイトル：「仲間とともに自己肯定感が育つ保育 : 安心のなかで挑戦する子どもたち」 　著者：浜谷直人(教育心理学者) 　NDC：376.1(社会科学/教育/幼児・初等・中等教育/幼児教育．保育．就学前教育．幼稚園．保育園)
2014	1	1.タイトル：日本教育会叢書第 40 集「こころのエンジンを育てる教育 : 自己肯定感を高めるために」 　著者：村山正治(臨床心理学者,臨床心理士) 　NDC：370(社会科学/教育)

2015	6	1.タイトル：「アクティブ・ラーニングで深める技術科教育　～自己肯定感が備わる実践～」 　著者：原田信一(学校教育学),安東茂樹(教育学者) 　NDC：375.53(社会科学/教育/教育課程 学習指導 教科別教育/中学校) 2.タイトル：「１・２歳児の自己肯定感の土台を育む」 　著者：芦澤清音(発達臨床心理学,障害児保育専門)・バオバブ霧が丘保育園 　NDC：376.11(社会科学/教育/ 幼児・初等・中等教育/理論．方法．幼児心理) 3.タイトル：「自己肯定感を育てる道徳の授業」 　著者：加藤好一(私立明星学園高校講師、千葉県・静岡県の公立小・中学校教諭を経て、2014 年 3 月まで琉球大学教育学部教授) 　NDC：375.35(社会科学/教育/教育課程 学習指導 教科別教育/道徳) 4.タイトル：「生きづらい時代と自己肯定感 : 「自分が自分であって大丈夫」って?」 　著者：高垣忠一郎(臨床心理学者,「自己肯定感」の提唱者) 　NDC：371.47(社会科学/教育/教育学 教育思想/青年心理．青年研究) 5.タイトル：「自己肯定感、持っていますか? : あなたの世界をガラリと変える、たったひとつの方法」 　著者：水島広子(精神科医) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 6.タイトル：「ボクってすごい"、"アタシってすごい"と思える子を育てる : 自己肯定感確立への道すじ」 　著者：岩倉政城(歯学博士,尚絅学院大学附属幼稚園園長) 　NDC：376.11(社会科学/教育/幼児・初等・中等教育/理論．方法．幼児心理)

2016	4	1.タイトル：「子供の自己肯定感や道徳心は保護者の関わり次第で大きく変わる! : 「青少年の体験活動等に関する実態調査(平成 26 年度調査)」「結果の概要」」 　著者：国立青少年教育振興機構 　NDC：該当なし 2.タイトル：「潜在意識から「自分」を変える方法 : ビジネスで結果を出す人には"自己肯定感"がある!」 　著者：石山喜章(経営者) 　NDC：159.4(哲学/倫理学 道徳/人生訓 教訓/経営訓) 3.タイトル：「絵を聴く保育 : 自己肯定感を育む描画活動」 　著者：中山ももこ(保育士) 　NDC：376.156(社会科学/教育/幼児・初等・中等教育/絵画．製作) 4.タイトル：「発達障害のある児童生徒の二次障害のサポート : 自己肯定感を高める支援方法」 　著者：檜佐真由子(詳細不明) 　NDC：該当なし
2017	2	1.タイトル：「敏感すぎるあなたが 7 日間で自己肯定感をあげる方法」 　著者：根本裕幸(カウンセラー,作家) 　NDC：146.8(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/心理療法．カウンセリング) 2.タイトル：「子どもの自己肯定感 UP コーチング」 　著者：神谷和宏(中学教師,教育コーチング心理カウンセラー) 　NDC：375.2(社会科学/教育/教育課程 学習指導 教科別教育/生活指導．生徒指導．ＣＡＩ)

2018	16	1.タイトル：「自己肯定感を抱きしめて : 命はかくも愛おしい」 　著者：高垣忠一郎(臨床心理学者,「自己肯定感」の提唱者) 　NDC：914.6：(文学/日本文学/評論 エッセイ 随筆/近代：明治以後) 2.タイトル：「人生がうまくいく人の自己肯定感」 　著者：川野泰周(精神科・心療内科医) 　NDC：498.39：(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 3.タイトル：「世界に通用する「個性」の育て方 : 聖書に学ぶ「自己肯定感と自立心」を高める子育て」 　著者：後藤哲哉(牧師,心理カウンセラー) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 4.タイトル：「「自己肯定感」をもてない自分に困っています : コミックエッセイ : 自己主張できない 失敗を引きずる いつも振り回される」 　著者：長沼睦雄(精神科医) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 5.タイトル：「マインドフルネスと 7 つの言葉だけで自己肯定感が高い人になる本」 　著者：藤井英雄(精神科医・医学博士,マインドフルネス実践家) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 6.タイトル：「自分を好きになりたい。 : 自己肯定感を上げるためにやってみたこと」 　著者：わたなべぽん(漫画家) 　NDC：726.1(芸術/絵画/漫画 挿絵 童画/漫画．劇画．諷刺画) 7.タイトル：「「自己肯定感」の高め方 : 「自分に厳しい人」ほど自分を傷つける : 世界が変わる!」 　著者：石原加受子(心理カウンセラー) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 8.タイトル：「自己肯定感がドーンと下がったとき読む本」 　著者：古宮昇(臨床心理士) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法)

		9.タイトル：「「自己肯定感」が低いあなたが、すぐ変わる方法」 　著者：大嶋信頼(心理カウンセラー) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 10.タイトル：「自己肯定感を高めて心を軽くする方法」 　著者：マーク・レクラウ(ライフコーチ)著 ; 弓場隆訳 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 11.タイトル：「子どもの自己肯定感を高める 10 の魔法のことば」 　著者：石田勝紀(学習塾経営者) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 12.タイトル：「最上のほめ方 : 自己肯定感を高める 4 つのステップ」 　著者：八田哲夫(幼児活動研究会,日本経営教育研究所所長), 原邦雄(一般財団法人ほめ育財団代表理事) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 13.タイトル：「「自己肯定感」を高める子育て : 子どもの「才脳」を最大限に伸ばす」 　著者：ダニエル・J.シーゲル(UCLA 医科大学精神科臨床教授), ティナ・ペイン・ブライソン(児童青年心理療法士)著 ; 桐谷知未(翻訳家)訳 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 14.タイトル：「家でできる「自信が持てる子」の育て方 : 自主性自立性自己肯定感やる気自分で考える力を伸ばす仕掛け : 世界一のクラスの担任が教える」 　著者：沼田晶弘(小学校教諭) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 15.タイトル：「女の子の「自己肯定感」を高める育て方 : 思春期の接し方が子どもの人生を左右する!」 　著者：吉野明(社会科教員) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 16.タイトル：「あなたの中の「自己肯定感」がすべてをラクにする」 　著者：原裕輝(心理カウンセラー) 　NDC：159(哲学/倫理学・道徳/人生訓 教訓)

2019	23	1.タイトル：「「新しい時代の生徒指導を展望する」（自己肯定感と生徒指導）」 　著者：伊藤美奈子(奈良女子大学生活環境学部心身健康学科教授)ほか 　NDC：375.2(社会科学/教育/教育課程 学習指導 教科別教育/生活指導．生徒指導．ＣＡＩ) 2.タイトル：「HSP とうつ自己肯定感を取り戻す方法」 　著者：高田明和(脳科学者) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 3.タイトル：「「脳科学×心理学」で自己肯定感を高める方法 : 脳と心の両面からのアプローチで１万人超に劇的な効果!」 　著者：弥永英晃(心理カウンセラー・作家) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 4.タイトル：「「会社行きたくない」と泣いていた僕が無敵になった理由 : 人間関係のカギは、自己肯定感にあった」 　著者：加藤隆行(元システムエンジニア,カウンセラー) 　NDC：336.49(社会科学/経済/経営管理/職場の人間関係・ビジネスマナー) 5.タイトル：「自分をもっと好きになるノート : 認知行動療法で自己肯定感を育てる」 　著者：玉井仁(臨床心理士・公認心理師・精神保健福祉士)著 ; 百万友輝マンガ 　NDC：146.8(哲学/心理学/臨床心理学・精神分析学/心理療法．カウンセリング) 6.タイトル：「「いい親」をやめるとラクになる : 子どもの自己肯定感を高めるヒント」 　著者：古荘純一(小児科医、小児精神科医、医学博士) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 7.タイトル：「きみは、きみのままでいい : 子どもの自己肯定感を育てるガイド」 　著者：ポピー・オニール(作家)著 ; 渡辺滋人(翻訳家)訳 　NDC：146.82(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/児童の心理療法) 8.タイトル：「イラスト版子どもの感情力をアップする本 : 自己肯定

		感を高める気持ちマネジメント 50」 　著者：渡辺 弥生(法政大学文学部心理学科教授、教育学博士)監修, 木村 愛子(詳細不明)編著 　NDC：371.6(社会科学/教育/教育学 教育思想/道徳教育．宗教教育．情操教育．公民教育) 9.タイトル：「「自己肯定感」が上がる 100 の言葉 = 100 words to improve your self-esteem : 根拠なき自信があふれ出す!」 　著者：千田琢哉(文筆家) 　NDC：159(哲学/倫理学 道徳/人生訓 教訓) 10.タイトル：「それは、"愛着障害"のせいかもしれません。 : 自己肯定感が低い・傷つきやすい・人とうまくやれない」 　著者：中野日出美(NPO 法人日本心理コミュニケーション協会代表。公認心理師。心理セラピスト。絵本作家) 　NDC：493.743(自然科学/医学/内科学/機能的神経疾患．神経症) 11.タイトル：「書くだけで人生が変わる自己肯定感ノート」 　著者：中島輝(心理カウンセラー) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生・健脳法) 12.タイトル：「平成 30 年度自己肯定感支援事業「ここのえ野外活動塾」報告書 : 社会的養護が必要な子どもの自己肯定感向上に関する考察」 　著者：大分県立九重青少年の家 　NDC：該当なし 13.タイトル：「自分を好きになるとすべてがうまくいく : プラス思考の習慣術で「自己肯定感」を高める」 　著者：大嶋信頼(心理カウンセラー) 　NDC：146.8(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/心理療法・カウンセリング) 14.タイトル：「生きづらい HSP のための自己肯定感を育てるレッスン」 　著者：高木のぞみ(看護師,保健師), 高木英昌(精神科医)著 　NDC：141.94(哲学/心理学/普通心理学・心理各論/気質：神経質, 多血質，胆汁質，粘液質) 15.タイトル：「自己肯定感を育てるたった 1 つの習慣」 　著者：植西聰(資生堂に勤務。独立後、「心理学」「東洋思想」「ニューソート哲学」などに基づいた人生論の研究に従事)

		NDC：159(哲学/倫理学 道徳/人生訓 教訓) 16.タイトル：「自己肯定感の教科書 : 何があっても「大丈夫。」と思えるようになる」 著者：中島輝(心理カウンセラー) NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 17.タイトル：「子どもの将来は「親」の自己肯定感で決まる」 著者：根本裕幸(カウンセラー,作家) NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 18.タイトル：「「自己肯定感」育成入門 : 子どもの「やってみたい」をぐいぐい引き出す!」 著者：平岩国泰(特定非営利活動法人 放課後 NPO アフタースクール代表理事) NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 19.タイトル：「自己肯定感が低い自分と上手につきあう処方箋」 著者：大嶋信頼(心理カウンセラー) NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 20.タイトル：「子育てが上手くいく!「ママのココロ貯金」のすすめ : 親と子の自己肯定感を上げる 33 のポイント」 著者：東ちひろ(幼稚園講師、小学校教諭、中学校相談員、教育委員会勤務を経て、現在は一般社団法人子育て心理学協会代表理事) NDC：599(技術/家政学 生活科学/育児/習慣・しつけ) 21.タイトル：「職場の人間関係は自己肯定感が 9 割」 著者：工藤紀子(一般社団法人日本セルフエスティーム普及協会代表理事) NDC：336.49(社会科学/経済/経営管理/職場の人間関係．ビジネスマナー) 22.タイトル：「発達障害の子どもが自己肯定感を高める最強の勉強法」 著者：和田秀(国際医療福祉大学教授、川崎幸病院精神科顧問、和田秀樹こころと体のクリニック院長、「I&C キッズスクール」理事長) NDC：378.8(社会科学/教育/障害児教育/情緒障害児)

		23.タイトル：「男の子の「自己肯定感」を高める育て方 : 世界を生き抜く力は思春期に伸びる!」 　著者：柳沢幸雄(東京大学大学院工学系研究科化学工学専攻修士・博士課程修了。ハーバード大学公衆衛生大学院准教授、併任教授、東京大学大学院新領域創成科学研究科教授を経て東京大学名誉教授) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育)

2020	28	1.タイトル：「"大谷翔平・羽生結弦の育て方 : 子どもの自己肯定感を高める 41 のヒント」 　著者：児玉光雄(追手門学院大学スポーツ研究センター特別顧問,スポーツ心理学会会員) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 2.タイトル：「自己肯定感を高めるお得技ベストセレクション」 　著者：晋遊舎 　NDC：146.8(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/心理療法・カウンセリング) 3.タイトル：「子どもの自己肯定感が高まる天使の口ぐせ」 　著者：白崎あゆみ(元アナウンサー) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 4.タイトル：「自分を受け入れる力 : “自己肯定感"のスイッチが入る!」 　著者：午堂登紀雄(米国公認会計士) 　NDC：159(哲学/倫理学 道徳/人生訓 教訓) 5.タイトル：「"自己肯定感 diary : 運命を変える日記」 　著者：中島輝(心理カウンセラー) 　NDC：146.8(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/心理療法・カウンセリング) 6.タイトル：「特別活動で、日本の教育が変わる! : 特活力で、自己肯定感を高める」 　著者：杉田洋(國學院大學人間開発学部教授), 稲垣孝章(前埼玉県東松山市立松山第一小学校長。埼玉県内小学校教諭、東松山市教育委員会指導主事、教頭、小学校長として三校で特別活動の研究を推進) 　NDC：375.182(社会科学/教育/教育課程 学習指導 教科別教育/小学校) 7.タイトル：「お母さんの自己肯定感を高める本」 　著者：松村亜里(ニューヨークライフバランス研究所代表) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 8.タイトル：「世界標準の自己肯定感の育て方 : 失敗に負けない「強い心」が身につく」 　著者：船津徹(ホノルルに TLC for Kids を設立。英語力、コミュニケーション力、論理思考力など、世界で活躍できる人材を育てるための独自の教育プログラム) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育)

		9.タイトル：「書くだけで「自己肯定感」が高まるワークブック：自分を好きになる 30 のレッスン」 　著者：根本裕幸(カウンセラー,作家) NDC：146.8(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/心理療法・カウンセリング) 10.タイトル：「自己肯定感の低いワタシちゃん」 　著者：うさぎのみみちゃん(インフルエンサー？) 　NDC：726.1(芸術/絵画漫画 挿絵 童画/漫画．劇画．諷刺画) 11.タイトル：「自己肯定感で子どもが伸びる：12 歳までの心と脳の育て方」 　著者：古荘純一(小児科医、小児精神科医、医学博士) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 12.タイトル：「自己肯定感がぐんぐん育つ学級づくりに役立つライフスキル」 　著者：白石孝久(順天堂大学大学院健康教育学研究室博士後期課程単位取得後、満期退学。早稲田大学教師教育研究所招聘研究員) 　NDC：374.9(社会科学/教育/学校経営・管理 学校保健/学校保健) 13.タイトル：「1 分自己肯定感 = The 1-minute Self-affirmation：一瞬でメンタルが強くなる 33 のメソッド」 　著者：中島輝(カウンセラー) 　NDC：141.8(哲学/心理学/普通心理学・心理各論/意志．意欲) 14.タイトル：「自己肯定感・有用感を高めるカリキュラム・マネジメント：「社会に開かれた教育課程」の視点から」 　著者：末吉雄二(学校教育専門(教育原理、学校法、特別活動論、生徒指導・進路指導論)) 　NDC：375(社会科学/教育/教育課程 学習指導 教科別教育) 15.タイトル：「フェアシンキング：自己肯定感が高まる最強の思考法」 　著者：王丸典子(インテグラルカウンセリングサービス代表。カリフォルニア州公認サイコロジスト。臨床心理学博士) 　NDC：146.811(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/心理療法・カウンセリング) 16.タイトル：「脳科学者が教える子どもの自己肯定感は 3・7・10 歳で決まる」 　著者：西剛志(脳科学者(工学博士)、分子生物学者)

		NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 17.タイトル：「究極の子育て : 自己肯定感×非認知能力 : 10 歳までに一生ものの土台ができる"」 著者：STUDY HACKER こどもまなび☆ラボ(教育系ウェブメディア) NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 18.タイトル：「自己肯定感を高めるハーバード式ポジティブ心理学 : まんがでわかる」 著者：成瀬まゆみ(ライフコーチ、著述家)著 ; 前山三都里まんが NDC：140(哲学/心理学) 19.タイトル：「生き辛い OL ですが自己肯定感を高めたら生きるのがラクになりました。」 著者：あかり*生き辛い OL(インフルエンサー？)著,中島輝(カウンセラー)監修 NDC：498.39(医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 20.タイトル：「自己肯定感を上げるだけで最高の恋がすぐ叶いました。」 著者：YUKA(幸せ恋コンサルタント,ブロガー)&れいたま(幸せ恋コンサルタント,ブロガー) NDC：159.6(哲学/倫理学 道徳/人生訓 教訓/女性のための人生訓) 21.タイトル：「自分の気持ちがわからない沼から抜け出したい : 仕事・恋愛・人間関係の悩みがなくなる自己肯定感の高め方」 著者：田中よしこ(マインドトレーナー、株式会社コレット代表取締役) NDC：141.6(哲学/心理学/普通心理学・心理各論/情動：情緒，感情，情操) 22.タイトル：「泣いてる子どもにイライラするのはずっと「あなた」が泣きたかったから : 育児の悩みが消える「親の自己肯定感」を高める言葉」 著者：福田花奈絵(子育てママ専門カウンセラー,元小学校教諭) NDC：599(技術/家政学 生活科学/育児) 23.タイトル：「1 万人超を救ったメンタル産業医の職場での「自己肯定感」がグーンと上がる大全」 著者：井上智介(産業医・精神科医) NDC：498.8(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/労働衛生．産業衛生)

		24.タイトル：「「自己肯定感低めの人」のための本」 　著者：山根洋士(心理カウンセラー) 　NDC：146.8(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/心理療法．カウンセリング) 25.タイトル：「自己肯定感を高める本」 　著者：中島輝(心理カウンセラー) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 26.タイトル：「やる気を引き出すペップトーク：幼児期から自己肯定感を高める言葉の力」 　著者：倉部雄大(一般財団法人日本ペップトーク普及協会の認定講演講師), 乾倫子(小学校教諭,一般財団法人日本ペップトーク普及協会教育普及部副部長) 　NDC：376.1(社会科学/教育/幼児・初等・中等教育/幼児教育．保育．就学前教育．幼稚園．保育園) 27.タイトル：「精神科医 Tomy の自分をもっと好きになる「自己肯定感」の育て方」 　著者：精神科医 Tomy(精神科医) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 28.タイトル：「しあわせカメラ：子どもの自己肯定感が育つ魔法の撮影レシピ」 　著者：パパカメラ(写真家) 　NDC：743.4(芸術/写真/撮影技術/人物写真・ヌード写真)

2021	37	1.タイトル：「子どもの自己肯定感は親のひと言で決まる！」 　著者：成田奈緒子(脳科学者) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 2.タイトル：「マンガでわかる自己肯定感 : たった 30 分読むだけで前向きになれる」 　著者：中島輝(心理カウンセラー)著, なつみ理奈漫画 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 3.タイトル：「「自己肯定感低めの人」が幸せになるワークブック」 　著者：山根洋士(心理カウンセラー) 　NDC：146.8(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/心理療法．カウンセリング) 4.タイトル：「発達障害の子どもの自己肯定感をはぐくむ本 : 親だからできる“二次障害を防ぐ"8 つのサポート」 　著者：宮尾益知(医学博士,どんぐり発達クリニック医院長) 　NDC：378.8(社会科学/教育/障害児教育/情緒障害児) 5.タイトル：「子どもの自己肯定感を高める「接し方・声のかけ方」: 自分で考えて生き抜く力をもつ子に育てるコツ」 　著者：本多優子(株式会社オズウェル 代表取締役。研修講師・心理カウンセラー) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 6.タイトル：「自己肯定感を育む運動会に」 　著者：世界文化ワンダークリエイト 　NDC：378.8(社会科学/教育/障害児教育/情緒障害児) 7.タイトル：「自己肯定感のコツ : 「自分の価値」に気づく 92 のヒント」 　著者：植西聰(資生堂に勤務。独立後、「心理学」「東洋思想」「ニューソート哲学」などに基づいた人生論の研究に従事) 　NDC：159(哲学/倫理学　道徳/人生訓 教訓) 8.タイトル：「自分を愛せるようになる自己肯定感の教科書」 　著者：エレイン・N・アーロン(心理療法士,心理学者,HSP の提唱者)著 ; 片桐恵理子訳 　NDC：146.8(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/心理療法．カウンセリング) 9.タイトル：「わが子がやる気になる伝え方 : 性格 3 タイプ別の声が

		けで自己肯定感が高くなる」 　著者：稲場真由美(株式会社ジェイ・バン代表取締役。一般社団法人日本ライフコミュニケーション協会代表理事。人間関係研究家) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 10.タイトル：「自己肯定感が低い人のための 100 の言葉」 　著者：菅原隆志(メンタルケア心理士、アンガーコントロールスペシャリスト・うつ病アドバイザー) 　NDC：該当なし 11.タイトル：「多感な思春期に毒母と暮らして自己肯定感ゼロの少女になりました」 　著者：つつみ(インフルエンサー(インスタグラマー？)) 　NDC：726.1(芸術/絵画/漫画 挿絵 童画/漫画．劇画．諷刺画) 12.タイトル：「「自分が好きな子」になる子育て : 自己肯定感が高い子に幸せな人生がやってくる」 　著者：宮本覚道(社会福祉士、認定心理士、保護司) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 13.タイトル：「自己肯定感を上げる OUTPUT 読書術」 　著者：アバタロー(書評 YouTuber) 　NDC：019.12(総記/図書館 図書館学/読書 読書法/読書法) 14.タイトル：「うまくいっている人がしている自己肯定感を味方にするレッスン」 　著者：中島輝(心理カウンセラー) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 15.タイトル：「習慣化は自己肯定感が 10 割 : positive subconscious makes you act positive」 　著者：中島輝(心理カウンセラー) 　NDC：159(哲学/倫理学　道徳/人生訓 教訓) 16.タイトル：「3 歳までに芽が出る、その子だけの個性 : 小さな子どものための小さな保育園 : 基本的信頼感 自己肯定感 非認知能力」 　著者：福井渉(株式会社十色舎代表取締役。保育士) 　NDC：369.42(社会科学/社会/社会福祉/保育所．託児所．学童保育) 17.タイトル：「ドイツ人はなぜ「自己肯定感」が高いのか」 　著者：キューリング恵美子(ライフアドバイザー)

		NDC：361.42(社会科学/科学/社会学/地方性．国民性．民族性) 18.タイトル：「子どもの自己肯定感が高まる : ほめ方・叱り方の新常識 100」 著者：齋藤孝(教育学者) NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 19. タイトル：「自己肯定感 365 日 BOOK : 毎日みるだけ!」 著者：中島輝(心理カウンセラー) NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 20.タイトル：「1 日ひとつ、自己肯定感を高める 365 の言葉 : 少しずつ自分を好きになる心の習慣」 著者：トロイ・L.ラブ(ユマ・カウンセリング・サービスの所長であり、臨床部長)著 ; 山藤奈穂子(翻訳者、臨床心理士、公認心理師)訳 NDC：159(哲学/倫理学　道徳/人生訓 教訓) 21.タイトル：「働く人のための自己肯定感」 著者：中島輝(心理カウンセラー) NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 22.タイトル：「「自分が好きな子」になる子育て : 自己肯定感が高い子に幸せな人生がやってくる」 著者：宮本覚道(社会福祉士、認定心理士、保護司) NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 23.タイトル：「イラストでわかる自己肯定感をのばす育て方」 著者：諸富祥彦(心理学,カウンセリング専門)監修 ; モチコイラスト NDC：599(技術/家政学 生活科学/育児) 24.タイトル：「「自己肯定感低めの人」の人づきあい読本 : 仕事関係からプライベートまでスッキリ!」 著者：山根洋士(心理カウンセラー) NDC：146.8(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/心理療法．カウンセリング) 25.タイトル：「モンテッソーリ式おうち子育て : 自己肯定感が育つ遊び方、学び方"」 著者：エロイーズ・リックマン(世界中にクライアントを持つ,子育てコーチ)著 ; 山内めぐみ訳 NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育)

		26.タイトル：「あなたはあなたのままでいい : 子どもの自己肯定感を育む桑田家の子育て」 　著者：桑田真紀(夫が元プロ野球選手の桑田真澄氏) 　NDC：779.9(芸術/演劇/大衆演芸/放送演芸) 27.タイトル：「自己肯定感を高めて職場の居心地をよくする方法 : 会社の人間関係に悩むあなたに贈る成功法則」 　著者：浅野泰生(株式会社 think shift 代表取締役　ビジネスパーソンを自己実現に導く人財成長プロデューサー) 　NDC：159.4(哲学/倫理学 道徳/人生訓 教訓/経営訓) 28.タイトル：「自己肯定感にいいこと超大全 : 自分が嫌い&周りの目にビクビク…モヤモヤが 1 時間でスーッと晴れる!」 　著者：トキオ・ナレッジ(誰も知らないようなことに妙に詳しいクリエイティブ・ユニット、独自の視点で人間を切る知識集団) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/ 精神衛生．健脳法) 29.タイトル：「悩む心に寄り添う : 自己否定感と自己肯定感」 　著者：高垣忠一郎(臨床心理学者,「自己肯定感」の提唱者) 　NDC：146.8(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/心理療法．カウンセリング) 30.タイトル：「自己肯定感を高める 100 の法則 : ありのままの自分をすきになる最もシンプルな方法 : self-affirmation」 　著者：根本裕幸(カウンセラー,作家) 　NDC：146.8(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/心理療法．カウンセリング) 31.タイトル：「自己肯定感という呪縛 : なぜ低いと不安になるのか」 　著者：榎本博明(心理学博士) 　NDC：146.1(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/ 精神分析学．深層心理学) 32.タイトル：「人生レベルで心と体が変わる!自己肯定感ダイエット」 　著者：白井ゆりか(一般社団法人ハッピースリムアップ協会代表理事、理学療法士、自分軸ダイエットカウンセラー) 　NDC：595.6(技術/家政学 生活科学/理容 美容/痩身法) 33.タイトル：「あなたは、もう大丈夫。 :「幸せスイッチ」が入る

		77 の言葉」 　著者：中島輝(心理カウンセラー) 　NDC：146.8(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/心理療法．カウンセリング) 34.タイトル：「「自己肯定感」を高めて自分を大切にしよう」 　著者：古荘純一(小児科医、小児精神科医、医学博士) 　NDC：146.82(哲学/心理学/臨床心理学 精神分析学/児童の心理療法) 35.タイトル：「ことばのおまもり：自己肯定感を育む 28 の言葉"」 　著者：齋藤孝(教育学者)著；ニシワキタダシ絵 　NDC：159.8(哲学/倫理学 道徳/人生訓 教訓/金言．格言．箴言) 36.タイトル：「自己肯定感が高まる声かけ：「明るさ」「おだやかさ」「自立心」が育つ」 　著者：熱海康太(小学校教諭/教育者) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 37.タイトル：「自己肯定感 0 の私とロシア生まれの彼が出会ったら」 　著者：はり(インフルエンサー(Twitter で、モスクワ生まれのパートナーとの日常漫画を公開している)) 　NDC：726.1(芸術/絵画/漫画 挿絵 童画/漫画．劇画．諷刺画)

2022	26	1.タイトル：「子育て言い換え事典 : みんなの自己肯定感を高める : 性格別やシーン別に使える」 　著者：石田勝紀((一社)教育デザインラボ代表理事。都留文科大学国際教育学科元特任教授), カワグチマサミ(漫画家・イラストレーター) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 2.タイトル：「発達障害傾向のある子どもの居場所感と自己肯定感を育む関わり」 　著者：角南なおみ(教育学専門) 　NDC：378.8(社会科学/教育/障害児教育/情緒障害児) 3.タイトル：「0 歳児から 6 歳児の自己肯定感を育む保育」 　著者：今井和子(東京成徳大学子ども学部 教授) 　NDC：376.1(社会科学/教育/幼児・初等・中等教育/幼児教育．保育．就学前教育．幼稚園．保育園) 4.タイトル：「一生使える!プロカウンセラーの自己肯定感の基本」 　著者：古宮昇(臨床心理士) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 5.タイトル：「脳の名医が教えるすごい自己肯定感 : 自分を 100%肯定できる強い脳のつくり方」 　著者：加藤俊徳(脳内科医,医学博士) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 6.タイトル：「自己肯定感が高まる習慣力」 　著者：三浦将(株式会社チームダイナミクス代表取締役,人材育成・組織開発コンサルタント/エグゼクティブコーチ) 　NDC：159(哲学/倫理学 道徳/人生訓 教訓) 7.タイトル：「「非認知能力」を育てる 4 歳からの親子あそび : 自己肯定感・コミュ力・生きぬく力」 　著者：原坂一郎(元保育士,こどもコンサルタント) 著, 野崎武久 絵 　NDC：599(技術/家政学 生活科学/育児) 8.タイトル：「鋼の自己肯定感 : 最先端の研究結果×シリコンバレーの習慣から開発された"二度と下がらない"方法」 　著者：宮崎直子(認定ライフコーチ) 　NDC：159(哲学/倫理学 道徳/人生訓 教訓)

		9.タイトル：「小学生までに育みたい自己肯定感 : ICT 教材クリエーターのエドテック教育の実践」 　著者：玉井満代(ICT 教材クリエイター,脚本,演出家) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 10.タイトル：「ユルいメンタルの育て方 : 精神科医とスピリチュアルヒーラーが「自己肯定感」について語ってみた」 　著者：西脇俊二(精神科医)著 ; 吉濱ツトム(スピリチュアルヒーラー。発達障害カウンセラー)著 　NDC：493.79(自然科学/医学/内科学/精神衛生) 11.タイトル：「「自分大好き」から「未来大好き」に! : 自己肯定感を高めれば人生は輝きだす」 　著者：辻本加平(経営者,一般社団法人スクールコーチング協会理事長) 　NDC：159(哲学/倫理学 道徳/人生訓 教訓) 12.タイトル：「「『生きる』教育」 : 自己肯定感を育み,自分と相手を大切にする方法を学ぶ」(生野南小学校教育実践シリーズ ; 第 1 巻) 　著者：小野太恵子(大阪市立生野南小学校(実践時，現 大阪市立田島南小・田島中学校),木村幹彦,塩見貴志 編,才村眞理 　NDC：375.49(社会科学/教育/教育課程 学習指導 教科別教育/保健．体育科) 13.タイトル：「自己肯定感が低かった僕が自分を好きになれるまで」 　著者：赤星次郎(イラストレーター) 　NDC：726.1(芸術/漫画 挿絵 童画/ 漫画．劇画．諷刺画) 14.タイトル：「自己肯定感が高まる!好かれる人になる!言いかえ便利帳」 　著者：今井一彰(山口大学医学部卒業,2006 年に「みらいクリニック」開業) 　NDC：361.4(社会科学/社会/社会学/ 社会心理学) 15.タイトル：「人生が変わる!自己肯定感を高める心のセルフケア大全」 　著者：中島輝(心理カウンセラー) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 16.タイトル：「自己肯定感ハラスメント」 　著者：辻秀一(スポーツドクター,産業医)

		NDC：159(哲学/倫理学 道徳/人生訓 教訓) 17.タイトル：「自己肯定感が高まるうつ感情のトリセツ」 著者：中島輝(心理カウンセラー) NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 18.タイトル：「魔女が教えるマイルームインテリア風水：天宝占術で人生変わる!自己肯定感もアップ!」 著者：叶ここ(占い師) NDC：148.5(哲学/心理学/相法 易占/方位：家相，地相，墓相) 19.タイトル：「全米トップ校が教える自己肯定感の育て方」 著者：星友啓(Stanford オンライン高校校長 哲学博士) NDC：159(哲学/倫理学 道徳/人生訓 教訓) 20.タイトル：「自信のないあなたのための自己肯定感セラピー」 著者：松村有規(心理セラピスト) NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 21.タイトル：「自己肯定感が低くて挫けそうな時、明日の自分のためにゆでたまごをつくる」 著者：ちえ丸(インフルエンサー,YouTuber?) NDC：366.38(社会科学/社会/労働経済 労働問題/労働者の保護：婦人労働，年少労働) 22.タイトル：「学校の先生に贈る「ほめ育」メソッド：自己肯定感を高め、主体的に動く子どもを育む」 著者：原邦雄(教育実践家,ほめ育グループ 代表) NDC：375.1(社会科学/教育/教育課程 学習指導 教科別教育/学習指導＜一般＞．学習指導要領) 23.タイトル：「MANIFEST：マニフェスティング自己肯定感を高める 7 つのステップ」 著者：Roxie Nafousi(自己啓発コーチ、マニフェスト専門家)著，島崎由里子(翻訳家)訳 NDC：159(哲学/倫理学 道徳/人生訓 教訓) 24.タイトル：「弱さを抱きしめて、生きていく。：自己肯定感低めの元幹部自衛官が教える「心が疲れない 54 カ条」」 著者：ぱやぱやくん(元自衛官,インフルエンサー) NDC：159(哲学/倫理学 道徳/人生訓 教訓)

		25.タイトル：「アメリカ式子育てマジックフレーズ：子どもの自己肯定感がぐんぐん上がる」 　著者：シノブ・フィリップス(YouTuber) 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育)

2023	11	1.タイトル：「子育て 30 の極意 : AI 時代を生き抜く力を育む : 思考力・探究心・自己肯定感」 　著者：小関俊祐(桜美林大学心理・教育学系 准教授)ほか著 日経 xwoman 編 　NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 2.タイトル：「ちず先生と動画で一緒にマインドフルネス! : 子どもたちの心が穏やかになり、自己肯定感が高まる」 　著者：太田千瑞(スクールカウンセラー・東京成徳大学非常勤講師・臨床心理士・公認心理師) 　NDC：371.43(社会科学/教育/教育学 教育思想/教育診断．カウンセリング．精神衛生) 3.タイトル：「マンガでわかる自己肯定感低めでもうまくいく「心のクセ」読本」 　著者：山根洋士(心理カウンセラー) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 4.タイトル：「世界一簡単なニーチェ入門 : 無敵の自己肯定感を生み出す劇薬。」 　著者：大亀颯一郎(現役大学生,哲学・政治関連を中心にライターとして活動中) 　NDC：該当なし 5.タイトル：「ありのままの自分 : 大人の自己肯定感を育てる」 　著者：近藤卓(日本ウェルネススポーツ大学教授。専門は、健康教育学、臨床心理学) 　NDC：141.93(哲学/心理学/普通心理学・心理各論人格［パーソナリティ］．性格：性格学，性格検査) 6.タイトル：「現在住所は冷蔵庫。自己肯定感急上昇。 : 35 MESSAGES OF LIFE」 　著者：花上惇(悩める女性たちの「自己肯定感を支える」マルチクリエイター) 　NDC：159.6159(哲学/倫理学 道徳/人生訓 教訓/女性のための人生訓) 7.タイトル：「自己肯定感をとりもどす!」 　著者：高田明和(浜松医科大学名誉教授 医学博士) 　NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法)

		8.タイトル：「「自己肯定感」が低いあなたが、すぐ変わる方法」 著者：大嶋信頼(心理カウンセラー) NDC：498.39(自然科学/医学/衛生学 公衆衛生 予防医学/精神衛生．健脳法) 9.タイトル：「超メンタルコーチング BOOK : こどものやり抜く力と自己肯定感を一気に高める」 著者：飯山晄朗(メンタルコーチ) NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 10.タイトル：「12 歳までの自己肯定感の育て方で、その後の人生が決まる」 著者：ばなな先生(元小学校教師、「よかよか学院」校長) NDC：379.9(社会科学/教育/社会教育/家庭教育) 11.タイトル：「自己肯定感を高める、アドラーの名言」 著者：桑原晃弥(経済・経営ジャーナリスト) NDC：289.3(歴史/伝記/個人伝記/個人伝記（西洋人）)

[表 28：2014 年前後の論文タイトル、刊行物名、出版元のテキスト分析結果]

	抽出語	出現回数	複合語	複合語の補足
1	自己肯定感	222	自己肯定感	
2	教育	141	機関リポジトリ	
3	研究	91	総合教育技術	学校管理職と中堅教師のための教育総合誌(小学校教員のための教育情報メディア「みんなの教育技術」by 小学館)
4	保育	62	教育総合誌	「総合教育技術」の説明に関連
5	子ども	60	児童心理	刊行物名
6	実践	57	保育通信	刊行物名
7	学校	56	保育実践	「保育通信」において「自己肯定感を育む保育実践」が連載されている影響
8	心理	49	学校管理職	「総合教育技術」の説明に関連
9	総合	47	学校教育相談研究所	「月刊学校教育相談」の発行元
10	育む	46	自尊感情	自己肯定感と並べて語られているもの多数
11	児童	45	医中誌	医療,看護系の論文をまとめている
12	編	41	自己肯定感尺度	論文タイトル

13	機関	36	月刊学校教育相談	
14	高める	36	教育実践研究	雑誌,山形大学大学院教育実践研究科年報,愛知教育大学教育実践研究科(教職大学院)修了報告論集
15	リポジトリ	35	自己肯定	
16	活動	34	自己有用感	自己肯定感と並べて語られているもの多数
17	通信	33	日本教育心理学会総会発表論文集	学術論文
18	日本	33	中堅教師	「総合教育技術」の説明に関連
19	OF	32	内外教育	刊行物名
20	紀要	30	教育活動	論文タイトル

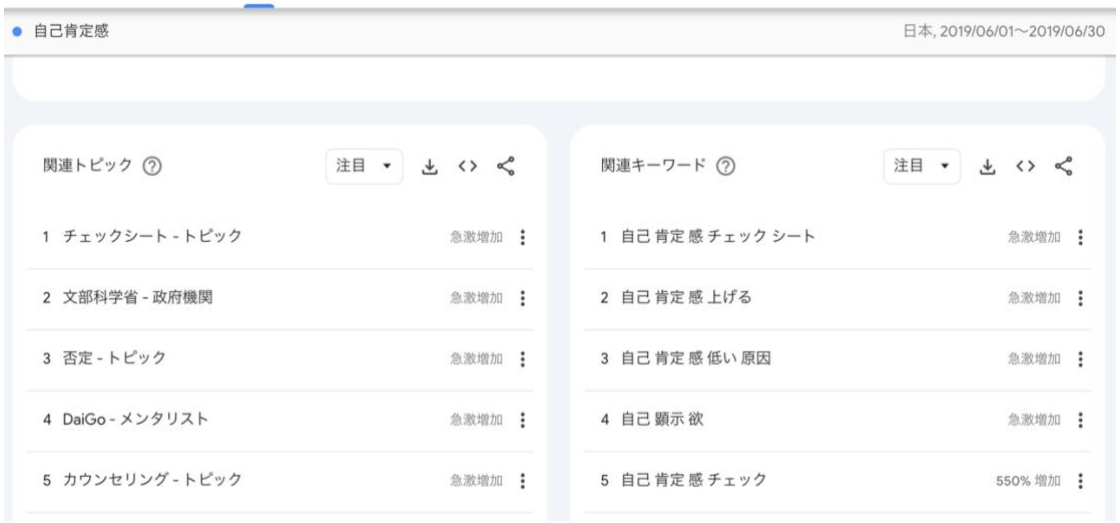
[表 29：2019 年前後の論文タイトル、刊行物名、出版元のテキスト分析結果]

	抽出語	出現回数	複合語	複合語の補足
1	自己肯定感	171	自己肯定感	
2	教育	117	日本教育心理学会総会発表論文集	刊行物名
3	研究	80	自己有用感	内閣の文書の影響
4	紀要	41	教育総合誌	「総合教育技術」の説明に関連
5	高める	41	医中誌	医療,看護系の論文をまとめている
6	機関	38	内外教育	刊行物名
7	編	38	自己肯定意識	
8	of	32	教育実践	刊行物名の一部
9	活動	32	総合教育技術	学校管理職と中堅教師のための教育総合誌(小学校教員のための教育情報メディア「みんなの教育技術」by 小学館)
10	学校	29	特別活動	刊行物名の一部(道徳と特別活動)
11	子ども	28	日本キリスト教教育学会	「キリスト教教育論集」の発行元
12	日本	28	科学教育研究	刊行物名
13	児童	25	研究紀要	
14	関係	24	文溪堂図書出版部	「道徳と特別活動」の発行元
15	学会	23	キリスト教教育論集	
16	生徒	23	教育科学	茨城大学教育学部紀要,東京学芸大学の紀要のジャンル
17	授業	22	自己肯定感向上	
18	支援	21	特別支援教育	論文タイトル

19	特別	21	教育現場	論文タイトル
20	自己	20	調査研究	論文タイトル

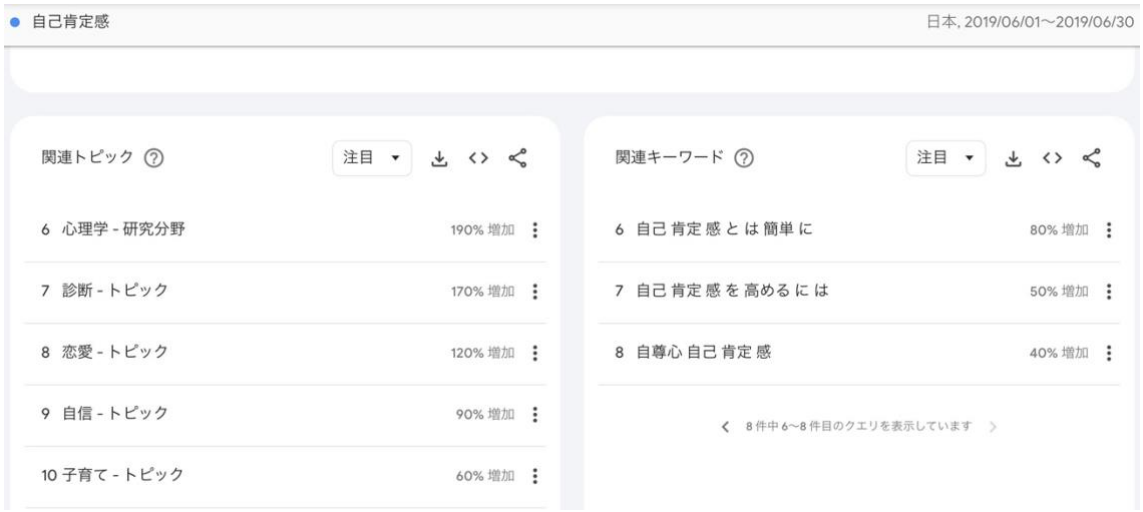
[表 30：Google Trends トピックとキーワードについて(2018 年～2020 年)]

［表 31：Google Trends トピックとキーワードについて(2019 年 6 月 1 日～2019 年 6 月 30 日)］



自己肯定感　日本, 2019/06/01～2019/06/30

関連トピック	注目	関連キーワード	注目
1 チェックシート - トピック	急激増加	1 自己 肯定 感 チェック シート	急激増加
2 文部科学省 - 政府機関	急激増加	2 自己 肯定 感 上げる	急激増加
3 否定 - トピック	急激増加	3 自己 肯定 感 低い 原因	急激増加
4 DaiGo - メンタリスト	急激増加	4 自己 顕示 欲	急激増加
5 カウンセリング - トピック	急激増加	5 自己 肯定 感 チェック	550% 増加



自己肯定感　日本, 2019/06/01～2019/06/30

関連トピック	注目	関連キーワード	注目
6 心理学 - 研究分野	190% 増加	6 自己 肯定 感 と は 簡単 に	80% 増加
7 診断 - トピック	170% 増加	7 自己 肯定 感 を 高める に は	50% 増加
8 恋愛 - トピック	120% 増加	8 自尊心 自己 肯定 感	40% 増加
9 自信 - トピック	90% 増加	8 件中 6～8 件目のクエリを表示しています	
10 子育て - トピック	60% 増加		

[表 32：Google Trends トピックとキーワードについて(2020 年 4 月 1 日～2020 年 6 月 30 日)]

自己肯定感　日本, 2020/04/01～2020/06/30

関連トピック　注目

1	セルフコンパッション - トピック	急激増加
2	自閉症スペクトラム障害 - 疾患	急激増加
3	自己 - トピック	3,250% 増加
4	自己肯定感の教科書: 何があっても「大丈...	50% 増加
5	うつ病 - 病	50% 増加

関連キーワード　注目

1	自己 肯定 感 低い 美人	急激増加
2	グッド ポイント 診断	急激増加
3	hsp 自己 肯定 感	400% 増加
4	セルフ コン パッション	300% 増加
5	自己 肯定 感 類語	160% 増加

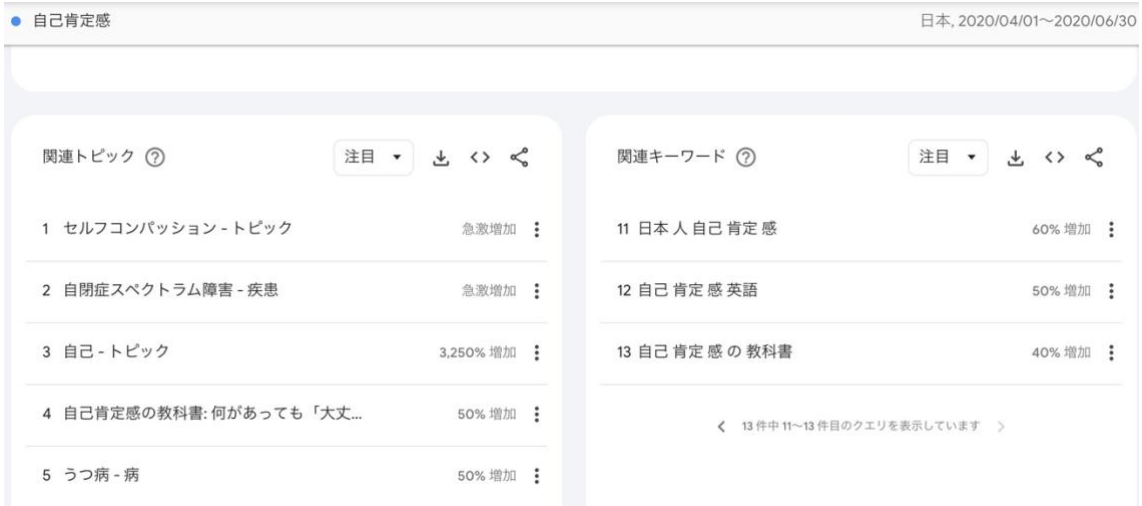
自己肯定感　日本, 2020/04/01～2020/06/30

関連トピック　注目

1	セルフコンパッション - トピック	急激増加
2	自閉症スペクトラム障害 - 疾患	急激増加
3	自己 - トピック	3,250% 増加
4	自己肯定感の教科書: 何があっても「大丈...	50% 増加
5	うつ病 - 病	50% 増加

関連キーワード　注目

6	自己 肯定 感 上げる 方法	140% 増加
7	自己 肯定 感 を 育てる	120% 増加
8	自己 肯定 感 論文	110% 増加
9	自己 肯定 感 を 上げる 方法	70% 増加
10	自己 肯定 感 子ども	60% 増加



自己肯定感　日本, 2020/04/01～2020/06/30

関連トピック　注目

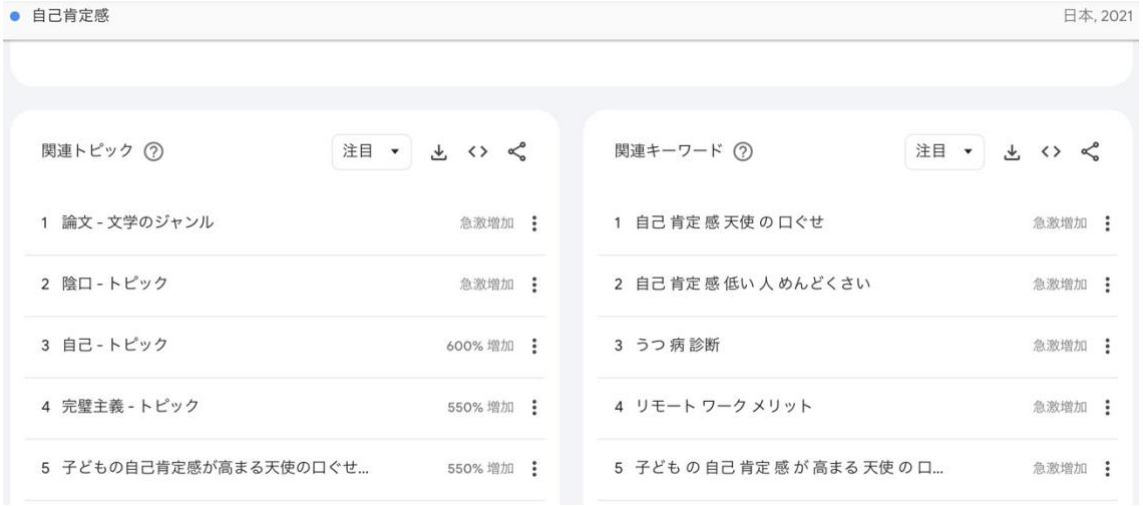
1	セルフコンパッション - トピック	急激増加
2	自閉症スペクトラム障害 - 疾患	急激増加
3	自己 - トピック	3,250% 増加
4	自己肯定感の教科書: 何があっても「大丈...	50% 増加
5	うつ病 - 病	50% 増加

関連キーワード　注目

11	日本 人 自己 肯定 感	60% 増加
12	自己 肯定 感 英語	50% 増加
13	自己 肯定 感 の 教科書	40% 増加

13 件中 11～13 件目のクエリを表示しています

[表 33：Google Trends トピックとキーワードについて(2021 年 1 月 1 日～2021 年 12 月 31 日)]



自己肯定感　日本, 2021

関連トピック	注目
1 論文 - 文学のジャンル	急激増加
2 陰口 - トピック	急激増加
3 自己 - トピック	600% 増加
4 完璧主義 - トピック	550% 増加
5 子どもの自己肯定感が高まる天使の口ぐせ...	550% 増加

関連キーワード	注目
1 自己 肯定 感 天使 の 口ぐせ	急激増加
2 自己 肯定 感 低い 人 めんどくさい	急激増加
3 うつ 病 診断	急激増加
4 リモート ワーク メリット	急激増加
5 子ども の 自己 肯定 感 が 高まる 天使 の 口...	急激増加

自己肯定感　日本, 2021

関連トピック	注目
6 プライド - トピック	450% 増加
7 「自己肯定感低めの人」のための本 - 山根...	300% 増加
8 肯定 - トピック	300% 増加

8 件中 6～8 件目のトピックを表示しています

関連キーワード	注目
6 習慣 化 は 自己 肯定 感 が 10 割	4,800% 増加
7 離職 票 届 か ない	4,450% 増加
8 私 は 私 の ま ま で 生きる こと に した	3,700% 増加
9 ブログ 稼ぐ	3,700% 増加
10 イン ポスター 症候群	2,600% 増加

[表 34：Google Trends トピックとキーワードについて(2022 年 1 月 1 日～2022 年 1 月 31 日)]

自己肯定感　日本, 2022/01/01～2022/01/31

関連トピック	注目	関連キーワード	注目
1 あさイチ - テレビ番組	急激増加	1 自己効力感	急激増加
2 悩み - トピック	急激増加	2 あさイチ	急激増加
3 アクセプタンス - トピック	急激増加	3 朝イチ自己肯定感	急激増加
4 思考 - トピック	急激増加	4 あさイチ自己肯定感	急激増加
5 目標 - トピック	急激増加	5 自己肯定感が低い人の特徴	急激増加

自己肯定感　日本, 2022/01/01～2022/01/31

関連トピック	注目	関連キーワード	注目
6 保育士 - 専門職	急激増加	6 自己肯定感テスト	200% 増加
7 自己中心性 - トピック	急激増加	7 自己肯定感自己効力感	140% 増加
8 不安 - 病	急激増加	8 承認欲求	130% 増加
9 モンテッソーリ教育 - トピック	急激増加	9 自己肯定感を高めるには	110% 増加
10 ゼミナール - トピック	急激増加	10 自己肯定感子ども	100% 増加